

新しい家庭科

わく

ウ

イ

1月号

男と女の新しいかかわりを



男と女の新しいかわりを

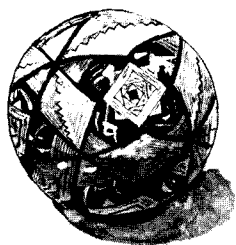
樋口 恵子

ベートーベンの第九の終楽章、混声合唱の出てくる場面に出会うとき、年々感動は深まるばかりである。技術の上手下手を越えて、男と女という異性がともに存在し、違いを持ちながら平等であることを、こんなにはっきりあらわした場面はあるまい。個性の差は厳然としてありながらも、総体としての女声・男声は明らかにその性の持つ特徴をそなえている。両声は声質も音域も違うが、両者が精いっぱいのみずからの声をはり上げている点では、全く平等だ。そして、男声のみの合唱にも女声のみの合唱にもない、奥行きの深い、幅の広いハーモニーを形成している。これぞ人類の声である。

女も男も舞台上上がり、みずからの声を出すとき、片方だけの性の声だけでは決して得られない、新たな世界が開かれるのだ。そして、男の世界も女の世界も、ともに豊かさを加えるのである。

これまでの社会は、舞台の上と下に、性によって居場所を分けしてきた。舞台の上で声を上げるのは男、そのための準備を下で整える女。そして舞台裏の仕事をすべて女にゆだねたほうが、男たちはより美しい音楽を奏でることができると信じてきた。女の声置き忘れたことによって、自分たちの音楽がだんだん瘦せてきていることにも気がつかなかった。でも、みんな少しずつ男女がともに舞台の上で歌い、ともに舞台裏の準備を整え、どちらも大切に共に生きること気づき始めたようだ。男女の豊かな出会いという舞台の開幕である。

(評論家)





We

1月号

男と女の新しいかかわりを

巻頭言 〈男と女の新しいかかわりを〉……………樋口 恵子

* 男と女の新しいかかわりを

男と女の新しいかかわりを—ことばによって—……………	寿岳 章子	2
男と女の古いかかわりが生んだもの……………	高橋喜久江	6
婦人保護事業を全滅させるのか……………	深津 文雄	10
背と妹と—夫として想う—……………	井田 邦弘	14
人間として、仲間として……………	曾田 蕭子	16
富士見産婦人科病院事件における男たち……………	本田 勝紀	19

* 新しい家庭科を創るために

小学校では	どんど焼き、葉……………	名取 弘文	23
中学校では	「貫頭衣」を縫おう……………	長尾 淑子	29
高等学校では	家族—絵本『おばあちゃん』を読む—……………	寺島 紘子	35
大学では	家庭科教師教育の内と外……………	木村 温美	41

* 発言 学習の主人公たち……………横浜市立公田小学校生徒 54

娘から父へ	中沢 孝江	58	
母から息子へ	小野美智子	59	
ガールフレンドへ	加藤 正人	60	
ボーイフレンドへ	小田亜佐子	62	
男性教師へ	自らの侵略性と対決せよ！	福本美紀子	63
教師のつぶやき	新米センセイ七か月	仁ノ平尚子	64
新井純子さんへ	寺島 紘子	65	

* 連載 視 点……………学校に「行く」「行かない」……………長谷川 孝 48

counselling 入門(現場から)	カウンセリングにおける人間観……………	児玉すみ子	50
We の読書室	自分を ひらく……………	横山 雅子	68
テレビ残像	I・WE・YOU……………	野村 康子	69
銀輪のうた	続 私のボランティア考……………	栗原 実抄	70
K子さんちのね子たち	トラとおばあちゃん……………	さとうけいこ	71
丙十舞雅里バラード	(9)……………	門野 晴子	53
波	男と女の新しいかかわりを……………	半田たつ子	72

Weになんでも言おう なんでも聞こう 66 / Weの会だより 74 / 報告 47 /
わたくしからあなたに 78 / あんてな 75 / 十字路 76 / “We” EDITOR'S NOTE 80

表紙 馬場洋子

We

男と女の新しいかわりを

男と女の新しいかわりを

——NHKのラジオ——

本誌で以前御紹介頂いたことのある、私の女学校時代の日記——昭和十一年から十三年までのもの——が、どういうわけか昭和五十八年二月末からドラマになって放映されることになった。NHKの「人間模様」である。四回のものであるが、すべての脚本を目にする事が出来た。シナリオ化する仕事は寺内小春さんである。

シナリオとは不思議なものだ。どうしてこれがドラマに、という感が強かったのに、ちゃんとドラマになっている。だから半分はあれよあれよということ、原作とは何の関係もない。ハラハラしながら気楽に見ていたらよいのである。ナレーションは私の反戦論や女性論をふんだんに使っているの、しんになる思想はたしかに私の責任ということになっている。

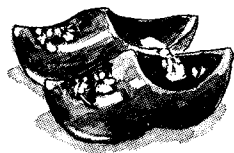
さて、少しは自分に関係があるが、何だかすぐったい気分になるそのシナリオを読んでいて、一つのこと気がついた。それは、父と母の対話の部分が、世の常のドラマの状況とかなり違う。父のことばがとていいいなのである。「ナントカナノデス」「ナン

寿岳 章子

トカカントカシマセンカ」という調子で、それは一般のドラマの用語のみならず、ふつうの家庭のことばづかいとはきわめて異質なのである。

こうまっとうにドラマになると、当事者の私も何やらすぐったいけれども、寺内さんはさすがにプロだけあって、いいところに気づかれたなと思う。一度私宅をおたずね下さったが、とても残念なことに、一年前に母は亡くなっていて、父と母のありようは見ていただけなかったが、父には会っていた。その父との話しあい、あるいは父と私との会話を耳にとめられ、日記、あるいは父と母の著作のいろいろをごらんになって、ドラマにおける父のことばを作り出されたのだろう。

それはたしかに、正しい取材だった。父はよその家庭の「世帯主」とはずいぶん違うことばづかいであった。もともと我が家はいたって庶民的で、何様風の上品なものではない（最近ある方と長い間おはなしする機会があったが、その「上品」について、言語研究者



としてつくづく思うところがあった。世の中にはたしかに上品なものとばつかいというものがあって、発声まで全く異なるのだ、そして私のことは決して上品部に入らないということがわかった。上品な人の話し方は、小笹をそよ風が渡るように聞こえる。私はおなかの底からの声でギャアギャアと言う。私の家の言語状況の特異性は、だから、そのてのものではない。方言も多く、非常にシンプルな表現、何よりも夫婦げんかもよくあり、そう物静かで品がいいというしろものではない。

「そんないやや、かなんわァ」

「そんなことゆうたらあかんがな」

という調子で親も子も話し合っているの、どちらかと言うと、悪いことばづかいかもしれない。しかし、一つのはっきりした特徴は、誰も君臨することばを使わぬということである。

君臨するのは誰か。普通一般には父であり夫であらう。事実、私はよその家にあそびに行つて、そこのお父さんのきついことばづかいにびっくりすることがしばしばであった。あそびに行っている私には目もくれず、へやからニューと顔を出して「おい、ナントヤラを持ってこんか」などと言っている。大体、我が家では父が母に「持ってこい」というような内容のことばを、そのような横柄な言い方で命令することなど皆無である。あなおそろしやと私はおじけづくが、友達はその日常茶飯事で、別に気にしている様子はない。

逆に、友人たちが私の家にやってきたときはおどろいたのではなからうか。やってきた人に父は居さえすれば、必ず「やあいらいっしゃい」というようなあいさつをした。娘の友達なんぞハナモヒッ

カケヌという式ではなかったのだ。

母が死んでから、父は私と暮らしている。女性が我が家をたずねてきて父に会えば必ず父は「やさしい」人ということになる。それは、母と愛しあつて長年暮らし続け、女に対していばるということがまるでなかったその暮らしのモットーを、今も父が信奉していることにほかならない。

だから父は私に対しても大そうていねいだ。テレビドラマを見ていると、とてもすばらしくやさしい父なのだが、「お前、行くなよ」というスタイルの物言いである。私がいかにそんな風に言われるとかなりびっくりするだろうと思う。

一方、私のことは悪く言えば乱暴と思われるかもしれない。父に対して「京都へ行かへんか」などと言っているしまつで、まるで対等である。そういう風にしろとは私は言う気は毛頭ない、自分でももうちょっとていねいに言つた方がいいかなと心中ひそかに思っている。しかし、長い間こういう方式でやってきたので、今さら変更するのも妙なものだからずるずると同じ式でやっている。

そんな父を見て、多くの人が感嘆する。そして次のことばは、きまつて「まあ、奥様おしあわせ、いい御主人様をお持ちになって」である。母はそれをひどく不愉快がっていた。ある意味では、そうした父より母の方がなおいっそう特異であつたかもしれない。家事は完全に半分は責任を持ち、完璧に対等な人間関係を作りあげていた母は、父をそうさせたと言えるのだから。事実母は私に、「私のようなのが妻だからこそあんなのだ」と語つたことがあつた。家庭内民主主義のキイは、日本の場合やはり妻にあると私は信じる。男性の命令で民主化がおこなわれても、それは鶴の一声型デモ

クラシーで、いつどうなるかわからないはかなさを含んでいるのではなからうか。

男上位型の日本の家庭への反発を、ふつうなら下位にある女性がそうはさせないでおくことは、なかなかしんどいことである。民主的なダンナサマは、「まあごりっばですこと、やさしい方ですこと」と、仰山な世の賞讃を受けるが、妻の方に関しては「まああの奥様、御主人様にあんなことをおさせになるのですよ」というひそひそ非難を覚悟せねばならぬ。身をおとす快感は男性の方にのみある。どうだ、オレはかく民主的なるぞ、とそこへいっても男はいばれる。

もちろん私の家では父は、あたりまえだと思い、かつ、家事（父はもっぱら掃除や力仕事）が好きであった。こんどのドラマにもはたきを父が作る場面があるが、この種のとわざにかけてはほんとうに父はうまくて、家中の誰もが、それは父がするのが当然と思っていた。戦時中の買出しやもらい出しも一切父、微熱がちできわめて虚弱であった母はほとんどその仕事はやらなかった。

そういう女のあり方は、これまでは賞讃の対象にはならない。ただただ一種の僥倖論で、羨望の対象になるだけだ。だから母は、「そういう父」を作り出し、かつ世間の陰險な非難に耐えるという二重の功績を持っていたことになる。

その母は「主人」ということば、「お前」ということばを嫌った。母は自分の夫のことを「主人」と言ったことはそれこそ一回もない。つい最近、母の友人に出会い、思い出ばなしにふけた。女性であるが、その人はいいお茶をいれながら、「お母さんはようゆうてはりました、うちは主人がお茶をいれるのうまくて。私は

いつも主人にいられてもらいますのって」。近ごろの流行語ではないがウッソオと私は心中叫んでいた。それは私の母のことばではない。母ならば、「夫」とか「文章」とかしか言わなかったはずだ。ところがその人は「主人」を使う人だ。つい、自分のことば、即ち「主人」を使う世界から「主人」を輸血したのである。

最近NHKの教育テレビで「気になることば『主人』」というのがあって、私も出演した。わりによくまとまった出来栄であったが、私はかなり感慨無量であった。というのは、「主人」にこだわる論をいろいろなところで発表しても、一向に世間の話題にならない。むしろ何を公式的なことを言っているときげすまれるのがオチであった。

しかし徐々に世の中は変わった。その「主人」を論じあうことがテレビで行われるようになった。私は感慨にうたれつつ出演した。もちろん「主人」ということば、まか不思議なそのことばの力はちょっとやそつとで消え去るものではない。一方に「主人」の頻度高い使用の状況をふんまえての「非主人論」はなかなか困難をきわめたが、そのテレビはまず「世の中には『主人』ということばを使わぬ人がある」という認識だけは確実に主張できたと思う。

その番組には丹波の生活改善グループの人たちが出て「自分たちが『主人』を『夫』にかえた」ことについて実にいい話をしてくれた。そのほかにも、いろいろな人が「主人」を使わぬ心境や実状をあれこれ語ってくれてとても勉強になった。

宝塚大橋のたもとに一つの彫像がある。てのひらの上に女が駆けているのをのせたごいねいなものであるが、そのてのひらは男のてのひらだと市長が言った故で大騒動がおこった。しょせん女

は男のてのひらの中を走りまわっているだけということになるその彫像をとつぱらえ運動が起こつて、多くの女性がその運動にとりくんだ。そのひとたちの話を聞いたことがある。その時おもしろく思つたのは、その人たちが「夫さん」ということばを使ったことであつた。自分の配偶者は「夫」でいいし、それは直ちに実行できるのであるが、他人の夫に關してはほんとに厄介である。ちなみに「主人」ぎらいの母も、長い間やつたY新聞の婦人欄の身上相談で、やはり相談者の夫に対する用語としては「御主人」を使っている。「夫さん」。ことばとしてはきわめて熟成してない妙な表現である。

むしろ不細工な表現であるが、とにかくその壮図たるや雄なりで、私は「主人」討論会の折、その人たちから話を聞いてきてくれるようNHKに頼んだ。そのフィルムはその橋のそばで、反対した人たちが「主人」から「夫」へを語りあつていた。

丹波の女人たちが「女」に生まれたことを呪いながら送つた多くの歳月は、また彼女たちの目ざめのそれであつた。女に生まれてよかつたと思ひつつ暮らして、ただ黙つて泣いている女から、ものを言う女へと變化したその人たちは、「主人」を捨てて「夫」を使い出したとき、自分のそばにいるあたたかさを感じたが、「主人」ということばは離れた冷いひびきがあると云つていた。

丹波の人たちの発言は大そうすばらしくて、いわゆる説得力に富んでゐた。出てもらつてよかつたと思つたのであつたが、その番組終了後、さまざまの反響があつた。そのすべてが丹波のフィルムには感心してゐた。一方、「夫さん」は不評で、ほとんどの人がなじまないし、おかしい、とむしろさんさんの言われようである。

しかし、彫像ひきおろしという運動の中で、「主人」ということ

ばはおかしいと気づき、「夫」に変わり、ましてそれまでにたえてない「夫さん」まで發明したのは、ただ批判だけして片づけられぬ光るものを含んでいる、私はむしろ評価さえしたい。そういう目で、女と男との間を洗い直すことの大切さは、人の心をうつものであつた。

さて、その番組を見ての感想の中に、丹波の人たちのことをほめて「夫」にかえて、「夫」についてその感じが變つた」と言っている人がいた。それも言えはするが、下手をすると、ことばをかえたら夫婦關係がよくなるような安物なことば運動になつてしまふ。

そうではない。こんなことばは、夫婦のあいだを言いあらわすのに具合わるいのではないかという思いがさきで、「夫」に變えればただちによくなるのでは決してない。おかしいと思う方がさきであり、あくまでも人間がさきである。そうでないと、ことばは民主的であるが、実体は必ずしもそうではないという別の実体のありようを説明できなくなる。「夫」「あなた」でありさえすればいいのではなく、そのことばを使わせている主体が必要なのである。

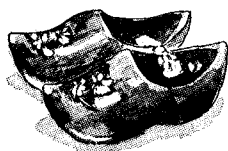
まことに、日本語は男と女のかかわりを奇妙に屈折した方法であらわにする鏡であつた。外国語の表現だけではわからない面を裏がわから指摘してくれた。男と女の一つのありようを生ま生ましく表現してくれた。そうでない形を表現するのにこんどは苦勞しなげればならないが、その新しい形を模索する女の人生もまたよきかなと言わねばならない。

(京都府立大学)

男と女の新しいかわらわ

男と女の新しいかわらわが生んだもの

高橋 喜久江



——バイシュンに寛容な日本——

男と女の古いかかわりが生む最たるものは売春である。男と女の性は、本来、平等な関係であるべきであるのに、もっとも不平等な関係が売春である。男は経済的優位を背景に女に対して性的搾取をおこなっている。性は欲びの行為であるのに、女には苦役、男にとっては排泄であるのが売春である。

売春問題にとりくんでいる私たちに共鳴しないひとびとが必ずいうことに、「売春は世界最古の職業だ。どこの国にもあることだ。宮殿にもトイレは必要だ。売春はなくならない」がある。そのほか多くの売春容認論が起ころので、パンフレット『どうして売春はいけないか?』を作成、頒布しているから、論駁はそれに委ねるとして、ここで強調したいのは、日本はバイシュンに対して寛容な特殊国ではないだろうかという、いわば私の思いこみ、色眼鏡的論考である。

売春史でいうと江戸時代は、徳川幕府により公娼制度が確立されたよくない時代である。江戸の華、吉原などといまでもおいらん賛美説があつたと断たない。しかし一方で売春業者の横暴は、人倫の八

徳を欠く亡^く八と社会的に位置づけられていた。文明開化に酔う明治時代に入ってからのはうが、売春業者の社会的地位がさがり公職にもつく存在になったとは廃娼運動家、伊藤秀吉の指摘である。

外国の古典劇・歌舞音曲は、日本の歌舞伎・落語などほど、女郎買いや売春婦をとりあげてはいないだろう。椿姫や身分違いの色恋沙汰は登場しても、バイシュンをテーマにするのは憚られる社会的基盤があるのである。日本の寛容ムードは創作時の過去だけではない。NHKは納涼番組、落語選集に、「幽女買い」を放映した。死んでも吉原にいくはなしである。埋もれた古典落語が何百とあるなかからの選択でわざわざ「買春」をとりあげたことをなじる私たちに、担当者の男性二人は真に納得した顔つきではなかった。NHKは以前にも、ふるさと番組で岡田茉莉子においらん道中を演じさせている。おいらん道中といえは先年、ベネチア観光祭に出掛けていった。訳せばプロステイチュート・パレードであるにもかかわらずである。毎年の浅草三社祭にも目玉商品になっている。

日本の売春問題を研究する外国人女子学生たちがそれぞれいったことは、日本人の買春に対する寛容さだった。「私の国では考えら

ない」という。日本社会の中に住みこんでの生活実感だったであらう。

接客業を代表するものに、むかし芸者、いまはホステスがある。初めのころと異なりいまや売春予備軍になった大量のホステス陣に対して、行政的にカバーする存在がないことを憂えるのであるが、それはいまここでは措くとして、ホステスの存在そのものを疑わない日本社会を告発したい。欧米では男女同伴のナイトクラブはあるが、「女の子」が待るバーやキャバレーは多くはない。女性の売春を前提とするセックス産業の異常な発達、日本独自の現象といつてよいだろう。

売春への転落原因に貧困が第一にあげられるのは論をまたない。戦前の貧乏国時代や戦後の混乱期ならいざ知らず、高度成長し経済力において世界有数の大国になったという日本で、あいもかわらず多くの女が身を売ってくらしをたてざるを得ない社会の仕組みとは一体何なのか。国の経済力を分母にして売春女性数を分子にした数値がとれるなら日本は大きいのではあるまいか。どの国でも確たる統計もないと思うが、経済大国の中でも最も人口比で売春人口が多いのが日本なのではないかと、私の色眼鏡はみるのである。

— 現在の状況 —

このようなバイシュン天国日本だからこそ、いわゆる欧米先進国に比べて公娼制度絶縁宣言が遅かった。公娼制度廃止は売春絶滅への第一歩であることは明白であるのに、我が日本国はその理を覚ること遅く、やっと一九五六年（昭和三十一年）五月、売春防止法が成立したのであった。婦人参政権行使十年目であり、女性たちの力の結集がかちえたといえよう。

そして今、公娼制度から絶縁したかといえさに非ず、政府は一九六六年、風俗営業等取締法を改正して、「公衆浴場法に基づく個室浴場内で異性に接触する役務を提供する営業」とトルコブルー営業を規定し、営業してよい地域を「制限」した。住宅地や首相官邸の近くに建つ計画は阻止できたが、代わりに一定地域内には営業できお墨付きを与えたようなものである。吉原は売春防止法施行後は灯の消えたような淋しさであったのに、これ以後、紅燈の巷として復活した。赤線でもなかった千葉市栄町や、大津市雄琴が有名なトルコブルー街になったのは、県による指定地域となったからである。売春防止法が存在しながらこの矛盾を受け容れている為政者、というより主権者の愚かさを噛みしめている。

売春防止法の二本柱は、一つは売春業の否定、一つは婦人保護行政の樹立であった。各県に婦人相談員がおかれ、婦人相談所、婦人保護施設が設置された。いま行政改革のもと、それらの事業を支える補助金打ち切りが取沙汰されている。永年にわたる廃娼運動の結晶である売春防止法の成果を二つとも失いつつある現在、自分たちの無力さを歎くとともに、ここに至らせた力の強さを感じざるをえない。ことばを換えればバイシュンを否定する力の弱さである。

— 性は社会の産物 —

私は「性は文化なり」の説をもっている。性はその社会の文化状況の現れであり、風習、生活感覚がおおいかかわってくる。日本社会は、性を人権、とくに女性の人権確立の面からとらえること薄く、好色心からとらえる基盤のほうが厚かった。それはいにしえより現代まで続き、すべてを商品化する社会では、女性の性を商品化し、男性の好色心の対象としている。性は人権であり、人格の尊厳

を担うものであるのに、薄汚れた好色心に踏みにじられている。キヤバレーしかり、ビニール本しかり、テレビのお色気番組しかりである。

一夫多妻時代は永く続き、法律的に一夫一婦が確立するのは敗戦後の民法刑法改正以降である。それ以前は妻には姦通罪が適用されても、夫が妾をもつのは許され彼女と再婚も可能であった。いまでも「妾をもつのは、男の甲斐性」「浮気するのは男の甲斐性」はまかりとおっている。政治家は女性問題が表面化しても失脚しない。いや表面化させる動きすら起きない。「政治家に金と女はつきもの」の「常識」が闊歩し、身辺清潔を要求する世論が出てこない。欧米などの政治家に国民が要求する水準より下回っていても自他ともにあやしまない。

性を些事とみる底流はあちこちで噴出している。現行刑法では強姦は二年以上、強盗は五年以上の刑とされている。そのことを知ったとき私たちは、「法律の定められた明治の昔は女はいなかったのだ」と口ばししたものだ。国会にも学界にも法曹界にも女性はいなかったから腹は借りもの式考え方が通用したわけである。映画「声なき叫び」は多くの女性の共感をえたが、強姦に対して男性と女性では認識が異なるのではないか。襲われても女はすぎがあるからだとは非難され、男は微罪扱いであるのなんとも承服しがたい。人間が、人権が犯されたのに、物が盗られたより軽い刑罰であるとは、国法の基準が間違っている。

強姦とともに近親姦の問題も無視できない。売春婦の転落原因に強姦と近親姦が多いのは、専門家の間ではいわば常識であるのに、日本の法体系では近親姦処罰の項はない。準備されている改正刑法

草案にも、はじめ盛られていたのに、いつしか削除されている。児童に対しての近親姦、地位利用の姦淫の処罰は法治国なら当然の措置であらうのに、学界も犯罪の非刑罰化を主張して、処罰の声は高まっていない。性の問題、とくに弱者の性を微罪としてはならないはずである。

先年、東京新聞は小学生の売春を報道するのに「性の暴走どこまで、小学生が売春」との見出しをつけた。そこには幼い少女を買った男へのいきどおりの姿勢は皆無である。戦前の日本は児童に売春をさせる者を処罰せず、戦後の児童福祉法制定でようやく処罰可能となったが、その児童福祉法も買春男性は無罪放免とするのである。

初めての性体験は、いわば刻印^{インプリント}されるものであるのに、それが愛から出発されず、暴力・金力によって犯されるのを看過してよいのだろうか。初めての体験が悲劇に始まり人生を歪めていくというのに、加害者が法的に野放し状態であるのはうなづけない。

経済を支配し、法制定と運用を担い、情報を送り出している男たちは、たとえ善意であっても踏みつけにされている女たちのうめき声は聞こえないのではないか。男性中心社会の構造を变革し、男と女がともに手をたずさえて歩む社会を作りあげることが、すべての人に真の幸福をもたらすと思う。

——買春をなくすために——

売春問題といえは性を売る側の女の問題とみなされてきた（たとえ「売春」の文字の中に買春男性の問題を含ませてきたにしても）。女が貧しいから、社会的弱者だから、自立してないから、はては性淫乱な女が売春するのだと人々は見てきたのではないだろうか。

「バイシユンは女だけの問題ではない。第一、買う男がいなければ売春は成立しない」と思ってきたので、観光買春問題が生じてきたときに「買春」を造語した。観光買春こそは、私たちがおかれている状況の矛盾が噴出したものといえよう。セックス版南北問題であり、観光振興を国策とするアジアの国々と日本とのかかわりの反映であり、利益最優先主義の旅行業界のなりふり構わぬ営業姿勢があり、性差別の社会構造などが観光買春を横行させている。

夫たちがアジアへ買春をするために行くことを、はじめ妻たちは知らなかった。その段階では妻は被害者であった。いま、ほとんどの妻は観光買春のことを知っている。そして夫を旅立たせている。ある妻はコンドームを旅行カバンに用意して。いまや日本の妻は加害者の立場にある。少なくとも加担者のそしりは免れない(妻たちに同情的にいえば、買春を責めて離婚に踏みされる社会状況にないし、夫たちを職場ぐるみ、組織ぐるみでアジアへ押し出す構造があるのだけれども)。日本の妻たち、女たちは、アジアの女性たちの人権を侵害すると同時に、自分たちの家庭の尊厳を傷つけ、崩壊に向かわせている。

観光買春問題にとりくんで九年、記憶にのこる事件があった。三年前の正月、東京の千住で新婚の妻が職場旅行で夫が台湾に行ったのを抗議してガス自殺をはかったという報道である。このような純情な妻は少なく、大半の妻は夫に買春されても、性病をうつされても、離婚にふみきる勇氣はなく、「夫の浮気は仕方がない、国内で恋愛されるよりアジアの商売女を買う程度なら妻の立場は安全だ」と割り切ることだろう。世人もまた、ものわりのよい妻をたたえ、ものわりの悪い妻を非難しがちである。アジアの人々から日

本の妻や母に非難の声が高くなるのも当然であり、私たちはそれを甘受しなければならない。

私たち女は、いままで日本社会の男性優位を攻撃してきたが、そしてこの攻撃はまだまだ必要であるが、女にも責任なしとはしない。女も社会構造に飼ひ馴らされてしまつて自ら立つ意欲を失いがちであった。ここに至るまでの構造の重圧を、教育の結果を思うのであるが、自ら求める意欲、たたかっていく努力は自分の責任である。

男と女のかかわりは複雑でむづかしい。人間社会そのものが、合理的というより不条理なものであり、人間そのものも理性的であるときも感情にはしるときもある。その中で性を基盤とする男と女の関係はどうあるのか。答は十人十色であろう。共通項は愛である。社会的動物である人間はひとりでは生きられない。他者の存在を必要とする。男と女の間は、「我と汝」の原点であろう。他者といいかかわりをもつこと、平等な関係を築くこと、犠牲者・抑圧されるものをつくらない状況づくりが大切なのであろう。

最も愛のない関係がバイシユンであり、愛から始まる結婚生活にしても、結婚という日常化のかたちをとるとき、愛は風化していくし消滅する危険も大きい。波乱がまちうける人生の一駒一駒を、矛盾の多い人間存在をどう受けとめ乗り越えていくか、一人一人の生きざまにかかってくる。危険や波乱をのりきるには女性が主体性を確立して生きることなくしては到達できない。それはまた、人生のよきパートナーたる男性と共に歩むことによって可能であろう。

(日本キリスト教婦人矯風会)

男と女の新しいかわりき

婦人保護事業を全滅させるのか

深津 文雄



82・10・12付の毎日新聞が、第一頁の冒頭で特報した所によると、臨時行政調査会は国庫からの補助金等の無駄を整理するため一九の項目をかかげ、そのなかに「婦人保護費」をいれたという。これはとんでもない謬見で、将来の日本にとって極めて危険な決断であることを知っての上であらうか？

もし、売春防止法も一応の目的を果たしたと見るのならば、近視眼も甚しい。神代以来おんなならでは夜の明けぬ日本に、最近四〇〇年デンと栄えた公娼制度を、明治以来の先覚者が、文字どおり血を流して叩きつぶしてから、まだ四半世紀。形を変え名を偽り甦ってくる社会病を根絶するには、まだ百年はかろうというものを、ここで補助打ち切りとは、どういう了見か？

いかに日本経済が左前とはいえ、最低点の汚濁をぬぐう紙一枚ないはずはない。

よく、婦人保護施設は収容率が低いと言われる。しかし、これは一部の公務員が怠けているからで、我々の所では、いつも満杯。手もおろせない満員電車で二五年走り続けたのと同じこと。

『全国』の赤線青線の灯が消えた時、トラックにのせて彼女たちを都

庁の前に降ろしてゆく。その晩とめる場所をさがして、お宅は廊下の隅までギッシリ寝かせて何人入りますかときかれた。その当時の定員が改定されていないのである。

そのうえ、婦人保護というような地上最高に重い仕事を、ただ数字で判断しようというのには腹がたつ。ひとたび泥沼に沈んだ人間を家に引き取って世話をし、文字どおり生まれかえらせて出すまでには、普通の施設の五倍も十倍も手間がかかる。

臨調は、たった二三億円をケチって、日本の倫理を崩壊にみちびく勇氣があるのか？ 目を覆う倫理崩壊のさなかに身を挺して人柱として立つ人々を、みすみす見殺しにするのか？

一九八五年、世界婦人年の総決算が行われる日、我々の同胞はいかなる顔ばせあつて国連に臨むのか？ 臨調の任務は、役所のゴミを拾うことであつて、ゴミと見誤つて船底の水栓をぬぐことではない。もしそれをすれば、我人共に藻屑となる！

今回、臨調が軽率にも「こんなもの取払ってよし」と考えた、婦人保護費とは、一体なにか？

婦人保護費とは？

わかりやすく言えば、売春防止事業のために厚生省がもっている予算のすべて、それがタッタ二三億。この僅かなものを一年かかって小出しに全国の都道府県にくばり、都道府県もそれにいささか上乗せして、四七五人の尖兵（婦人相談員）、四七の窓口（婦人相談所）、五七のホーム（婦人保護施設）にバラ撒いているものである。そこで相談に乗ってもらえた女性は何年十万人を超える。その三分の一が売春したものが売春しそうなもの、あとの三分の二は、いわゆる駆込寺式のもの。

そこが臨調の気に入らないのである。売春防止とうたって売春と関係のない仕事をしているから。

三分の一の数字には精密さを欠く誤算がまざっている。あきれたことに地方公務員のなかには「いちど売春といってしまうと一生浮かべないのよね」といった安易な同情の誤摩化しがある。我々が手にしてみても、「其他」から「虞犯」に、「虞犯」から「売春」に書き換えなければならないケースが無数にある。ということは、重いものを拒否しているばかりではなく、重いものを軽いものと偽って数えているのである。

さらに、三分の二を占める駆込寺を売春と関係ないと言いきれるかどうか―主婦売春の網がくまなく張られた現代の日本では、酒癖の悪い亭主になぐられて裸足で飛びだした主婦の翌日は売春かもしれない。出来れば、年と共に低年齢化してゆく少女の性非行さえも取り上げねばならない時代である。

臨調に、そこを深く読みとってもらいたい。

つぎに、収容施設のほうであるが、これが五七もありながら、

平均収容率五〇％を割って、久しくなる。だが、これは全国を平均しての話で、われわれのところは満員、現に希望者があっても待つてもらっている。それでも数字のうえだけで見れば一〇〇分の八三とか、一二〇分の八三とか出ない。これは、精神病寛解者とよばれる部類の人が多くて、親切な病院と始終ゆききしているからである。その分を加えれば何時も大入満員、あふれだしそう。

こういう過密を優れた経営だと考えてしまうのは、あまりにも現場知らずである。収容定員とは何か？ それは、もともと最低基準として、これ以上入ってはならないという限界である。落着かせたいと思えば、五〇％が最適。収容率が高いということは、一人あたりが狭いということで、待遇が低い、安定性が悪い、人権が無視されているということと同じなのである。

この事業に手をつけた時、東京都婦人相談所長に挨拶にいった。その時、思いがけなくも、「五つある他の寮で取ってもらえない重いケースを」と頼まれた。間尺に合わない話だが、ひとがそう期待するなら、忍耐に忍耐を重ねて、それを取ろうと決心した。それ以来二五年、婦人保護費の底点を志向してきたつもりである。

一人で五人分も十人分も重い人を引き受けて、それに成功するためには、精神力だけでは永続きしない。それに見合う物量が必要である。他の十倍のものを投入できるか、やってみた。国庫補助一千万円をもらって、一億円の建設をした。一人あたり三五〇坪の作業地を備え、定員をはるかに超える職員をおき、養老から納骨まで完備した―これが税金の無駄使いかどうか、考えていただきたい。

売春防止法はどうして生まれたか？
こんな法律は要らないのである。もし、日本人がもう少し人間ら

しくあれば……。ところが、太平洋から来たのか大陸から来たのか、日本民族は世界まれなる好色民族で、男女の乱れよりはか何も楽しむものを持たない。これが「神代以来おんなならでは夜の明けぬ国」と歌われた公娼制度である。「フジヤマ・ゲイシャ」と世界に知れわたった醜態である。

幕末にも、改革を断行した上杉鷹山、鍋島直正、河井継之助、井伊直弼などがなくはなかったが、明治になって最初に廃娼を唱えたのは、榎本武揚と共にオランダに留学した津田真道であった。「人身ヲ売買スルハ禁スヘキ議」を公議所に提出したのは一八六九年のこと。その思想はマリアルス号奴隷解放の副島種臣や大江卓にも、その直後の「芸娼妓解放令」の司法卿江藤新平にも受けつがれ、『明六雜誌』をとおして心ある青年の心に灯をかけた。

吉田松蔭におくれること一〇年、首尾よく脱出に成功した新島襄がキリスト教に改宗して帰国し、まず洗礼を授けたのは湯浅治郎であった。群馬の宿場町の乱れに手を焼いた儒者真下珂十郎が、「貸座敷改善」を提起したのを、県会で取りあげ、青年猛運動に発展させ、一八九三年、初の廃娼県を実現したのは彼の功績である。

この戦いに最初に駆けつけたのは島田三郎、『女学雑誌』を根城に全国の廃娼運動を指導したのは巖本善治。飯野吉三郎、伴直之助、徳富猪一郎、渡瀬寅次郎、津田仙、根本正、中浜東一郎、植村正久、黒岩周六、小島官吾、三宅雄二郎、森林太郎、星野光多、大西祝、横井時雄、田村直臣、木村熊二、平岩愼保、植木枝盛などが廃娼同盟を組織して戦ったが、存娼論のほうが強かった。

一八八六年レヴィット夫人がアメリカから遊説にきた趣旨は禁酒運動であった。酒乱の夫と別れ女学校校長になっていた矢島楯子は同

志とこの運動に立ちあがったが、その名称を「矯風会」とし、単に禁酒禁煙に止まらず廃娼を運動の第一義とした。以来、潮田千勢子、小崎千代子、林歌子、岸登恒子、沢野くに、久布白落実……と世紀にわたる廃娼運動をくりひろげたのは正に壯観。宣教師にはマーフィという変わり種があつて、名古屋で教員をするうち遊郭に足を踏み入れる落伍者に心いたみ、木下尚江などと廃娼に立ったが、泣きついてきた娼妓の廃業手続を指導して勝訴（一九〇〇年）。

これが契機となつて、山室軍平たちの救世軍が立ちあがり、遊郭内で太鼓をたたいたので多くの怪我人は出たが、一年に六千人余の自主廃業者を出した、歌にいう「東雲のストライキ」時代である。山室機恵子、矢吹幸太郎、山田弥十郎、伊藤富士雄、羽柴末雄などは、文字どおり血を流して戦った。忘れてはならぬ人たちである。

一九一一年、吉原に大火があり、矢島楯子の機敏なる運動により廓清会が生まれた。鍋島直正の改革の年に生まれた清潔な政治家大隈重信を顧問として、衆議院議長になった島田三郎が会長、安部磯雄、矢島楯子が副会長……実務は満洲婦人救済所を創立した益富次郎、そして満鉄にいた伊藤秀吉が、終戦まで息のながい戦いを展開した。これには仏教も合流した。廓清会と矯風会は廃娼運動については廃娼連盟を組織し松宮弥平を先頭に立てた時代もあるが、一九三五年いそいで解散した。業者側からの甘言につられたのである。

戦争が激しくなり、国内では売春どころではなく、続々廃娼県があらわれたところで終戦。日本政府は無電指令で占領軍兵士にそなえる慰安所をつくらせたが、性病が蔓延し、ついにマッカーサー指令で公娼制度廃止となる（一九四六年）。

これで何もかもすんだと思ったのは運動家だけで、パンパンごっことは流行し、赤線だ青線だ白線だと、終に高校生制服売春まで出現し、やはり厳罰を規定しなければならぬ。いや、それは出来ぬ。

そこへ戦犯解除された市川房枝が参議院議員となり、衆参婦人議員団を結成、院外の久布白落実の活動とあいまって、ついに一九五六年五月二日、売春防止法は成立した。

ここで初めて、日本国民は売春が人間性に逆う行為であることを知らされ、これを業とする者は厳罰、これに従事させられた女性には公費で保護指導を受けられるようになった。

ザル法と悪評される、この一枚の紙切れが、産み出されるまでに、なんと八七年。いくたりの血が流され、涙がしぼられたか——それを読むものは、あとにも先にもない大運動の盛りあがりと挫折に昂奮する。いまや婦人問題は出版界のブームとなり、なぜか人々は廃娼史に目を見張る。それなのに、我々の怠慢と不注意から、売春防止法が壊滅するようなことが起こればいや、すでに起こりつつある——地下の霊は何というだろう？

後世にむかって、何と語り伝えるつもりか？

なにより恥ずかしいのは、世界婦人年の総決算が行われるという国連の舞台である。汲みいれても汲みいれても、日本という器の婦人の水準はあがらなかった。それは器の底点にあった小さな一つの穴をふさぐことを怠ったからであるという、そんな間のぬけた報告を誰ができるか？ この法律を捨てて、帯の解けてしまったような日本の倫理のどこで、我々の子や孫や愛するものたちは健全に成長できるのであろう？

これからの日本

何千年流れてきた大きな河の流れを、二五年や三〇年で変えようということが、そもそも無理である。生きている間に出来なければ次の代で——と、ボクに教えたのは久布白落実であった。

ボクは社会の底点を志向して生涯を終わり、さらに次代に何を遺そうとするのか？

じっと眼をつぶって創造者にきく。いったい人間は何故、男と女に作られたのか？ それも等数に……。その答えは余りにも明瞭である。男と女が二人きりになって、全き結合を遂げるためである。

全き結合とは、精神的にも肉体的にも、他に類のないような深さにおいて、真実において、おこる。平凡なようで、そうザラにありうるものではない。そこに物すごい自覚が必要であり努力が必要となる。それが純潔であり、貞操であり、信頼であり、寛容である。

人間はすべて一人の父と一人の母の間にしか生まれぬ。そしてその母の胸を必要とし、その父の手をあてにして、人間に育つ。鳥が巣を作るのは卵を生むためである。人が家庭を営むのも子女を育てるためである。

教育とは、まず父母が良い模範を示すことである。父母の持つていないものを子女が継承することは出来ない。子供にさせたくないことは、親がしないこと、子供に見せたくないものは、大人が作らないことである。

あまりにも男性本位の、わがままな、自制心の足りない、思いやりのなさのなかに、もう少し女性の気持も、子供の幸せも考えてもらえる余地を作り出すように、これから百年を共に進もう。

（かにた婦人の村」施設長）

男と女の新しいかわりを

背と妹と

——夫として想う——

背と妹と

仲間と萬葉集を読んでいます。

私の心をうつのは、名もない人びとの歌です。そこには、汗を流して働き、ささやかな幸せを待って暮らす喜びと哀しみがにじみ出ています。

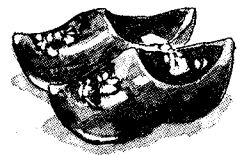
当時は、愛する男（夫）のことを背・背子（せ・せこ）、いとしい女（妻）のことを妹（いも）と呼びました。庶民である男と女、背と妹は、対等に生きていたようです。

紫は灰さすものぞ海石榴市（つばいち）の八十のちまたに逢へる子や誰（12—13—14）

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか（12—13—14）

そのころは、女が名を告げることは愛を受けいれることでした。つば市の街角で会った見知らぬ男の誘いに、あなたは一体どなた？と

井田 邦弘



対等に立ち向かい自分を主張するさっそうとした乙女の姿が偲ばれます。

わが背子はものな思はし事しあらば火にも水にも我なけなくに（4—5—6）

事しあらば小泊瀬山（おはつせ山）の石城（いわき）にも隠らば共にな思ひわが背（16—17—18）

事しあらば、水火をいともわず、石の墓にも一緒にという萬葉の女性には強くしつかり者でした。

草枕旅ゆく背（せな）が丸寝せば家なる我は紐とかず寝む（20—21—22）

わが妹子が偲ひにせよと付けし紐糸になるとも我は解かじとよ（20—21—22）

防人とその妻の歌です。萬葉のころは男と女もやさしかった。

主人と家内と

その後「家」中心の道徳に押しやられて女性の社会的地位は低くなりました。夫婦の呼び名も「主人」と「家内」が普通になり、それはいまもなお、そのまま生きています。

世間には働く妻が増えました。そんな妻をも夫は「家内です」と紹介し、妻も夫を「主人」と呼んで甘んじています。おかしい。主人の反対語は家来、奴隷。家内とは内に居て家事をする人から来たのか。

新しい夫婦はこの呼び名の否定からはじまります。

さて、それでは何と呼ぶか。亭主、旦那、夫、うちの、父さん。片や、女房、カミさん、細君、妻、うちのヤツ、母さん。無難なのは夫・妻でしうがかたい感じ。いまの日本にはピッタリした呼び名がありません。萬葉のころの背と妹が羨しくなります。

私は人に、わが「妹」のことを名前でいいます。「妻の恵子です」と紹介し「恵子は横浜に出かけています」などと。知人も「奥様によろしく」というより「恵子さんによろしく」といつてくれる人が多くなりました。困るのは、恵子なるものの実物をご存知ない人から、「その恵子さんというのはお嬢様ですか」といわれるときです。テレくさい。私は「娘の母親です」と答えます。

夫婦の呼び名は、家庭の民主化の度合いのあらわれだと思います。夫と妻は、夫婦である前に一人の人間である筈です。新しい呼び名をまざぐりそれを定着させたいものです。

仕事をもちわが「妹」

婚約して二十七年、結婚してから二十五年になります。私は当時「死に至る病」であった結核で悩んでいました。再発して再入院を

いい渡されたとき婚約したのでした。わが「妹」の決断にいまでも一目おいています。

そのわが「妹」も弁護士です。仕事を始めたときは女性弁護士の数はごく少数でした。病身の私をかばいながらのかけ出し時代はきびしい毎日でした。

幸い、私の健康は人なみにもり、二人の子が生まれました。いまは息子二二歳、娘十八歳。幼児のころは大変でした。待ったなしの毎日、悪戦苦闘の毎日でした。それでもわが「妹」は産前産後の数ヶ月休んだだけで仕事を続けました。そして次第に沖繩、売春、家庭科女子のみ必修、男女雇傭平等法、トルコ風呂問題など、女性の権利にかかわる問題に活動の幅を広げました。苦しみ悩みつまずきながら、です。「少し手を抜いたら」といつても聞きません。単細胞的人間（娘のことは）は困ったものです。その同居者も大変です。

そんな姿を見ていて、いざとなると女性強い、としみじみ思います。

今年は、知友に推されて弁護士会の理事者の一員となり、目まぐるしい毎日です。立候補を促されたとき、東京の弁護士会では女性としてはじめてのこととて本人も尻ごみをし私も反対しました。娘はそんな態度を批判しました。女性の権利とか地位とか口にしなから何たること、実践こそ大切。家庭子どもが心配だからと逃げるのは卑怯。そんな親は軽蔑する、というのです。息子もこれに同調。結局、子にはげまされて立候補を決断しました。子育てをしながら、子に教えられ育てられて来た私たちです。

夫と妻の生活のパターンはいまや完全にひっくりかえています。

す。朝早く出かけて夜おそく帰るのがわが「妹」、食後の皿洗いを済ませてこの原稿を書いているのが夫の私。

時どき「井田さんって、東弁の副会長のあの井田先生と何か関係がおりですか」などと尋ねられて苦笑します。「このところゆっくり話をしていませんが、私の配偶者でして」に相手も微笑笑。

憩える帆は汚い

世間ではさまざまな家庭があり、いろいろな夫と妻の生き方があります。妻が外で働き夫が家の中で自分の仕事をする夫婦だってあります。妻が文字とおり「家内」として家事だけやっているかた

男と女の新しいかわり

人間と人間、仲間と仲間

「男も女も人間である、仲間である」こんなあたりまえなことはい。誰だって反対しないだろう。

でも、どうだろうか。

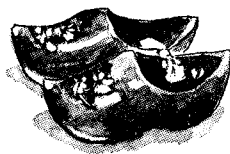
実際にしみてみると、「男も女も人間なんだなー。仲間なんだなー」と感じるような場面に居合わせることはいったない、とほとんど

ちがまだまだ多いでしょう。それはそれでいいでしょうが、ひとつだけ私はいいたい。夫も妻もマイホームの内側だけに目を向けてはいけない。たえず社会に働きかける生き方をすべきだ、ということです。

妻の地位は法律上安定しています。それだけに、通い婚で愛だけが男と女を結ぶ絆（きずな）であった萬葉時代の、あの緊張感に欠けます。「憩える帆は例外なく汚い」（大宰治「斜陽」）。妻は夫や子だけに目を止めず生きた社会に顔を向けるべきです。また、妻を「家内」でなく生き生きとした姿にさせるのは夫の責任でありましよう。

（弁護士）

井田 蕭子



の男も女もいう。

それはわかる。社会のありようそのものが男と女にきっちり分離されている。日本は会社社会であり、会社は男社会である。軍隊に似ている、という人もある。利益というたった一つの目的のための、管理された閉鎖集団。なるほど、本質的に似ている。

女はこの二つの集団から排除されている。ないしはまったく補助的な役割しか与えられていない——むしろ女を排除したから軍隊になったのだ。

私にこのことがわかるのは、実は頭の中でなのである。私の感覚の中には、男たち・女たちを含めたさまざまな小さな場面が込められている。私はどういうわけか、若い時から今まで、ずっとそんな体験をしてきた。

私の高校は男と女が三対一の、旧制の中学だったところだった。先生たちは、「女の子が入ってきて迷惑だ」「女の子の成績は一年・二年・三年とずっと落ちていく」などと平気で言った。威圧的な空気が女の子たちの胸にも心臓にも侵入して来て、息の根も止まりそうだった。

でも私は、まったく違った雰囲気の間も持っていた。生徒たちがつくる場だった。

初めてコーラス部にいったとき、上級生たちがすきな歌を持って来て即興でカルテットをしていた。ハーモニーしていたのは音だけではない。音を出す人たちの気持がまずハーモニーしていたのだ。

その場のみずみずしくはりきった雰囲気はそう語っていた。

自治会で新聞をつくる時も、学園祭の劇の脚本を雷雨で暗くなつた廊下で刷る時も、窓枠をはずしてパレットがわりにして（！）舞台装置を作るときも、そこに流れていたのは同じ人間的な雰囲気だった。その中で私は、女の私もまぎれもなく人間であり、信じられるものなのだ、というクッキリとした感じを持った。

制度的につくられる大きな場と、私たちがのぞみをふくらませる

ためにつくった小さな場。管理的な場と人間的な場。一つの目的に硬くなった場と、いのちのリズムの脈うつ場。

小さな場の方には、人の心を動かし、動かされる何かがあった。

人の心を解き放ち、明日を自分の感じの湧いてくる方に形づくらせる何かがあった。そんな中では男女のきまりきった役割り意識は、どうやら顔の出しにくいものらしい。

それを生活ぐるみ地でいったのが、共同保育体験だった。子供も育てたいし職業生活も続けたい、それなのに保育所がない、という家族何組かを中心にして、保母さんをたのみ、場所を確保して、共同保育していくのである。

無いものを作るといふのは大変だ。まして乳飲み児を育てよう、という大人たちの生活の根っこにおりた、新しい命そのものにかかわる場を共有する、というのは客観的には困難な仕事であろう。それもまわりに（国にも！）反対されたのだから。だけど、私たちには出会った瞬間から、やれるなとピンとくるものがあつた。どのカップルも、明日をつくろうとする暖かさをただよわせていた。

庭を整備し、砂場をつくり、廊下を広げ、部屋を整える。ベビーベッド、たんす、冷蔵庫をもらいうける。保育所をつくろうというビラをつくり配り、保母さんを募る。男も女も淡々とてきぱきと仕事をかたづける。昼間職場に働きかけ共同保育に帰っては署名を求めるために深夜まで「会議」をする。おむつをたたみながらの「会議」である。

わきにうちよろしている子供たちの世話をする。うちの子もよその子もない。男も女もない。時間も知恵も、経験も、やさしさも、技術も、直感も、しっとりと組みあわせられて明日が紡ぎ出さ

れるのだ。

私たちは自分たちのつくり出した場が原動力となって職業が続けられることに心底感動した。まさに奇跡だった。……でもその奇跡の感覚は実はもっと奥の方から湧いて来ていた。人と人の出会いがかくも豊かなエネルギーを触発する、ということ自体に私は震えた。生きるというのはこのことだ、と思った。

現代において人と人とは深く分断されている、という、男と女ではまったく考え方がちがう、女でも職業をもつ人ともたない人ではまったく合わない、という。

そうかもしれない、普通には。でも生きるという行為は、深い意味をもっていて、溝を一気に飛び越し深いかわりの網の目を紡ぐことがあるのだ。

共同保育で出会った女たちが中心になって月一回「かたる会」というおしゃべりの会を地域で始めた。実は読会だったはずなのに子供の教育、自分の受けた教育のはなし、食べ物のこと、夫とのかわりのこと、職場でのこと……。とまらないのだ。名前が予見するように、私たちはしゃべった。女どうしのおしゃべりの楽しさの中に、真剣さと実行力が宿ったとき、私たちはこの真中に込められているものこそ、生きることだ、と感じた。もはや家庭の主婦だからといって家にとじこめるのはいやだ。牛乳・野菜・卵などの共同購入をする人。市へのコンピュータ導入反対の運動にかかわる人。一緒にみそをつくり、コンサートを計画する。夫たちに来るように誘う。女たちが心動かされる場にどうして男たちが心動かされないことがあるのか。男たちだって地域に本音でかたる場があり、さまざまな問題や考えが示され深められる場を共有することに、どうして

ためらうことがあろうか。ためらうことがあるとしたら例の男意識によるのであろう。来ない夫たちがいても私たちは気にならない。

男たちは、ある時は友人をつれて来た。ある時は、自分の若い頃を語った。ある時は、一九六〇年頃の三池の争議の映画をまわした。話は六十年の安保闘争のことになり、まだ若い彼は私に「なぜ強行採決ぐらいで人々がこれほど怒ったのか」と問うのだった。彼は実はなぜ今人は怒らないのかを心に問うていたにちがいない。

男から女へ、女から男へ、若者から中年のものに、若い人から若者に人間的な問いが発せられ、その問いがまわりによって深められる。私はそこから生れるものに心から信頼をよせながら生きてきた。

原稿募集（薄謝をお送りします）

① 研究論文・実践報告（図表を含めて五千字まで）

② 発言

▼ 学習の主人公たち——小・中・高生徒の率直な声を
▼ 明日の家庭科教師たち（二千八百字まで）——家庭科教師を志す大学生の希望、疑問、提言など

▼ 市民として（二千八百字まで）

▼ 親も言いたい（千三百字または二千八百字まで）

▼ 教師のつぶやき（千三百字まで）

③ We に、なんでも言おう、なんでも聞こう（本誌の内容・体裁などについての建設的な意見）

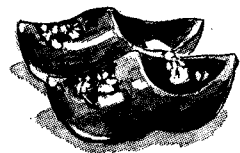
④ わたくしからあなたに（読者・執筆者・編集者の交換室）
③④は、はがきでお気軽に

男と女の新しいかわりぞ

富士見産婦人科病院事件における男たち

——性教育における加害性を問い直す——

本田 勝紀



はじめに

埼玉県所沢市の芙蓉会富士見産婦人科病院犯罪については、ちょうど二年前の秋、マスコミでものすごく取り上げられたことから、大抵の人は知ってしよう。インチキ医者、無免許ME(超音波機器)診断、適応の無い子宮・卵巣切除手術が二〇〇三〇歳台に集中し、かつ保健所届出は一千件を超える、という被害の集約は、八〇年九月二〇日の被害者同盟結成大会への五百名の婦人たちの結集から始まり、この二年間、「台所から来たばかり」の主婦たちによる全くシロウトの闘争が続けられてきた。

現在、二百人余の結集を持った同盟の活動は、支援する弁護士団、医師団、地元「支援する市民の会」、「同病院を告発する被害者・市民・医師の会」を始め、近辺市の労組、日本婦人会議などの婦人団体などの支援を受けて、マレにみる被害ともいわれた事件から、それを支えるさまざまな背景に対する闘い、責任を明らかにし、救済させる闘争、二度と起こしてはならない! という医療制度の抜

本的改革を目ざす闘争に拡げつつある。

若年でありながら、不要に子宮・両卵巣を摘出されて卵巣機能失調症のドン底におとされ、全身倦怠感、めまい、頭痛という症状から更に人には言いにくい性交痛に悩んでいる人はいっぱいいる。それは即ちダンナにとっても被害状況を明確に作り出し、離婚せざるを得ない被害者もいる。しかし現在、北野一族が政治献金不起訴から新所沢の分院の偽装再開(ローズクリニックなる別称)から本院再開をねらっている状況があつて、被害者同盟は、絶対許せない、くり返さないの決意の下に闘っており、九月十九日二周年大会で、初めてダンナ連合というべく多数結集して来たことを踏まえ、明るく材料はそろっている。又、十月十五日よりサンフランシスコでの国際産婦人科学会において同盟医師団が被害者二名と共に参加し、「子宮全摘術の適応に関する比較研究」と題する学会発表をもちとったことは、日本の学会や日母などがモタモタ動かない状況の中で、大きな光として、闘争の発展を約束づけている。

今回、ダンナの有志が以下の文章として決意表明してくれたの

で、紹介したい。

ある夫よりの表明

* * *

私は富士見産婦人科病院被害者の夫であり、学校の教師である。事件発覚から二年たった。芙蓉会富士見産婦人科病院で、帝王切開によって生まれた子どもがまもなく五歳になろうとしている（七七年十一月、誕生）。結婚十一年目の一人っ子だが、日々成長する姿を見るにつけ、ホッとする気持ち、なぜ富士見病院にかかわってきたのか？ というやる瀬なさが常に錯綜している。

「富士見産婦人科病院被害者同盟」がただちに結成されて以来、「被害者同盟」の妻たちの闘いやそれを「支援する市民の会」の共同に微力ながらもかわって来た。そして、事件の真相と被害の実態が膚身につきささるにつれて、北野一族・医師への怒りと憎しみだけではなく、この医療事件が、医療全般・行政・司法・警察そしてマスコミ・教育など、すべてにかかわることとして認識すべきであること、そして何よりも、自分の生き方が問われていることに気付いてきた。私が妻の出産ということによってかわった経過とその後、の闘いの考え方など、若干のべてみたいと思う。

〈魅せられて——実は加害者意識の発露〉

富士見産婦人科病院は自宅の二階からも眺められる徒歩一〇分位のところにある。妻は、例によって、医師の診断と白衣を着た北野早苗理事長のME操作を受けた。その結果について写真を見せながら、得意そうに、北野理事長（彼は医師ではない）は妻に説明した。「いますぐ入院しないと流産する。それに子宮筋腫もある。ここは

いろいろ設備がととのっているから、安心して入院しなさい」と。翌日私は北野の面接を受け、同じ言葉を聞き、さらに、「最近、このようなケースが多いのです。ジュースなどの有害食品の多用が原因ですね」ともいわれた時には、「さすが」と内心考えたものだ。仕事ながら、公害・有害食品などの問題については少なからず関心を持っていたので、「なるほど」と安易に納得していたといえよう。

その後、診察・検査などの理由で入院を繰り返して、「へその緒が胎児の首に巻きついている」、「骨盤が小さすぎる」とのこと帝王切開による出産だった。とにかく無事女の子が産まれた。手術後、理事長室で、出産手術の模様を写したビデオと切除したという子宮筋腫を見せられたが、この時も又、病院の設備のすばらしさに改めて感嘆していた。退院に際し、延べ一〇〇日余の入院費用に対し一〇五万円！（妻は健保の本人であったのに）を支払った。勤務している職場では、同僚らとともに生徒にも祝ってもらった。そして授業では、出産などに際しての諸々のすばらしさ・設備、ビデオ、理事長のジュースの件等等を生徒に話したのである！

このような体験を、事件発覚以来のさまざまな人々との出会いや自問の繰り返しなかで重ねあわせてみたとき、「富士見産婦人科病院事件」という日本医療史上かつてない事件の本質が、単に、北野一族・医師への怒り・憎しみだけではない。自分を含めた多くの問題をかかえていることに気付くに至った。

授業において、子をもった喜びと祝いへの感謝の気持ちとあわせてといえ、「富士見病院」の設備などのすばらしさを話題にしたあの時、生徒たちは、何を、どう感じとったのだろうか。設備がよけれ

ば、正しい医療を受けられるとは必ずしもイコールではないことくらいは判っているつもりではいるが、少なくともあの時の教室での自分は、「富士見病院」の良さを認めていたのではないか。「有害食品云々」の話に短絡的に納得し、理事長の言動に夫婦ともども安易にまらめられてしまった自分は何なんだろう。公害などの人間破壊状況が進行し、それへの抵抗を少しは示していた自分が、より具体的で直接的な妻の出産での言動の結果がこうだったとは！知識をもつことを一つの資格とし、あるいはそれを伝えることにその役割をにないがちな教育労働者の誤りをもつ自分を、そこに垣間見たのである。そこでは、被害者の夫でありながら、医療全般についての知識がなかったとはいえ、あの時は加害者ではなかったのかとの自責の念にかられないわけにはいかないのである。

〈被害者が出る根は深い―問われる学校教育―〉

入院中の妻も、富士見病院の「どこかがおかしい」とは感じとっていたことを後日聞いた。入院中の患者が逃げだした話、入院費用をまけてくれる話、やたらに薬を与える話、産院であるのに保育室には赤坊が少ないこと、帝王切開などの手術患者の多いこと。しかし、夫婦でありながら、出産という重大な時点にいてなお、それらについての会話を共有できなかった。子どもを産むとは女の任務、夫は金銭のことだけで、出産については男は口を出すことはできないとの不分律のような「常識」。ましてや、女性の卵巣・子宮の病気については、男はほとんど口を出さない。

夫たちは、胃が痛い、胸がいたい、ガンではないだろうか、など自分たちの病気にかわかることについて常に話題にし、お互いに相

談しあうことが多い。性についてもにぎやかに談笑する機会が多い。妻の場合はどうだろうか。卵巣・子宮が悪い、ガンになるかもしれない、「手術しなければ……」、何を、誰に相談すればいいのだろうか。「医者に診てもらってこいよ」との夫の声に不安な気持ちで病院を訪れ悩む。これが逆の場合はどうだろうか。夫の、「睾丸が悪い。ガンになるかもしれないから切りましよう」と告げられた時の男性の気の動転する状況。男と女のつきあいのなかで、生殖でない性についての会話がどれほどあるのか。女性の卵巣・子宮と男性の睾丸が、共に両者の性のシンボルでありながら、なぜこうも対応が違ってくるのだろうか。

このことについて、日本における性意識における閉鎖性や学校教育における性にかかわる問題のかかわりあい方に結びついていないのだろうか。学校における「家庭科」教育、保健体育科の「保健」教育における男女共修を拒む傾向が依然として強い（このような男女の分断教育は女性教師から要求されることも多い）。そこには、男女の性の平等ということが、当初から排除されている意識がはたっている。児童・生徒が、身体の不調を訴えたとき、「生理のため？」という言葉を男性教師に聞かれて、「先生、エッチね！」と言わせてしまう意識。そこには、性へのはじらいという子ども心とはことなる、男女の性の平等・本質的相違を否定し、女の性差別・偏見、家庭差別を助長することになる対応の仕様が、小さな芽としてははらまれているのではないか。そのことが、性について重大な関心を示すことがあたりまえの成長する子どもたちが、性について正しい知識と対応を持ちえなくなる素地を準備する。そして他の多くの差別・選別教育と人間性破壊の風潮と合体しながら、「夫と妻」

「会社と家庭」、「仕事と医療」という分業体制にはめこまれていくのではないのか。このような社会体質を読んだうえで、北野など人間無視の医療経営方式がつけられ、組織的医療犯罪が行われたものと考ええる。

〈おわりに〉

卵巣・子宮の切除手術などのため、後遺症による体調不振（仕事ができないなどのため、経済的にも影響が大きい）、性の問題から家庭不和になっている妻たちが多い。この「事件」の被害は、単なる被害者個人に多くは妻だけではなく、家庭破壊という夫・家族の被害でもある。

富士見産婦人科病院の入院患者のなかには「おかしい」、「納得できない」として、理事長の恫喝にもかかわらず、逃げて命びろいをした人たちも多い。その人たちを含めて、多くの市民から、病院の異常さが市役所・保健所へ告発があり、医師仲間では充分に知られていたのは現在はいきりしている。北野早苗は多額の政治献金を地元・県・国会議員・厚生大臣・自治大臣など多数の政治家に与えていた。地元の学校には、多くの物品を寄付し、さらに、市役所から受けとる「母子手帳」には「芙蓉会富士見産婦人科病院」の広告が堂々と印刷されていたのだ。この状況のなかで、「あの病院はおかしいと知っていた」、「あんなおかしい病院にいった方が悪い」という評論家的態度では、事件の解決にならないばかりでなく、第二・第三の「富士見事件」はより巧妙なかたちで多発することになるのではないか。

* * *

同盟が提起した第一・二次の民事告訴並びに北野夫婦に対する医

師法、保釈看法の刑事裁判も長期化が予想され、傷害罪もなかなか起訴発表が無く、病院側の悪らつなデマ宣伝や「被害者同盟」への差別観を示す集団もあり、政治的圧力もかかり始めている。当初、テレビカメラにうつむき、横をむいて顔をかくした妻たちは今、顔をあげて闘っている。被害者は妻だけではない。九月十九日同盟結成二周年大会では、夫たちも積極的に集会に参加し、発言し、妻を励まし、ともに闘う姿勢がもたらがってきた。多くの人たち、団体の支援をうけ、北野一族・医師への怒り・憎しみだけではなく、同じ被害を「二度と繰り返してはならない」というスローガンの下にがんばってゆきたい。

サンフランシスコ国際産婦人科学会での発表をかねて
十月十五日（二二）日、被害者二人、支援一人、医師団二人の派遣団は、十九日モスコフ・センターでの発表を中心としてサンフランシスコでの初の国際学会闘争を闘い抜いた。直前に日本産婦人科学会長・阪大倉智教授からイヤガラセ手紙を受け、石持で追われるように渡米したが、発表は大成功であり、多くの外国人医師、特に司会の米人たちやインド、東南アジアの女医たちからの「信じられない」との声と「何故」との質問は、日本に病院モニター制度が欠落している指摘と糾弾の声となっていた。更に女性新聞記者や女性性学会事務局員の暖かい励まし、現地二世医師並びに日本よりの留学生たちや、ウーマンズヘルス研究中の女子大学生たちの討論は、事実を素直に認める気持ちをもって解放的なアメリカ人の偉大さと、逆に日本人の狭さについて鋭く考えさせ、大いなる励ましをもつて私たちは帰国したのである。

（富士見産婦人科病院を告発する被害者・市民・医師の会）

新しい家庭科を創るために

*** 小学校では *** 名取 弘文

どんど焼き、藁

「あゝ無情」と、どんど焼き

一月十四日は、左義長のお祭りの日である。お正月の飾りを辻に持ち寄り、燃やす。その火で悪いマユ玉を焼く。マユ玉のかわりに赤、緑、黄色のダンゴを焼き、食べるとカゼをひかないという。また、書き初めを燃やし、高く舞うと字がうまくなるといふ。地域によってはどんど焼き、さいと焼きともいふ。

子どもの時代の、そんな祭りの印象や、説明は、ぼくたちの精神形成の上にどんな影響を与えるのだろうか。なんだか河合隼雄のテーマのように、ぼくも、イソップ物語やグリム童話、日本むかし話にとっても興味がある。親に聞かせてもらった話、祖母に聞いた話、父母の故郷の暗闇の中で耳にした断片、子どもの頃に読んだ絵本などの部分部分がデフォルメされ、かってに結びつき、いろいろな体験と重なってぼくの中に入っている。しかも、寓話や民話についてのフロイト的解釈の方法があったり、修身教科書的作り変えを

原型にもどそうとする主張があったりして、それがどの話であり、何を言おうとしているのか、ぼくにどのような影響を与えているのかはまことにわかりにくくなっている。自分の自己認識をしていないところを確かめたいという気持ちもあって、『ラ・フォンテーヌ』『イソップ』などをぼくは最近読んでいる。家庭科の授業で時間があまったときに、読んだばかりの話をすることもある。ノリすぎて、二時間を費してしまうこともある。

『レ・ミゼラブル』は六時間もかかってしまった。ヴィクトル・ユゴー原作の『あゝ、無情』である。黒岩涙香が訳した本である。ぼくの中では、どこかの市長になったジャン・ヴァル・ジャンが荷車の下敷きになった老人を助けるシーンと、かわいそうなコゼットを救おうとして夜の森の泉から水を汲むシーンしか残っていない。『あゝ、無情』はいったいどういう話だったのか。その全体を知りたくなって、ぼくは本屋に行き、『あゝ、無情』という本を探してみた。児童向け世界文学全集にあったが、黒岩涙香の訳ではない。しかも、書き直しである。さし絵は変わっていない。文庫目録を調べると、『あゝ、無情』でも『ジャン・ヴァル・ジャン』でも出ていない。『レ・ミゼラブル』であった。文庫本で五冊である。真理を追求するような気分で本を買って求め、その夜のうちに二巻まで読んでしまった。翌日、真実を知っているのはぼくなのだとばかりに、教室で話を始める。おいとめいのためにパンを盗もう

とし、彼らが心配だからと脱獄しようとして怪力で鉄格子を開けてしまふシーン、神父に暖かくされながらも銀の食器を盗み、神父を殺そうとするジャン・ヴァル・ジャンと、教室の中で一人芝居をし、荷車を持ち上げるマネをして教卓の下にもぐりこんで机を上げ……とやっているうちに二時間がたつてしまふ。夜、家に帰ると、続きをぼくも読む。次の授業でまた話す。子どものほうも、気になるものだから、図書室から本を借り出して、読んでくる。ぼくのほうが疲れてしまい、途中をとばそうすると、子どもから苦情が出る。というわけで、六時間もかかってしまったのである。『レ・ミゼラブル』はたんなるお涙頂戴の本ではなかった。刑罰批判、宗教批判、ミステリー、都市構造論、革命論、ヒューマニズムを含む「総合文学」である。少年時代に読んだ『あゝ、無情』は実はすごい文学だったのである。ぼくの精神形成のどこかにやはり影響を与えていたようである。

どんど焼きについても、ぼくは同じような興味を持っていた。父母が故郷に疎開中に生まれたぼくは、祭りや季節を乳児の時に経験しているのかもしれない。が、三歳ぐらいの時から東京・荒川区の雑な町の中で育ったぼくの意識の中には、祭りや農村行事はない。祭りの賑やかさにあこがれながら、騒々しさが嫌であるという感じ、浮かれている人ごみの中にいながら一人ぼっちの気分がある。それは多分、近代人のどっちつかずの存在感なのだろう。それを確かめたいという思いもあって、一月十四日の仕事が終わってから、ぼくは数人の仲間と大磯の左義長を見に行くことにした。

国鉄の大磯駅におりると、もうまわりは祭りの気分である。海岸に出る道をそぞろ歩いていく。海岸には、塔が四基ほどある。高

さは七、八メートルくらいだろうか。芯に木を入れ、まわりをワラで包んでいる。倒れないようにロープが張ってある。村の辻々で正月飾りを持ち寄って焼くのはだいぶ規模が違う。人もたくさん集まっている。それでもあまり観光化されていないくて、夜店も出ていないし、整理の警察官もほとんどいない。秩父の夜祭りのように規制の厳しいところに較べるとウソみたいである。すっかり暗くなってから、竿塔のようなものに、書き初めの紙を貼ったものを持った人やら、長い竹の先に針金を輪にしておだんごを刺したものを持った人、お正月飾りを持った人などが集まってくる。と、若衆が揮すがたで出てくる。酒をひっかけてはいても、一月の夜の海岸である。かなり寒そうである。やがて、長老たちが塔に火をつける。炎は高くあがる。おだんごを持ってきていた人たちは竹を差し出して焼こうとする。書き初めが燃え上がり、火の粉が飛ぶ。その火のそばで若衆たちはソリにまたがる。ソリの前後にはロープが張ってある。ロープを引っ張って海の中に入り、ロープを引いて砂浜にあがってくる。ソリの上の若衆は冷めたかかったり熱かったりで大変であろう。おだんごを焼く人も大きな火で苦勞している。竹の短かい人は熱くて火のそばに寄れない。ぼくたちは浮かれて、若衆に声援を送ったり、火の粉をはらったりしていたが、おだんごが食べられないのは、いかにも残念である。夜店でも出ていれば買うこともできるが、その店もない。そこでぼくは、竹が短かくて困っている人に声をかけて、焼くからおだんごをくれないかと交渉した。もちろん、交渉は成立する。熱いのをがまんしてだんごを焼いて五つ六つ分けてもらった。仲間も大喜びである。「来年はしっかり持ってこよう」と意見もまとまる。

そして、さっそく、授業でだんごを作ることにした。作り方は簡単である。上新粉に水を加えて、こねる。こねたものを平べったくして、蒸す。それを丸める。串に刺して、焼いて食べる。たったこれだけである。おもしろくなかった。これだけでは、それこそ「たんなるモノづくり」に終わってしまうのである。

そこで一年間、待つことにする。そして、五年生と「どんど焼き」をすることにした。三年生、四年生にも呼びかけて、お正月飾りを持ってきてもらう。持ってきてくれた人にはおだんごを食べさせますよと宣伝する。教師にも、書き初めを子どもに持たせてくれるように話しておく。

一月十三日には、子どもと学校の近くの空地に出て、ヨモギを摘む。冬枯れの野原のようでも、ヨモギの新しい芽はけっこうある。

ヨモギを摘んで、ゴミや汚れた葉を分けておく。

十四日には、ヨモギを茹でて、すり鉢でつぶす。一方で、上新粉をこねる。それをうすくして蒸す。それをボールに入れて、ヨモギと砂糖を加えて、すりこぎ棒でつく。それを手の平で丸める。お皿に並べておく。昼休みに四本の竹を組んで塔をつくる。お正月飾りやワラを結びつけておく。

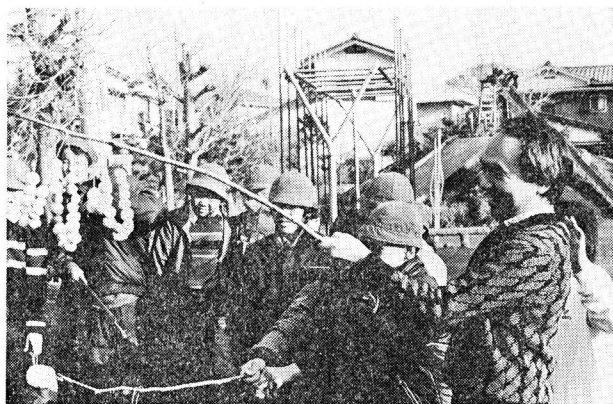
放課後、子どもが集まったところで、針金にだんごを通して、持ち手をきめる。書き初めを持ってくる三年生もいるし、なんでもないうわ半紙を持ってくる子どももいる。門松はなかったといって、松の枝を折ってきている子どももいる。その中で、五年生は自分たちがおだんごを作ったのだからと、かなりイバっている。騒ぎの中で火をつける。火が燃えあがる。煙が出る。火の粉が舞う。それだけで、子どもは興奮状態となる。だんごが割れて火の中に落ちた



り、並んでいたのにだんごをもらえなかったり、大きい小さいと口ゲンカも出る。用意のいい子どもはきな粉を持参している。

騒いでいると、学校の近くの人が、お正月飾りをついでに焼いてほしいと持ってくる。その人にもだんごを食べってもらう。

なんでもない小さな行事なのである。祭りのまねごとである。それでも子どもたちはノッている。ぼくとしてはうれしくもあり、さみしくもあった。どうして今の学校には興奮する場がないのだろう



か。地域の中にある学校なのに、どうして地域の行事を採り入れないのだろうかと考えこんでしまったのである。残り火の中から落ちていただんごを見つけて、灰をおとして、うまそうに食べている子どもや、幾つ食べたと自慢している子どもたちの表情を見ると、ほんとうに子どもどももしている。この子どもたちが、中学に入り、高校に進む。その中学や高校には彼らが夢中になれる少し悲しい気持ちにも、悲しいことがあったときに、小学校の校庭でやった小さなどんど焼きは彼らをなぐさめてくれるのだろうか。

六年生のほうも当初の予定にはなかったことをした。ハナクソ丸

薬について

めて 黒仁丹 それを吞む奴 アンボンタン という変な唄をぼくは子どもの頃歌った覚えがある。富山の薬売りの唄なのである。富山の薬売りというのは全国津々浦々にまで薬を背負って行く。薬を置く約束をして、翌年回収にくる。その間に使った分だけ代金を取っていく。父の生家にも富山の置き薬があり、クマノイ、ケロリンなどがあった。夏休みなどに遊びに行っている時に、薬屋さんがくると、紙風船をくれたりした。富山の薬売りは、また、幕府のオンミツであり、スパイでもあり、時には人さらいでもあると、聞かされたのか思いこんでいたのか。これもぼくには自己形成のルーツのようである。

で、ある日、富山出身の教師に聞いてみると、もう今は各地に住みついていていちいち富山から運んでいるわけではないという。少しがっかりしてしまった。それでも調べてみようと思って、富山の薬売りの協会に手紙を出すと資料を送ってくれた。玉川しんめいさんの本も面白かった。

また、漢方薬にも興味がある。人の身体に合った植物を薬として用いるという方法は、食餌療法のようであり、一つの成分を抽出して使うという考えとはずいぶん違うようである。これも薬局に行つて資料をもらってきた。読んでみると、かなり面白そうである。

そういうわけで、授業に「薬について」が入った。最初に調査してみる。

一 みんなの家ではどんな薬を使っているか

① 頭が痛いとき

② カゼをひいたとき

③おなかが痛いとき

④けがをしたとき

⑤そのほか、使っている薬

頭痛薬としては、「バツファリン」「アスピリン」をあげた子どももいたが、意外だったのは「めったに使わない」「ねる・食べる」「静かにしている」と答えている子どもも何人かいたことである。薬の副作用ということがわかっていている人もいるのである。「ねる・食べる」というのは、実はいちばんすぐれた方法であり、頭痛は身体や精神の疲労を知らせる信号なのであると説明する。

カゼ薬も「ルル・ゴールド」「クララ」「アスピリン」などが出るが、「ニンニクをすつてうがいをする」「たまご酒を飲む」「ねる」というものもある。アロエの葉をすって飲むという子どももいる。腹痛でも同じように「トイレに行く」「あったかくする」というのが出てくる。薬にばかり頼ってはいけないことを知っているようである。

が、ケガとなると、バンド・エードという子どもがほとんどである。なるほど、気軽に使えるし、ちょっとおしゃれ感覚も満たしてくれるのであろう。次に薬の種類、原料、売り方を説明していると、「薬売りが持ってくる」と意見がでくる。藤沢にも富山の薬屋さんが来ていたのである。ぼくはうれしくなりました。

薬の種類

①ぬり薬—ひふにぬって消毒、血をとめる。肌を刺激して早くなおさせる

②のみ薬—胃や腸から身体にまわる。栄養剤、痛みどめ、胃腸薬

③注射—栄養剤、痛みどめ、予防薬、マスイ薬、シヨックあり！

薬の原料

①生薬—動植物をそのまま使う。シカの角をけずる。クマの胃腸をほす。草の根をほす

②化学的な薬—生薬から特別な成分をとりだしたもの
薬の売り方

①工場↓問屋↓薬局↓客

病院↓かん者

②薬売り
→使った分のお金
あずける家

古い薬

第三次の授業では「薬のトラブル」を調べることにする。子どもたちから出たのは、覚醒剤・すいみん薬・丸山ワクチン・スモン病・森永ヒ素事件である。覚醒剤はテレビニュースなどで中毒患者が傷害事件を起こしたので見たので出てきたのである。すいみん薬は映画で『典子は、今』をやっていたからサリドマイドについて調べようというのである。丸山ワクチンは厚生省が認可するか否かでありまいた態度を示していたからである。森永ヒ素事件については、ぼくが「女の子は大きくなって赤ちゃんを産む時の勉強にもなるから、女の子が調べたほうがいいんじゃない」と言ったために拒否されてしまった。どうもぼくの中の女性差別がチョコチョコ出てしま

うようだ。

調べ方は、いつものように百科事典、年鑑、スクラップを使った
り、薬局で聞いたりしたのだが、中にはこの数年来の新聞記事の
コピーを持ってきたりしている子どももいた。どうしたのかと聞いてみる
と、父親が新聞社の外信部で働いており、スモン病を調べるという
とコピーをしてきてくれたという。地域の知恵、親の経験を学校に
集めたいと思っているばかりとしてはうれしくなることだった。ま
た、サリドマイドについて調べたグループは、『典子は、今』を見
たいからお金を出してくれないかと持ちかけてくる。そこで、映画
館に電話をして「勉強の一環だから割引にしてほしい」と話すと、
O・Kであった。まだまだ学校は信用があるのである。

薬の勉強は、それぞれのグループが調べたことを発表し「テレビ
のCMにつられて薬をのんだりしないようにしよう。よほどひどい
時以外は薬は使わないようにしよう」とまとめて終わりとした。あ
とから考えてみると、導入のところで「わが家の健康法」というの
を持ち寄ってみるやり方もあったのとか、近くにある製薬会社の
工場に見学に行けばよかったのにと、いろいろなプランが出てくる。
それらはまた今年の授業にいかすことにしよう。

どんど燃きは、今年は、学校行事として全校でやることになっ
た。八百人分ものだんごができるかどうか心配である。

(藤沢市立村岡小学校)

ひき続き “We” のご購入を

どれだけの方が読者になって下さる
のか——創刊の時の不安と期待。いま、
同じ思いで心が昂ぶります。

“We”は、おかげさまで9月には、当
初の子定部数を越すことができました。
発刊を、好意的に報道して下さったマ
スコミ関係の方の力も大きいですが、
何よりもまごころでご支援下さったあ
なたのおかげです。ありがとうございます。

「“We” という名の炎をともし、強め、
広げていくのは、あなたであり、そし
て私たちです。いつかこの炎が荒野の
枯草を焼きつくし、新しい芽が萌え出
ることを願い、信じて、支援と連帯の
輪を大きくして下さい。心から訴
えます」。

“We”発刊時のアピール文を、祈りを
こめて再びあなたにお届けします。

私たちの願いとは裏腹に、日本の現
実は当時よりいっそう憂うべき状況に
あります。どうぞ、“We”と共に考え、
行動するために、いつまでも仲間であ
って下さい。

2年目の“We”は、定価据置きで増
頁し、男と女の自立を、差別のない人
間らしい社会の構築を、生活と教育を
私たちの手にとりもどす“つぶて”と
してがんばっていきます。

巻末の振替用紙をご利用の上、いま
すぐ2年目のご予定を！

あなたのお仲間にごひおすすめ下さい。
新しいチラシもお送りします。

新しい家庭科を創るために * 中学校では *

熊本県家庭科サークル
長尾 淑子

「貫頭衣」を縫おう

一、はじめに

わたくしは、子供たちがかわい。こう書くと思われくさいが、どんな状態の子供たちも、真実かわい。子供たちを想う時、幸せに、平和に生きぬいてほしいと思う。自己の幸せがまわりの人々の幸せと連帯する生き方を貫いてほしいと願う。そのためには、教育の全ての分野で、民主的な人間を育て、主体性を持って生きていく力を身につけるような実践をしなければ、小さな努力を続けていく。

家庭科の学習の中で、「衣」領域で身につけるものは何か、と考えた時、次の一点に絞ることができる。「健やかに生きていく」ための衣服とはどんなものを、学びとることである。と。そう考えて、内容を要約すれば、次の三項目となるのではないか。

(一) 衣材料（主に自然科学の力をつける）

(二) 構造（製作を通し、人体との関係や必要な事がらを把握させる）

(三) どう着るか（主に社会科学的な力をつける）
子供の発達段階を考えれば、(一)は一年生か二年生で(二)も同様、そして、(三)は是非とも三年生で学習させたい。

小学校での履習内容を子供たちに聞いてみると、やはり軽視された取り扱いで、ほとんど断片的で、統一だった学習ではない。衣領域の学習は、零に近いと言っても過言ではない。この状況を見た時、まずは、人間の体と衣服がどんな関係にあるかを知らせることが第一であると考え、一九八一年度の一年生の衣領域の学習は、「貫頭衣を作ろう」を進めた。対象は、心ならずも女子だけであったが、内容は、男とか女とか区別することなど、さらさら思いもせず、誰もが学ぶ第一段階のものとして組み立てた。

二、実践

(一) 計画

①人間の体と衣服との関係

②型紙作り（衣服の構造を理解することをねらう）

③貫頭衣を作る

④まとめ

(二) 内容

衣服の源となるのは、人間の体であり、その人の生活である。既

成の衣服に操られる衣生活であってはならない。あくまでも、自己を根底に据え、己れ自身のための「衣」でなければならぬ。そこをねらいとして、実践を進めた。

①人間の体と衣服との関係を学ぶ。

一枚の布をボディにかぶせる。わきに「しわ」をよせながら胴体をつつむ。「これでいい?」と聞くと、子供たちは、「ダメ!それじゃだめ!顔も出ないし、手も出ないし、動けないもん」と笑い出す。「どうすればいい?」と聞くと、「頭が出る所、両手、両足が出るところに穴がなければ」と答える。最低四、五つの出入口を持たなければ生きていく人間の人体をまとう衣服にはなれないことを、単純な学習ではあるが、子供たちは認識する。さらに、各自の手・足・胴体をさまざまに動かしてみる。友達同志でお互いに観察し合い、体を動かすのに必要な衣服の「ゆとり」について知る。ジャンパースカートの裾回りをはかりその「ゆとり分」が階段を昇ったり、廊下を走ったりする学校生活の上からも、必要とされていることは。また、数人が着用していたニット製の体操服と布製の制服とを比較し、制服の方に多くのゆとりがあること、ニットは編み地で伸縮度が高いので、ゆとりを布ほど多く必要としないことなどにも、目を向けさせておく。これは二年生での学習の伏線である。カッコいいことのみに目を向けがちな子供たちは、動作と不可分の関係にある衣服の『ゆとり』について、なるほどという顔をしてうなづきあっている。

②型紙作り

③寸法をはかる。

自分のものを作るには、自分の体の寸法が基準になることを話

し、示範の後、採寸する。各グループは三人単位なので、採寸される者、する者、記録する者と協力し合って学習を進めた。採寸箇所は、頭囲、胸囲、胴囲、腰まわり、背たけ、着ただけである。

次に型紙作りの期間だけ、従来の班を暫時解散して、寸法別のグループにした。型紙作りをまちがいの少ないものにするためにである。教室に六つの台があるので、等分になるよう、クラスによって、区切る胸囲の寸法は異なった。

④原型を作る。(図1参照)

(ア)ハットロン紙 胸囲に二〇センチ加えて、その幅とする。上体で一番太いところは胸囲なので、胸囲を基準とすることを説明する。

(イ)着たけは腰囲より少し下までとする。

(ウ)(イ)で長方形を作り、縦、横にそれぞれ中心線を入れる。

(カ)頭囲りを三・一四で割り直径を出す。

(ケ)肩の線上に直径をとる。その中心線上に後に二・五センチ、前に二・一三センチぐらいとって、だ円形をフリーハンドで書く。子供たちは、制服や体操服の首のあきを見て、前後の差に気づく。

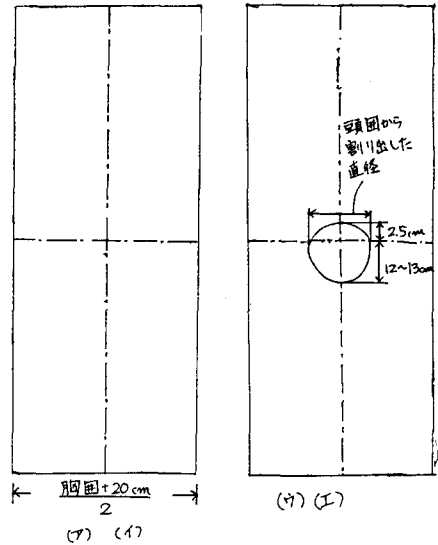
(ク)だ円形を切りとる。

(コ)頭からかぶって着用し、班で協力しながら肩線を体の前後の中心に合わせ、手で動かないように固定する。他の一人が、人間の肩に合わせて、浮いている部分を折りたたみ、セロテープでとめる。

(ク)うでのつけ根回りを、人間の身体に合わせてマジックで書く。

(ケ)書いた線を切りとり、わき線が前後同じになるようにアームホルのわき近くのくり加減を調整する。わきの上・下・中ほどをセロテープで軽くとめ、再度着用し、腕を動かし、アームホールが

図1 原型作り



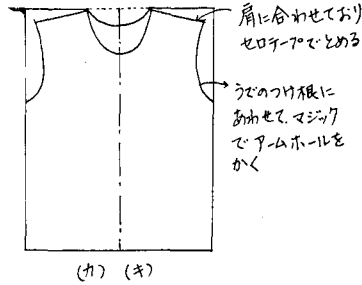
適当かどうか調べ、無理な時は訂正する。

(ロ) 体からはずし、左右の肩下りと、袖ぐりを比べてみると、ほとんど同じことに気付く。

(ハ) 全員のもが完成したら、名称を記入する。この原型が、各自の衣服の基本になること、ここからそれぞれのデザインの衣服に発展していくことを話す。

◎ 貫頭衣の型紙作り (図2参照)

人間が衣服らしい形のを初めて身にまとったのは貫頭衣であったことを話すと、子供たちは、廊下や教室に展示してある三年生の被服史学習の貫頭衣の絵を見ているので、すんなりとうなずく。



最初の被服学習は、衣服の原点である貫頭衣を作ろうと子供たちに話し、型紙作りを開始した。

(ク) 原型のわきのセロテープをはずし、前後をのばし、縦の中心を折る。

(イ) ハートロン紙に、前身ごろ・後身ごろの原型を別々にうつす。背たけの位置も書く。

(ウ) 前身ごろ。

肩先から垂線を着たけの長さまで下にひき、裾は横に5cm出す。背たけの位置から裾の5cm出した位置を斜めの線で結び、裾線を直角に結ぶ。袖ぐりは胴囲りのところと肩先までを二等分したところ

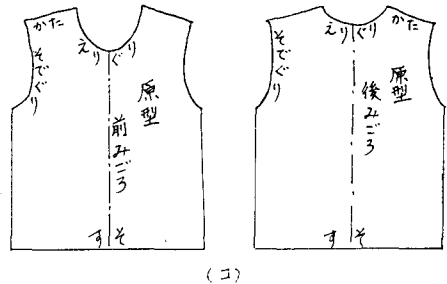
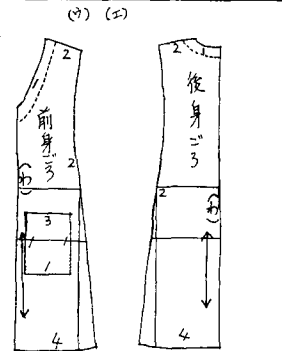
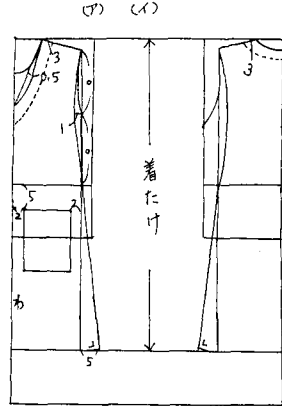
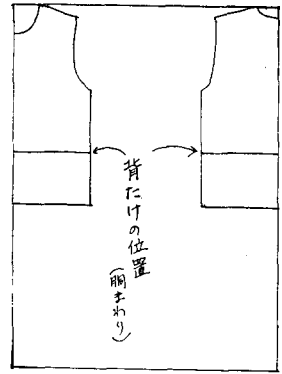


図2 型紙作り



(c) 数字は縫いしろ

ろで身ごろ側に一cm入れ、なだらかな線にする。大事な胸囲りが生きてこないが、一年生では、わきを縫い合わせる事はまだ無理と判断したと、成長していくので後で体に合わなくなることを考え、紐で結ぶ形にした。衿ぐりは前中心線上で七〜八センチ下だったところ(N.線から一八cmはくらい下がったことになる)とを斜めに線を引き、二等分のところで、身ごろの方〇・五cmに入れこみ、やわらかなカーブの線に書き直す。衿ぐり線から三cm内側に見返し線を書く。ポケットを書く。

(a)後身ごろは、衿ぐりはそのまま、脇は前身ごろと同じにする見返し線も三cm入ったところに書く。

(b)それぞれに名称(前身ごろ・後身ごろ)と氏名を記入し、切り取る。縫い代を赤鉛筆で記入しておく。

(c)貫頭衣を縫う(グループを従来のものにもどす)。

(d)用尺の見積りと材料購入及び必要な用具を調べる。型紙の長さをはかり、それにポケットやひもの分を加えた見積りをする。生地

屋さんに学校に来てもらい、時間中に各自で布を購入する(ソフトデニム)。学習に必要な用具を学習の内容にそって話し合う。

- ・型紙配置(まち針、ものさし)
- ・しるしつけと裁断(チャコ、ものさし、ルレット、チャコペーパー、はさみ)
- ・縫う(まち針、手縫い針、糸切りはさみ、ミシン、ボビン、ボビンケース、アイロン、アイロン台、霧ふき、馬、まんじゅう)
- ・仕上げ(アイロン、霧ふき、馬、まんじゅう)

(e)裁つ

(f)布の方向と、のびの関係を手でひっぱってみて調べる。

(g)裾幅に縫代を加えた寸法をとり、それを中心にして、布を中表にして縦に折る。

(h)縫い代をつける。

(i)布の輪を中心にして、型紙を縦に配置し固定する。

(j)縫い代をつける。

(k)しるしをつける。

(ウ)裁ち方の示範の後、班で助け合いながら裁つ。

◎縫う

(ウ)前後の肩を縫い合わせ、縫い代はわって、はしミシン。

(イ)見返しを縫い、縫い代の始末をする。

(ウ)見返しを身ごろにつける。子供たちは、ここが一番難しそうであった。実際の縫製に入る前に、ミシンでの直線、曲線、角縫いの練習をしたのだが、曲線がしるし通りに縫えなくて苦労した。切りこみを入れると、縫い代の処理がうまくいくこと、ミシン縫いをする度に、めんどろでもアイロンをかけるときれいに仕上がることも学んだようだった。馬、まんじゅうにもかなり慣れていた。

衿ぐりは、固定するためと、きれいに見えるように、○・五cm幅のステッチをかけ、身返し布は身ごろにまつりつける。

(エ)わき、裾をアイロンで折り続けて縫う。

(ウ)ポケットを作り、力布を裏につけて、ポケットをつける。力布をつける意味を子供たちが知ると、制服のポケットに力布がついていないことに疑問を持つ。なぜかなと軽く聞くと「かっこも悪かばってん、せからし(めんどろくさい) かけんたい」「せからしかこつの多かとはよでき上がらんめが」「はよでき上がって売らんと、もうからんけんたい」と儲け一点ばりの矛盾を鋭く突く。

(ウ)紐を作り、身ごろにつける。

ミシンに慣れ、縫うことも上手になってきた子供たちは、しっかりと、丈夫に縫いつけた。「ワでき上がった」と、アイロンもかける前から、喜んで着こみ、鏡の前でおどる。

(ウ)仕上げ

糸くずを取り、仕上げのアイロンをかける。

④まとめ

製作後、この学習のまとめとして、今までの学習内容を整理し、わかったこと、感想を書いた。

へわかったこと

・原型作り

体に合わせて原型を作る必要

服を作る時には、原型が必要だということ

自分の寸法を測って作るので、それぞれ形が違う

自分の原型を一枚作っておけば、いろんな服を作るにも利用できる

原型は自分のもの一つしかない

自分の体の大きさや特徴

などをあげた。正確に原型を作るにはもっと別の方法があるが、まだみんなには難しい。しかし、自分の体に合わせるために原型があるのだから、身体を基準にすることには変わりのないことを話す。

・型紙作り

原型から型紙に発展すること

原型と型紙の区別

難しかったが、身ごろの作り方

などをあげ、教師の「既製品は、みんなの原型を知って作っているのかなあ」の質問に、「違う」と全員が答え、「いやあ、誰かに着せるという目的もなく、ただ作って売ってるのね。その中のどれかを、みんなは買って着てるわけね」「選んで買ったつもりだけど、A子さんと作ったわけでもない服を買って着て、どんな感じ? A子さん」と問うと、「着せ替え人形の人形のごたる」と答

える。「着せ替え人形ではあんまり面白くないね。あなた自身のための衣服ではなくてはね。今は着る人のための衣服でなく、売る人のための衣服が多いね。着る人のための衣服にするには、どうすればよいか、今後、みんなは、しっかりと勉強していくように」と話しておく。

・縫うところでは、具体的なことが、一つづつわかっていった。中には、「洋服はお金さえ出せば買えるけど、実際に貫頭衣を作ってみて、大変難しいんだなということがわかった」というのもあった。学習を終えて（子供の感想文より）

・はじめは簡単だったけど、後の方では、だんだん難しくなった。一番苦労した所は、衿ぐりの部分だった。衿ぐりの部分は、糸がつってしまった。途中、せからしい所もあったが、でき上がったら「作ってよかった」と思った。（田畑めぐみ）

・作る前までは、簡単そうに見えたが、実際に作ると、とても難しいということがわかった。うまく縫おうと思っても横に行ったりめっちゃくちゃになったりした。でも自分で、貫頭衣を作ってみて本当によかったと思う。服を作る難しさを知った。（佐藤みゆき）

・長くかかったけど、「貫頭衣」の作り方がよくわかった。失敗が続いてほっぽり出してしまいたかったけど、せっかくここまで作ったのだからとがんばってやった。ミシンのかけ方や布の裁ち方の面でも不十分な点もあった。全体的に「よくできた」と言う作品じゃないけど、がんばってやってきたと思う。（北川明美）

三、終りに

三年生に「被服史の学習」を取り扱って四年になる。「貫頭衣」は、日本でも、他の国々でも、最初に登場し、生き続けた。最も単

純で、最も要を得ているからであらう。製作の題材は、まずはこれだという思いが強くなった。人体との関連を学習させるのにも適している。

衣服は、人間の体をスタートとし、原型↓型紙↓服と作られていくものであって、着せられるだけの衣生活であってはならないことを把握させていくためにも適していると考え、取り組んでみたが、ねらいが全うできたか、と今反省している。気にかかる点は、

・時間がかかりすぎたということ、何としても製作に多くの時間を要する。製作をもっと単純化されたいだろうかと思慮中である。

・自己の生活を中心にした衣服が必要なのだということが、この実践だけでは不十分のようだ。成長した三年生で、継続して考慮させねばならない。

・楽しい学習をと心がけたが、製作の途中ぐらいいから技術的に難しいと感じるようになり、型紙作りまでの楽しさが、かなり減じたことが悔やまれる。

などである。

授業を進めるにあたっては、常に子供の側からながめて納得のいくように組み立てる事を心がけた。私は障害児教育を六年やったが、そこで学んだものは、子供の現状に立って、子供の側から授業を組み立てることが大事だということである。この子らの将来に必要なものは何かということをしつかりと教師がつかみ、子供たちの発達段階に応じて授業を組み立てていくこと。迎合では決してない、ぎりぎりに必要なもののみを、根幹のみを、単純化して教材化していくことである。彼らから教わったことを、健常児の教育にも大切に生かしていきたいと思っている。（荒尾市立荒尾第三中学校）

新しい家庭科を創るために *** 高等学校では *** 寺島 紘子

家族

——絵本『おばあちゃん』を読む——

家族領域で「老人」をとりあげる意味

私は、家族領域では「老人」を中心にすえて、授業をすすめている。「老人」問題は、現代の社会構造が必然的に生み出した家族が抱える様々な矛盾を象徴しており、また人間の一生における「老い」の部分を、自らに接近させて考えることによって、「人間とは何か」「家族とは何か」という問いを考えさせる一助になるのではないかと考えるからである。

ところで教科書の「家族」には、結婚制度や秩序の維持を前提とした、画一的な家庭のあるべき像が述べられている。「家族相互の密接な触れあいが大切」「責任を自覚し」「人格を尊重、協力しあう」「信頼と愛情に支えられた人間関係」等々。

それは、生身の人間の自我がぶつかりあい、せめぎあっている現実の家庭の姿からは遊離している。

「家族」の学習に画一的なモデルはいらない。何よりも大切なのは、学習者自身が、問いを出し、追求し、自分の考えを作っていくことであると思う。

家族という社会的側面の強いものを学ぶとき、科学的知識と、自分の思考を結びつけるように組まないと、真の認識にはならない。教科書の「あるべき姿」は、社会科学の科学的な認識を獲得することと相入れないのである。

私は今年、一年生の授業を次のように実施した。

一、家庭と社会——五時間

二、絵本『おばあちゃん』を読む——五時間

(なお、一・二の間に課題学習を夏休みをはさんで、計九時間実施した。課題学習については、次回に報告する)

今回の報告は、二を中心にさせていただくが、一の学習事項について簡単に触れる。

まずしよっぱなに、一つのドラマ(映画)を見せる。老夫婦の扶養がテーマである。青年期にある高校生には、老年期の問題は入りにくい、事例を見せることによって、感性をゆさぶりながら授業をすすめるとやりやすい。

他に新聞記事(朝日新聞「家族の風景」の切り抜き)や、教科書、資料集などの統計資料を中心にしながら、家族形態や家族機能の「変化」と「社会的背景」を考えさせる。旧民法における家制度、

高齢化社会における福祉の問題、女性のライフサイクル上の問題などに注目させる。

ここでの学習は、今の家族をとりまく客観的状況のアウトラインを把握させることが中心となる。

絵本『おばあちゃん』を読む

『おばあちゃん』（文・谷川俊太郎、絵・三輪滋、ぼるん舎刊）は短い文章の中に、子ども、母、父、祖母のそれぞれの立場からの問題が的確に表現されている。

私は、この絵本をいろんな人に見てもらった。どの世代の人にもかなりの衝撃を与えた（と私は見る）。余りにも現実を鋭く突いているからだ。

事実、生徒の中にも、入院している高齢の寝たきり祖母がいる家庭がある。そんな生徒にとっては、この絵本は「とてもつらいもの」であった。「利己的な醜い自分」を見つめながら、「家族一人ひとりの」どうしようもないやり切れない気持ち「が痛いほど伝わってくる」と書いた生徒もいる。

絵を紹介できないのが残念だが、次にその全文を記す。

『おばあちゃん』

うちのおばあちゃんは あかちゃんみたい。いつもねどこにねています。

おむつを しています。

ごはんも ひとりでは たべられない。でも あかちゃんとはちがって おなかがすいても なきません。

（ごはんは まだかい）とおおきなこえでいいます。

へいま たべたばかりじゃない」と おかあさんは おこります。

おかあさんが おばあちゃんにおこると おとうさんが おかあさんにおこります。

おばあちゃんは おとうさんの おかあさんです。むかしは びじんだった。

こどものころ おとうさんは おばあちゃんのかえるのが おそいと しくしくないでいたそうです。

ときどき おばあちゃんは おとうさんにむかって あなたはどなたでしたっけ なんてきいたりします。

ときどき おばあちゃんは

おかあさんのことを（どろぼう！）といいます。

おかあさんは ひとりで ないでいることがある。

ぼくがへおばあちゃんなんか しんじやえばいい」というと おかあさんは じいっと したをむいて だまっています。

おいしゃさんは おばあちゃんの びょうきには どんなくすりも きかないといひます。

ぼくは もしかすると おばあちゃんはおうちゅうじんになったんじゃないかとおもいます。

うちゅうじんといっしょに くらすのはむずかしい。うちゅうじんは にんげんそっくりでも にんげんとは どこかちがうから。

でも うちゅうじんも いきものです。

せんせいは いきものを ころすのはよくないと いった。

おとうさんや おかあさんも としをとると うちゅうじん

になります。

ぼくも いまにうちゅうじんに なります。

この絵本をKJ法を利用して読む。次のようにすすめた。

①絵本を読んで心で感じたこと、気にかかることを、小さい紙切れに、何枚でも書きつける。

②その紙切れを班で広げ、親しいと感ずる紙切れを集める（どこにも入らない紙切れも一匹狼として大切に扱う。頭で考えることよりも、心で感じることを大切にする）。

③その紙切れ群に、一枚一枚の紙切れの訴えることの中心を、一枚の表札に書く。さらに表札どうしを結び、表札の表札をつける。

④模造紙に表札群の最も居心地のよい場所をみつけ、空間配置する。

⑤記号で、図解化していく。

⑥その関係図を口頭発表する。

⑦最後に個人でまとめる。

以上、四時間。最後の一時間は、彼らの書いたまとめをプリントにして渡し、さらに谷川さんの対談（この絵本を書いた意味をのべたもの）のプリントを読ませる。そして『人間にとって老いるとは何か』というテーマで、課題を書かせた。

KJ法の利用は、「自分の家には、そんな問題がないからわかんない」という問題回避をくい止めてくれた。作業を通して、いくつ

かの対立した概念が生じる。この矛盾を、自分で認識していく過程が大切なのである。生徒は、そこにおもしろさを感じて、積極的にとり組んだ。

作業のあとの、個人のまとめより

A、「年はとりたくないし、家族に迷惑をかけたくない。でもいつかは老人になってボケるかもしれない。その前に自分がボケ老人の世話をするに、なるかも知れない。

できるだけやさしくしてあげたいと思うけど、やっぱり、はがゆくなるだろうし、『どろぼう』なんて言われたらショックだ。私もきつと『早く死ねばいい』と思ってしまっただろう。でも、何を言われても、あまり気にせず、『こんなもんだ』と思っていけば、いいんじゃないかなあ。でも、その老人が、もし、自分の親だったらやっぱりつらい。家族みんなが、あったかい心を持っていれば、少しは救われるだろう」。

B、『人間は誰でも年をとるからしょうがない』という発想から始まって、『子どもが老人の世話くらいしなきゃ』という意見が出た。そこで矛盾が出てきた。『老人の世話なんか、喜んでできるか』『老人はじゃま者』とこんな風だ。またここで『人間は年をとるから仕方がない』とスタートの地点にもどった。もう、頭の中が、ころんがらがって疲れた。でも、みんなで考えれたのがよかった。

C、「このおばあちゃんは、家族にとって邪魔者なのだろうか？お母さんをいじめる悪者なのか？そこに悩んだ。だが、おばあちゃんが、本当に悪者であるはずはない。ボケてお母さんを『どろぼう』といったのだろう。しかし、家族にとっておばあちゃんが必要

なのか、こんな風にいうと、おばあちゃんは、品物みたいで可哀想だけど、おばあちゃんには赤ちゃんと何もないのに、口は違者。お母さんにしてみれば、血のつながらない赤の他人。しかしお父さんにすれば、実の母。ここにやはり、嫁姑の問題がある。それに何といっても人間は、誰でも年をとると、邪魔にされるか、という根本的な問題が残る」。

D、「昔は、どうしていたのだろう。昔だって年寄りはいたし、ボケた父母を介護している人も沢山いたのに、今になって『深刻』になったのはなぜか。今の世の中が、年寄りや、使えなくなったもの、ガタがきたものを大切にしない風潮があるからなのか。『使い捨ての時代』なんてよくいうし、みんな全体的に、自分中心の考えに偏ってきたからか。そしたら、誰が悪いのだろう。』

E、「若い人と老人が、ともに幸わせになるには、どうしたらよいのだろう。若い人も、老人も努力しなければいけないと思う、もうひとつ、なぜボケるのだろう。ボケない老人になるには、どうしたら良いのか、考えなければならぬと思う」。

F、「老人を捨てることは出来ないのだ。誰でも年をとる。人に多かれ、少なかれ頼って生きていくのだ。他人の人生を大きく支配して、生きていかなければならぬ。家庭内の問題は恥という意識で隠す。しかし、家庭内の問題として、もはやとめておくことができないのだ。社会の一員であるという意識で、受けとめていきたい。これを書いた生徒は、最初のラベルは『人に自分の人生をやるのは嫌だ』と『生きていく』だった。この生徒はKJ法をやりながら文章化する過程で、『頭が空中分解しそう』なほど考えたという。

また、『今までの『遠い問題』としての考えを捨て、『現実の問

題』として、前向きな態度で考えたい』という感想に見られるように積極的に考えようとする姿勢が、出てきたように思う。

二人の生徒のこと

Eは、一学期当初、さわいで授業妨害の中心となった生徒である。EとEをとりまく生徒たちと、私が話し合いを持ったあとは、Eの大声はやんだものの、今度は、机に身を伏せて寝だした。または内職する。

KJ法の作業のはじめの二時間は、積極的に参加しなかったそのEが、KJ法のまとめの時、『ぜんぜん分からん。頭が混乱する』とだけ書いた。私は実感がこもっていると思って、たずねた。『混乱したところはどこなの?』と、Eは考え込んだがやはり、何も書けなかった。ところが、すぐその後、Eは私のところへ来た。

私が以前、授業中紹介した絵本『ひとり』『おばあちゃん』と作者・同出版)にひっかかるものがあり、再び、その絵本を読みに来たのだった。Eは、『私は、このままではロボットになってしまふ。一隅を照らす人になりたい』と真剣な眼差しでいった。次の時間の課題『人間にとって老いることは何か』に次のよう書いてきた。

『私は、役に立つ人、立たない人は、いないと思う。これは、この世の中に必要でないものがないということと同じだ。役に立たない人というのは、老人や植物人間などだと思うが、この人たちがいるからこそ、私たちは、このように悩み、生や死を考えるんだと思う。『何のために生きるか』は、私は『人になるため』としか、今のところ答えられない。そして、私はそれを論理で納得しようとし

僕もまだ老人を出している家庭をたてはみて……

おふふふんに対する家族の心情は複雑だ

世帯を組んでいるおふふん

おふふんが世帯を組んでいるお母さんだ。

「おふふんが死んだらおふふん」とおふふんが言うのを聞いてお母さんが何も言わないという事は、おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

年をとるとおふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

おふふんが死んだらおふふんが死んだらいい。

ている。が、論理で納得できないことは、わかっている。わかって
いるが、あきらめきれないのである。悩んだあげくに論理で答が出な
いとわかった時に、人として存在することを認め、受け入れるよう
になると思う。そして何かがおこる……。

次はGという生徒。Gはラベルに「医療従事者の特権として、七
〇歳以上のボケ老人を家族の許可を得て、殺してもよくしてはどう
か」と書いた。Gは、将来、理学療法士になりたいと希望してい
る。夏休みの課題学習で、Gは、私の紹介した病院に個人で行き、
リハビリテーションの仕事を、時間をかけて見てきた。そして患者
たちの作った文集を見せてもらって感動し、将来の進路を、さらに
確かにしてきたのだった。

それだけに、私はGのラベルにこだわった。Gはいった。「壮年
期の患者たちは、リハビリを受ける時、目の色が違っていった。一生
懸命だった。それに比べて、老人たちは、目の位置も定まらず、ボ
ンヤリしていて、回復しようとする意志は見えなかった。死の間近
な老人にリハビリは不必要だ」。

KJ法のまともにGは次のように書いた。「永遠の命は魅力的で
あろうか？ 人間を生かすことに、余りに人間は心血を注ぎすぎ
た。『安楽死』というのがある。本当に必要な、これからの医学に
これがある。昔あったら捨て捨てるの制度を、もう一度、復活させるこ
とになるのだが、それは余りに残酷すぎるだろうか」。

Gと同じクラスに、Gが行ってきた病院の医師を父に持つ生徒が
いた。私は、その生徒に「お父さんに、この問題について、どう考
えていらっしゃるか聞いてきて」と頼み、それを、クラスに伝えて
もらった。その医師は娘を通して、次のような趣旨のことを述べ

た。『あと二、三ヵ月の命』とは、医者が、家族に覚悟を決めてもらうために言うのであって、誰も人の命はわからない。同じ生きるなら、人間らしく生きられるようにしてあげたい。そして、そういう努力を家族や病院の職員らがすることによって、その人たちが人間的に成長すると思う。

老人に対してのそういう考え方は、奇型児やガン患者に対して、死んだ方がまし、という考え方に似ているし、その考え方は、人間は、退廃するのではないか。

Yは、最後の時間に、次のようにまとめた。

「……私も老いる。私もおばあちゃんになる。特に今、自分には『役立たず』の影はないと思っている。役に立つために社会に出ていこうと思っている十六歳の自分には、年とった自分の親すら想像できない。しかし、年をとってしまった人たちは、どんな思いでいるのだろう。健康を損っていない人たちは？ その思いを理解し、受け入れると、多少は、救われるのではないか。」

Gが書いた最初のラベルは、クラス中に波紋を巻き起こした。私はもちろん、このラベルを非人道的だと、ねじふせるつもりはない。これは自身も、問い続けねばならないことなのだ。医学界の大テーマでもある。

私は、この授業で、個々の生徒との応答をかわすことを重視した。私の問いかけに、生徒は「そうか——」と頭を抱え込んだ。反対にそう問う私に、生徒たちから疑問が投げかけられ、私自身の絵本の読みも深くなった。

人間はとかく、自分の実感がすべてだと思ひ込む。KJ法をして

生徒は「自分の中で全く反対の意見があることがわかって驚いた」
「その人、その人の感じ方が違うことがよくわかる」と述べた。

学習者が、自分の考えを作っていくには、複雑な思考の回路を経る。思い込みや感情や矛盾、その複雑さこそが一方では人間関係だともいえる。

最後の時間に、生徒に読ませた、作者の谷川さんの言葉は『人間はある、存在するということに意味があり、大きなサイクルとしての生命の問題』を提示したものだということであるが、私が書くとしても自信のない難しいテーマに、生徒たちはむきあって、ジグザグ的思考を、KJ法で跡付けた。

生徒は、「家族とは何か」について、今の思いや、考えをことばにあらわすことによって、そこを出発点として、次の新たな本質を含んだ問題意識につなげていくのではないか。

そういう意味で、「家族」の学習は、この十時間で終わったのではない。

教材『おばあちゃん』は、その内容で、生徒に深い問いかけを作ってくれた。

〈参考資料〉

川喜田二郎著『続・発想法』中公新書

新しい家庭科を創るために

*** 大学では *** 木村 温美

家庭科教師教育の内と外

はじめに

執筆の依頼をいただいた時分、私は最低に落ちこんでいた。前期の「家庭科教材研究」——小学校教員養成課程の必修科目——の授業と、「家庭科教育法Ⅱ」——中学校家庭科一級免許状に必要な三単位のうちの二単位で演習科目——の授業が終わり、どちらでもかつて経験したことのない失望と苦悩を味わっていたからである。だから読者の参考になるような私の授業実践はとも書けそうにないと思ふ次のような言葉でやっと諸の返事をしたのであった。

「共通一次の洗礼を受けて来た、ロボットのような、幼児性の抜けない学生に直面してかつてない戸惑いを感じ、家庭科以前の問題が余りに多く、その打開にかなりのエネルギーを費さざるを得ない苦勞記になると思います。それでよろしければ」。

さて、執筆に際して、一応創刊号から十一月号までの「大学では」の項を概観してみると、「喜びも悲しみも幾年月」という感じで、意欲的な働きかけや、それこそ自分の授業にも是非とり入れてみたいアイデアがある一方では、のれんに腕押し of 失敗記もあり、大抵の問題点は出つくしている感じなのである。やはり最大の共通する問題は「家庭科教材研究」の受講生の固定観念と時間数の余りの少なさではあるまいか。

しかし、問題の指摘だけでは非生産的である。そこで本稿では第一部で私の取り組みの紹介を、第二部ではこれまでの執筆者はほとんど取り上げていないより大きな枠、つまり教育職員免許法と、大学のカリキュラムについて述べたいと思う。

新しい家庭科を創り出すためには、内部努力も必要であるが、家庭科やその教師養成を規制する外枠の改革に向けても、われわれは努力すべき責任があると思うからである。

第一部 授業実践

「家庭科教材研究」二単位の授業を私がはじめて担当したのは、広島大学における昭和二十六年である。三十年以上もやっていながら毎年修正をして今日に至っている。それ程この科目は、部分的にはうまくいったと思ふことはあっても、なかなか満足には出来ない。生身の、年々歳々変わる学生を相手にしている上に、木田淳

子氏もこの欄で指摘されたように、「学習主体としての児童・生徒を前提として成り立っている」ことが最大の理由である。ふつうの科目は目の前にいる学習主体を相手と考えればいいが、教科教育は眞の学習主体は他所にいる。つまりワンクッションおくもどかしさ。また、理論を実地に検証してみるには授業では無理で、別枠の教育実習にまたねばならぬし、主導者はその場合は実習校の先生である。一方学生の希望をとってみると、教職科目も、ましてや家庭科関係の専門科目履習はゼロか、それに等しいのに、「実際の授業が出来るようにしてほしい」「家庭科目を全然とらなかった僕でも何とか授業が出来るという自信がつくような講義を望む」「指導案の書き方、学習指導法を」というのが大半を占める。そこでこれらの希望にそうようにと指導案の考え方やスライドによる実習教材の扱い方なども数年間行ってみたが、余りにも「ハウ・ツウ」式をやっているようで嫌気がさし、今は力を入れていない。最近はこのような授業の柱を立てて実施している。

一、既成概念の打破（役割固定観及び家庭科女子専科観）

二、家庭科のめざす学力、小学校では

三、二にてらしての現行家庭科の問題点

四、二、三にてらして題材や指導案を切る

授業の一貫性から言えば五、として授業シミュレーションを加えたいが、二つの理由でおいていない。その一つは前述の一と三に多くの時間が必要であり、またこの科目の最大眼目だと思ふからである。もう一つの理由は昭和五十四年度から「教員養成実地指導」という名の特枠の非常勤講師手当が僅かだが文部省から来るようになったので、「教育法」では十五時間附属中学の先生に五に相当する

部分をやっていたできるようになったこと、小学校課程生には共通の事前指導が整備されて来たので家庭科の五に相当するものはないが、マイクロティーチング実習を含む十六時間の履習が確立しているのでそちらにゆずっている。

さて、私の授業について最近の三年間の実施状況を紹介すると、先ず特筆したいことは、学生の変わりようがかつてない程一年一年激しく、それに対応して授業形態を変えねばならなかったことである。昭和五十五年は前・後期ともグループ単位のディスカッション方式で、前述した一から三までの柱をこなし、四の柱は講義で一つ二つの例を示した後、レポート課題で各人に一題材、又は一指導案を教科書会社の出版物や教科書（小学校）から選ばせ検討をさせるものであった。授業ではテキストを使ったほうが、基礎的な資料をこちらがいちいち説明する手間が省け、学生もあわて半分に出来損いのノートをとるより落着いて人の話が聞けると思われるので、『現代家庭科教育法』を採用している。この第一章から第四章をさ

らに節に細分して一節に二グループを割当てる（一グループは五名内外）。一方は教科書の執筆者の主張側となり、他方のグループは質問攻撃側となって、質疑応答を行うのである。私は質問が柱に直接関係の無い些細な語句に深入りしそうな時、ストップをかけて軌道修正を行ったり、守備側が詰まった時には一般から発言を求めたりという司会役をつとめる。テキストや参考書がある程度読みこなしていないと質問に答えられないためか、かなり学生たちは予習をしてきていることがうかがわれ、初年度は成功したと思った。

しかし何としても一〇〇名を超える大人数で、しかもグループ単位なので、一人一人の勉強も確認したいと思い、授業の進行と平行

して個人課題を大小二つずつ課した。小課題はいつでもレポート用紙一枚で、一つは小学校家庭科副読本として昭和五十年以来福井県が作成し五、六年生に無償配布している小冊子「これからのくらし、消費者読本」の書評。もう一つは論文「小学校家庭科の成立条件」の感想。

大課題は前記副読本から一テーマを選んで、「副読本の記載事項を正確に解釈して使用するための背景となる科学的根拠を他の資料からさがして、副読本の記載事項を小学生に正確に説明する方法を示したり、記載方法の改善案を示すこと」を試みる。

もう一つの大課題は学期末提出のもので、テキストの各章末の学習課題の中から複数で示すと予告しておき、期末の二―三週間前にこの中から一題選択するようにと（あまり早くから出題内容を明らかにすると、それにのみエネルギーをつき込んだり、欠席が多くなると予想されるため）約十題を公表する。授業最終日に学生はかねて用意した一題について参考書類は一切使用せず、答案を書く要領で時間中に書いて提出する。したがって筆記試験はしない。この年度は前後期とも学生の反応はよかったので、私はこの方式を次年度も続けることに自信をもって望んだのであった。

ところが五十六年度は、ディスカッションが少しおかしくなってきた。質問者はますます些細な語句の質問をする傾向が強まり、私はしばしば「国語の時間ではないから、大筋の柱に直接関係のない字句にこだわるぬように」と注意しなければならなかった。前年度は熱心に傾聴しているように見受けられた一般の学生席では、内職が散見されはじめた。良い質問、あるいは柱に向けての質疑応答が少ないので、必然的に私の補いの形で講義が間に長くはさまれる

形となっていた。そして、私の講義やOHPで示す数字は熱心にノートをとるのである。後期になって、授業のすすめ方を説明すると、「どこをどう予習してきたらいいかわからないし、まして何を質問したらいいかわからないから、先生が質問をする形式にして下さい」というのである。そこでその方式を進めてみたが、ほとんど答えになっていない。仕方なく私の講義式説明となる。四の柱になって、県内の研究指定校で試作した到達目標案と評価法試案を入手したので、それを「題材ごと」に到達目標の検討をせよ。具体的作業としては過重・余分と思われるものは削除し、不足なものは追加して、その理由を説明するもの」であるが、削除はほとんどなく、あれもこれもと付加する目標事項が多いのである。「一題材に使用できる時間数から検討しただけでも、そんなに加えられるはずはないでしょう」と何度繰返して、追加案を切ったことか。あるいは「現在大学生のあなた方でも、それだけのことが出来ていますか？」と、一つの到達目標でも、それを本当に理解させるとなればどれだけの働きかけ、活動が必要か、というようなことを説明して、やっとならなくて引っこめてもらおうというような状態が多く、やはり児童の実態もよく知らぬまま、目前にもしもない架空の児童像を描いて検討せよと言うほうが無理かも知れないと、却ってこちらも反省させられたのであった。

そして今年前期、その結果は冒頭に書いたとおりで、授業一五回分のうち、半ば位から私は絶望的になっていた。ディスカッション方式は成立しそうにないので、はじめから講義形式で開始したが、昨年までは講義中のざわめきはほとんどなく（その代わり居眠りは夏季にはあちこちで目についた）さすが四年制大学と、以前非常勤

で行った短大生のざわめきに比べ感心していたのだったが、久しぶりで私はこのざわめきに遭遇したのであった。しかも自分の勤める四年制大学で！

私は怒った。さすがにシーンとなったが数回たつたらまたざわめきである。その次からはざわめきが始まったらこちらもビタリと話をやめることにした。下手におこるよりこのほうが効果的であった。そして質問は？と聞いても一人として質問する者はいない。そこで中間をすぎたころ、どの位講義を聞いているかをみるために問題を一つ「わが国の女子教育として裁縫教育が特に重視された理由を考察せよ」と、この講義に今後望むこと、の二点を書いてもらうことにした。結果はまたまた私が落ち込む材料となった。問題の解答は、テキストを読んでるか、講義を聞いているか、あるいは最初のオリエンテーションの際に渡した指定参考図書リスト中の、常見育男氏の家庭科教育史を読むか、三つのうちどれか一つが出来ていれば書けるものであるが、当を得たものは少数であった。

この講義に望むこと、で多かったのを挙げてみると、「OHPやスライドで示されたデータはノートがとりにくいから、プリントで別に配布してほしい」「外国の家庭科の例を聞いても実際の授業には役立たない、もっとすぐ授業に役に立つことを教えてほしい」「教科書（小学校の）のおさえ方とかポイントを説明してほしい」といったものである。もはやこの科目に望むのは、既存の枠の中でどう毎時間をこなすか、ということを知りたいだけなのである。私は前方だけが見えるように側面を目隠しされた競争馬を思い浮かべてしまった。と同時に、講義の前半は終わったのだから、一の柱の既成概念の打破、二の柱の家庭科の学力、目標―題材―学習材の

縦の関係からみて、三の柱である現行家庭科の問題点も折々に例を挙げて指摘してあったころなのにこのような希望が多いということは、全然講義の効果もなきに等しいと判断させられるようなものである。どうも今までに接して来た学生たちとは異質な要素が感じられてきたのである。

異質でない学生に対して、自分としてもかなり納得のいく授業が出来た時代の一例として、昭和五十三年度の期末レポート「アメリカ、ニューヨーク州第五・六学年家庭科学習範囲と学習成果の表」と、わが国小学校家庭科学習指導要領とを比較考察せよ」数名分から引用したものを示す。これは私の助言もあったので先ずアメリカの目標の示し方にしたがって、縦軸に領域を、横軸に管理・消費者・余暇・職業・健康と安全・人間関係の六能力を分け、その縦横の交叉枠の中に、それぞれ該当する指導事項（具体目標）を日本の学習指導要領からさがし出し配置した表を作成する。そして指定図書に記載してあるアメリカの学習範囲と成果の表とを比較したものである。

＜内容について＞

日本には職業に関することは一つもない。社会科の中でふれているからかも知れない。しかし職業に対する社会科の視点は「工業の一つとしての織物工業」といったように巨視的なものが主である。このアメリカにおける視点はもっと身近なものから職業をとらえていこうとするものである。この二つの視点は平行して行われるべきものであろう。……日本のは全体的に見て被服が多すぎる。……どちらかと言えば、技能・技術は二次的なものである。最低限にとどめておいてよいと思う。（二年男）

このことは日本の家庭科教育の内容の分析があまりなされていないと考えられないであろうか。たとえば日本の「団らんの場合を楽しむ」という所は、米国では「家族各々が食事の時間を楽しむ」のために寄与できることを知る」とか、「食事時間の雰囲気は家族構成員相互の人間関係にかかっているということを理解する」という形で書かれており、「楽しくする」ということがどういう意味をもっているかを理解させることができる。日本の家庭科は個々の実習に重きをおいた文章表現をしている。具体的にこまかい指示がある。それは何をすればよいかはつきりするという利点があると思うが、個々の実習が主となり、何のためにこれをするのかなどもっと基本的なことがおろそかになる傾向があるろう。……「いろいろの年齢・経歴の人たちと交際を楽しむ米国」ということは、今の日本社会にとっても大切なことではないか。(四年女)

一番違っている点は、日本では実習があまりにも多いことである。……アメリカでは家庭科を通して、技術ばかりでなく、人間はいかにして生きていくのが最善なのかを学びとってもらうのが目的ではないだろうか。(三年女)

どうもニュアンスが違う。日本のはできるようにするために実習するのが目的であるし、米国のはできるようにするために学ぶのである。(三年女)

技術習得してそれを将来に役立てるという考え方ではなく、人間生活を豊かなものにしていくために自分も参加していく行動が大切だと思う。(三年女)

〈表現法その他〉

米国のはその目指している目標が一見でわかるようになってい

る。一つ一つの学習内容の全体の中での位置がよくわかるのである。それに対し日本のは、それがどういう角度で見たものか、全体の中のどの位置にあるのかはつきりつかむことができない。(三年女)

日本のは教師の立場から、米国のは子供側からの表現として「のようになる」という式で書かれている。……日本の場合、一つの学年で一通りを学び、次の学年でもまた一通りといった方式で、発展性に欠ける。(二年女)

比較すると、ついどちらの方がすぐれていると見てしまい勝ちである。しかし大事なことはそのようなことではないと思う。……私は今回の比較を通して、なぜかもっと真剣に研究しなければということを感じた。……あたりまえのことを、改めて感じるというものもおかしなことであるが、自分にとっては長い間、本当に重荷だったのが、とても重要なことに気づくことがよかったと思う。(二年女)

日本の場合、学校は学校、家は家、というのか、実用的でないことが目につく。また内容相互の関連性が薄く、一個一個の内容に発展性がないように思う。つまり、知識だけを別個にポツポツと教えている。(二年女)

以上、さわり部分だけを紹介したが、新種の人間が現れるまでは、このようになかなり手応えが感じられた時代もあったのである。

第二部 外枠の改革に向けて

国立の教員養成を主とする大学・学部所属の教官で組織する日本教育大学協会の中に、教科専門部会の一つとして、第二部会家庭科部門という組織があり、構成員は家庭科に属す教官である。目的は

家政科および家庭科教育に関する研究および改善にあたる、となっており、最近数年間は特に問題も多いせいか活動が活発になってきた。今年度も去る十月末の二日間総会が行われ、教師教育の諸問題がメインテーマであった。

この会での議題も研究テーマも、究極には家庭科教育の向上にあるので、いわゆる学会のいき方とは違って、教員養成上及び小中学の家庭科の直面する今日的な問題を取扱うのが特徴である。今年のシンポジウムでは、一、領域間の総合的な取り扱いの具体策について、二、現行免許法を検討する、三、指導における教育機器の活用について、の三テーマについて行われた。続いて二日間にわたり行われた分科会はそれぞれこれら三つのテーマを受けて三部に分かれ、熱っぽい討議が行なわれたのである。このうち三のテーマは本稿の第一部のごく一部のテクニクの問題なので省き、一と二の動向を紹介する。

一、領域間の総合的な取り扱いの具体策について、

これは数年来取り組まれている事柄である。家政学及び家庭科の特質として「生活を総合的にとらえる」「総合的な立場から判断する力を養う」などと言われはするものの、総合の具体例を示すとなると共通理解が出来ていないということで、研究討議が行われているものである。今年も提案者が行った全国加盟大学家政科の総合領域実態調査に基づく資料に分科会提案者の資料も加えられて、次第に総合の具体例がイメージ出来るようになってきたところである。二、現行免許法を検討する

これは大学のカリキュラムを大枠で規制し、教官定員数も規制す

る力があるから大問題である。また時代に合わない免許法に即して免許状が発行され、それを持った先生に教えられる児童・生徒にとっても大問題である。というわけで、昭和五十二年以降数度にわたって議されている。今回は昭和二十九年改正後はほとんど小さな手直し以外はないままに三十年近くを経過した免許法が、いかに現状に合わなくなっているかが強く指摘され、「抜本的改革案をつくって関係方面へ働きかける」ということが了承された。そのための免許法検討委員会も作れることとなったのは前進であった。現行免許法の非現実性は、食物と被服科目が他の領域に比べ多すぎないかということ、総合性を教科の目玉としながら総合科目を入れる枠が皆無なこと、が挙げられた。殊に関東地区案として出されたものは、問題点の指摘がたんねんに集められており、今後の作業に役立つであらう。しかし最大の難問は肝心の文部省が、法改正には消極的なことで、外野席へのPRも協力要請も必要になってこよう。あるいは他教科との共同作戦も必要である。

最後にこの総合の四つの協議題について述べると、三つは運営上の問題なので省くが、二として出されたのは、「大学入試(第二次試験)科目に『家庭一般』を積極的に採用することについて」(福井大学提案)であったので、この方面の努力もしている例として、ここにプログラムに掲載された提案要旨を紹介する、

「高校における普通教育の一環として、『家庭一般』が必要であること、さらにこの履習は男女共に同一条件であることが望ましい、ということとは本部会の多数意見であるといえる(この一証拠としては、昨年度総会での討議経過の総仕上げとして、本年六月二十一日、本部会所属大学数の九〇%、所属会員の七〇%の署名簿を添え

て、『男女共修に関する要望書』を文部省の関係諸部門に田村運営委員長を含む代表六名が参上し手渡したことが挙げられる。児童・生徒の全面発達という教育目標の中で、人間としての基礎的な生活能力を育成し、さらに過渡期的なねらいとして性別役割固定観を打破する効果も期待される男女共修の家庭科の実現は、私共二部会家庭部門としては積極的に取り組むべきものと思う。

しかるに大学入試に際して、『家庭一般』を入試科目に加えているのは大学では、国立三、公立一、私立十一、短大では公立二、私立八十一(某教科書会社・昭和五十六年調べ)となっている。わが国のとくに過熱の一途をたどる受験事情は、受験科目に非ざれば教科に非ずと言わしむるような風潮も招来している。このような時機に

こそ、家庭科の必要性と普及、発展の効果的方法として、われわれ会員校が率先して『家庭一般』を受験科目として重視し、実施すべきであると考えてるのでここに表記の件を提案する次第である」。

結びにかえて

まだもう一つ、新しい問題として出てきたものに共通一次世代がある。すでに紙数もないので問題の指摘だけにとめておくが、我々の教育対象であり、明日の教育主体者自身について何が彼らをそうさせたか、彼らにはどのようにアプローチすべきか、等々今後の大きな課題である。

(福井大学)

☆☆ 報告 —

優生保護法改悪反対集会にて ☆

十一月三日、東京・山の手教会で開かれた優生保護法改悪反対集会は、障害をもった人との出会いの場でもあった。

集会には手話通訳がついた。発言者は、ともすると与えられた短い時間の中でより多くのことを話そうと早口になるが、通訳の人がついていけないと注意され、わきにいる通訳の人を見つづ、ゆっくり話してくれた。速ければ速いなり耳をそば立てて聞いていたかもしれないけれど、とても聞きやすかった。

耳の不自由な人も一緒に聞こうよ、話し合おうよ、という姿勢を持つだけで、こんなに違うのかな、とうれしくなる。

集会は朝十時から夕方五時まで続くが、様々な立場の人たちから改悪反対のアピールが続いた。その中で、車イスに乗り、語るのも不自由そうな全障連の鈴木利子さんから「産む産まぬは女の自由」というスローガンに疑問を持つと語りかけられた。

鈴木さんは二十数年間の施設生活をしてきた人。十四歳で生理になったその時から「しょうがないわね。ここだけ一人前で」と親をはじめ回りから言われ続けていた。

施設の限界を知ると共に施設で生きていくためにはいい子でいたほうがいいのではないかと考え、自ら女であることもあきらめ、二十歳の時、子宮摘出手術を願ひ出してしまうのだ。

今、改めて「ほんとうに、子宮摘出を願ひ出したのは、女である私が決めたことなのか!」と考え、「障害者が地域で自立して生活している社会こそ、女が安心して産める社会ではないのか」と訴えた。

大きな課題を投げかけられた。「私が決めたこと」は「私の自由」であったのだろうか。

(馬場洋子)



視 点

〈学校に「行く」「行かない」〉

長谷川 孝

教会の日曜学校に出席するために、授業参観があった日曜日の登校日に学校へ行かなかった小学生とその両親が、日曜日を授業日に指定し、出席しなかった子を欠席扱いにしたのは、憲法二〇条の信教の自由を侵すものだ、東京地裁に提訴した（朝日新聞⁸²・10・19）。この訴訟は、信教の自由への侵害（宗教教育への公教育による侵害）を当該の事由として起こされたものだが、これは公教育に対する私教育権の主張であり、きわめて重要な問題を提起している、といえる。さらに、学校へ行かなければならないということ（小中学校では就学の義務）の分量的な限界——つまり、どのくらい学校に行けば就学（の義務）を果たしたことになるのか、という問いかけをも含んでいるように思う。

また、横浜の市立中学校で中学三年生が、「校長に『毎日登校するのは大変だから週三日くらい登校すれば卒業証書を出す』という『承諾書』を書かせていた」（毎日新聞⁷²・9・6）として、問題になった。私はこの記事を読んで、べつに「承諾書」があらうとなかろうと、週三日でいどの出席にたとえ満たなくとも、この「非行」生徒は「とどこおりなく」卒業していくはずだったにちがいないのに、とまず思ったものだ。早く送り出して「お荷物」の生徒とのかかわりを片付けたいのは、むしろ学校のほうだ、といってもよ

からう。学校（校長）には卒業を認定する権限があり、出席日数がかなり足りなくとも、「卒業させてしまおう」ことができるはずである。しかも卒業の認定における出席日数については、さほど明確な基準があるわけではないのだ。

私の住む相模原市内で、「登校を拒否していた五年生の長男を、思い余った母親が絞め殺し、自分も左手首を切って自殺した」（毎日新聞⁸²・10・26）という、なんとも悲しい事件があった。「学校へ行かない」ことが、二人の人間のいのちとひきかえになっていいはずなど、断じてないと思うけれど、現実にはひきかえられてしまった。「学校に行かないこと」（そして「行けない」こと）は、いのちとひきかえるほどに、強迫観念として親子を苦しめているのである。

思い返してみると、「学校を休む」ということには、「特別なことをしている」「うれしさと、」してはならないことをしている「うしろめたさ、とを感じていたような気がする。病気でも、なにか家庭の都合で休んでも、こういう相反した気持を抱いたのではなかったらうか。でも私自身は、どちらかというと、うれしさ（なにか晴れがましいような）のほうが目象に残っている感じがする。学校に行くこと（学校生活）は明らかに、子どもとしての私の生活の一部分にすぎなかったし、友達、が学校に行っているあいだに、他の時空

にいて別の経験をしているという、なにかワクワクするものがあつたのだ。

しかし現実には、うしろめたさに押しひしされる人たちが、とても多い。“学校に行かない”ことは、痛苦であり、罪悪であり、恥でもある。私はこの背景に、子どもたちの（親たちも一緒に）生活が、学校というローラーで整地されたように単層化され、存在感を喪っている状況を見うろと思う。生活とその意識のあり方や様式が学校化しているのではないか、ということだ。

学校以外の「わたしの領分」が多層多層で豊かなら、学校へ行かない”という学校とのつきあい方があらわれてきてもふしぎではなからう。“学校をサボる自由”があつてもいいのだから（欧米のフリースクールでは肯定しているようだ）、ここでは、親の教育権（私教育の権利）や子ども自身の主体的に「学ぶ」権利の保障のための「学校へ行かない」権利や「学校を休む」権利、学校の外で学んだことと学校で教育を受けることを同等とみなすように求める権利が、あつてしかるべきだ、という考えを述べておきたい。

卑近な例を挙げれば、葬式や結婚式、とくに祖父母など身近な人の葬式には、子どもに学校を休ませるべきだ。葬式に出さないで学校に行かせたりしたら、それこそ罪悪である。「生と死」を、全身全霊の響きのなかで学ばせてもらえるかけがえのない場であり、学校へ行くことよりはるかに優先されるべき機会だ、と私は考えている。学校で十分に学ぶチャンスを保障しない事柄を学ぶ場と時を、学校の外に確保する自由も、きちんと考えられていいだろう。親の教育権や子どもの「学ぶ」権利と学校教育が衝突したとき、学校教育がとうぜんに優先するなどとは、私はまったく考えない。

だいいち、学校が決めた全授業日に学校へ行くのがあたりまえで、休日の一方的な変更に従わねばならず、休むと「欠席」扱いされる（教師もふくめて労働者には有給休暇があつて、休んでも「欠勤」にはならないではないか。子どもにも「年休」をノ）のは、とうぜんのことなのだろうか。“皆勤”や“精勤”はとうぜんとして、毎日々々せつせと学校に通うべき、それほど定かな理由は、私には思い当たらない。つまり、「就学（義務）を果たす」とことと“皆勤”や“精勤”とは関係ない、といえると思うのだが、いまや大学でさえ出欠をとるほどの現実になっている（かつては、講義にせつせと出る学生は、むしろバカにされたものだったではないか）。

親が子どもを教会の日曜学校に行かせたいと願うのなら、それを選択するのは親の教育権として認められるべきだ、と思う。もしその子が将来、宗教者になる意志があるのなら、職業選択の自由にもかかわる、といえよう。

公教育にすっぱりと依存しきつてしまっている現在の状況を反省して、「私の教育」と「私の学び」を見直すことが、いまでも必要なのではないだろうか。親の教育権と子ども「学ぶ」権利が根こぎの状態になりながら、公教育がやたらはびこっているから、学校教育がおかしくなっているのだ。公教育＝学校教育とは、ほんらい、私教育や「学ぶ」権利の必要に応え、その要求を満たすためにこそ、その存在理由があるはずだ、と思う。

生活の教育としての私教育（いわゆる「しつけ」や学校での生活教育ではなく、親や地域住民の教育権）を再確認し、生活そのもの、とともに再建することを考えたい、と思う。まず、その「思い」だけでも養いたいものだ。（この項つづく）

（教育評論家）

児玉 すみ子

「ある生徒が、何か事件を起こしたとする。処分に関しての職員会議が開かれる。そこで発言の型は、どの学校でも共通しているのではない。次に、思いつくまま挙げよう。

一、「この子には倫理感覚が欠けている。日ごろも、これこれこうです」
二、「最近、こういう行為を平気で犯す傾向が強い。他にも広がりがないよう、懲らしめとして、それ相当のきつい処分にすべきである」

三、「涙を見せはするが、けろりとして、ふてくされた様子もあり、反省の色が見えない」
四、「罪悪感を植えつけるには、厳しい処分に服させるべきである」

五、「外部にも迷惑をかけ、学校の名前が出してしまったのだから、以前、同じような事件の場合の処分と較べたら、釣り合いから言って一週間の停学じゃ、軽すぎる」

六、「再度、同じことをしたら退学という一札をとるべきである。この位で許されるなら、又やってやろうという甘えが生まれる」
七、「母子家庭ですが、母親は、しっかり者で几帳面。この子も人の良いところがある。

倫理感を持たせる本を読ませて、反省文を書

かせ、反省のぐあいを見たらどうか」

八、「いや、人間は悪くないが、行為は許せない。悪い点をすべて指摘してやり、納得させるまでは、謹慎させる」

九、「この事件の裏には、嘘がある。取り調べで明白にして、なめられないようにすべきだ」

十、「悪いことをしていながら、私にまだ反抗し、態度が改まっていけない。改心するまでは、復学させるべきでない」

これらの発言を読まされると、何という冷酷な教師

たちであろうと思う読者もいよう。しかし、これらは、悪意から出たものではない。教師の価値観からはみ出した、理解しがたい行為をする生徒に悩まされ、他の者に波及しては大変という思慮から生まれたものなのである。しかも、いわゆる熱心で、まじめで、「こうすべきである」との倫理感の強い教師の発言なのである。巷に数多い、自称、他称、教育評論家の、批判や攻撃の的となる発言であろう。しかし、私は、これらの発言の源となっている「人間観」に光をあてて、実はその「人間観」は、教師のみならず、世間一般の親も、評論家諸氏も、あなたも、私も、自らの内に深く内蔵している「人間観」なのではないかと問うものである。そして、あてる光の源は、もう一つの「人間観」、ロジャーズによって代表される、カウンセリングにおける、実存的な「人間観」なのであると言いたいのである。

その相違を、単純に明確化するために、ダグラス・マクレガーが指導者と呼ばれる人が暗黙の内に抱いている人間観の基本仮説として、X理論・Y理論と分けたものを紹介してみよう。^(注1)

X理論——「人は、誰か別の人に、指導監督されないと、進んで学んだり努力したりしないものだ。人に学ばせ、働かせるためには、上に立つ者が、叱ったり、賛めたりしなければならぬ」

Y理論——「人は、その人が尊重され、理解され、誠実に相対されている限りは、みずから進んで学び、努力するものだ」

各派カウンセリングも、それを信奉する人々も、X理論・Y理論のいずれかを取るものであり、又、その折衷を取るものである。別の言い方をすれば、人間を(1)反応的存在として見て、生徒を条件づけ、強化し、環境的決定論などの考え方に照らして見るか、(2)生成の過程にある存在として見て、自己実現の傾向や成長の力が人間に内存すると見るか、に分けられる。(1)の見方が、教育現場のみならず、社会一般にも優勢であり、かくして、生徒の行動を監視し、賞罰、強制を与え、外部から規制することで、行動・人格の変容を期待するという動きが起ころ。前述の職員会議での教師の発言は、すべてこの人間観に根ざしたもの、と言ってよい。人間を行為から切り離し、行為の善悪の序列化に従って、人間を序列化し、罰が定められる。善悪にはたった一つの基準があって、言葉によって知的に理解され、賞罰によって身につくものとする。従って、価値は教えこまれるものであり、よい価値を教えることが教師の機能であるとする。再度、犯したら厳罰という脅しの下で、人間の悪は制御できるとする。この生徒に対する指導は、この個人のためであると同時

に、集団の秩序を守るための、懲らしめ、見せしめ、であり、公正を期す釣り合い、が大いに考慮されねばならない。客観的な事実こそが信ずるに足るもので、その個人の主観的事実への配慮は「甘やかし」として顧りみられない。従って、その生徒の行為は、教師の自分には、不可思議な、理解を超える、不屈き千万な行為であって、自分とかわかる一点も見出せない、と片づけることになる。

さて、実存的アプローチをする、カウンセリングにおける人間観を、これに対比させてみよう。

一、人間は、自由意志をもって、自分の存在を決定する。自由選択の機会を保証し、自ら決断し、責任をとることを尊重し、かくして、その人間が自分の行動の根拠となるものを、より高いものに創造していくよう助ける。

一、人格の変容は、自己の現実をどのように認知するかに深く関わっている。しかも、その自由な自己探究は、脅威や評価のない場で、理解と受容に支えられて、可能になる。

一、人間は、全人格的な体験によって学ぶもので、単に、知的にだけ反応したり、情緒的にだけ行動するものではない。従って、人間性すべてを投入しない言葉や行為は、何ら影響を与えない。人間との接触の中で、人は自ら吸収するに値すると考えて、内面化し、自らの存在の一部とするもののみを、真に「学ぶ」のである。

一、人間の表現するすべての面は、自己のうちにも、程度の差こそあれ、認めうるものである。人の行動を、その人間性から切り離さず、人間そのものに反応していけば、相手の行動の共有化を行うことができるようになる。かれの現実を共に深く経験することがで

きるようになる。

一、人間は独自の存在である。他との比較、他との釣り合い、他と優劣をつける評価、に拘泥すれば、個人の価値は破壊される。一見同じ行動特徴を示しても、それぞれ、自分なりの表現をしているのである。

◇ ◇ ◇

人間ひとりひとりが、これ程の信頼、尊重、受容に価するという「人間観」を、確信をもって、抱くことはできるものであろうか。「見せかけ」や、「こうすべきである」からではなく、内からの自然な発露として、この「人間観」を体現できるものであろうか。私自身の日常は、この確信が揺らぐことにしばしば出会って、それを維持する努力を放棄してしまうことが多い。

しかし、職員会議に座している時、前述のような発言の一つ一つはすべて、私の心を素通りしていく。

「その子は、今、自分のやってしまったことを、どうとらえ、どう感じているのか」

「その子は、やってしまったことで引き起こされた結果に、今、どう反応しているのか」

「その子は、どういうプロセスを踏んで、こういう形で、自分を表現してしまったのか」

「その子は、今一番、何を訴え、何を解決したいと望んでいるのか」

「その子にとって、周りの人間は、これまでどう写っており、今どのように写っているのか」

「その子は、自分を今、どう思っているのか、自分の現実、直面できなくて、混乱したり困惑したりしていないか」

「その子は、今後、どうやって自分を切り拓いていこうとしているか。その道は見えてきているか、それとも八方塞がりなのか」

そう思った思いが、私の中を駆けめぐる。行為の状況を、事細かく、正確に、一つもらず報告し、それに対する処分は、何がもっとも適当かを、延々と討議している会議の最中、私の心の中には、否、眼の前に、その子が浮かんでくる。今、自分の家で、やってしまった事の大きさに、おのきながら、あるいはふてくされながら、家族の、あわてた、あるいは、冷たい反応にさらされながら、傷をなめる術も知らず、四面楚歌の檻の中で、身を縮めている姿が浮かんでくる。そういう時の人間に（子供に）、一体何が一番、必要とされているのであろうか。

私はいまだ、確とした「人間観」を抱けないでいる揺らぐ人間である。しかし、こうした絶対絶命のところに立たされた人間に（子供に）、必要なのは「共に立ってくれる人間」であらうことだけは、確信をもって言える。彼の現実を肯定するとか、認めるとか、許すとかかばうということではない。彼の現実、それがどんなものであれ、共に立って、尚たじろぐことのない人間こそ、彼が今一番、必要としているものである。そういう人間になりたい——これが、私の今はかなわぬ目標である。しかし、ロジャーズも言っている。「私は、これが安易に進んでいける方向でもなく、完全になし遂げられたものでもないということを示明らかにしてきた。それは、休みなく続いていく人生の道である」。

注(1) 古屋健治論文「人間の成長と変革」からの引用

「指導と評価」Vol.16 No.1 から

注(2) 坂本昇一論文「生活指導の理論」からの引用

『現代のエスプリ』No.172 から

♥娘が「少女売春」と噂されたと書いたが、他の高校生もやられていた。いわゆるカップルになった男女が相手の家へ遊びに行く。遅くなれば送っても行こう。それを目撃する近隣の大人たちが、男女の親に電話で抗議(?)をするそうだ。親は子に、世間の眼がうるさいから交際をやめてくれ、と懇願する。成長しないでくれというんかや、と彼らは笑う。

♥学校へ通報するご親切な大人もいる。それにしてはヒマな人たちだね。刺すような大人の視線を意識しつつ、挑戦し、あるいは追いつめられ、密かに欲望を遂げてしまうカップルもある。大人が憂うる「性非行」の状況はセックス産業によるあくどい刺激を除いても、大人みずからが作り出しているのだ。

♥娘はカップルは組まない。そのかわり、高三の男子に囲まれて歩いている。一人に決めるよりそのほうが楽しいよ、ってそりゃそうだろう。そのままドヤドヤと家に入ってくる日もある。ご親切な大人たちはどういうか。「あの子、男なら誰でもいいんか」「デキているんやないか」——知らせてくれた母親もあまりのえげつなさに吐息をつく。

♥カップルの相手以外には異性感情は表面的にはない。それが青春のルールらしい。大人の眼を避けて拙宅でデートするカップルを交え、くったくのないじゃれ合いの楽しさをはじける。私も強引に入れてもらって話すうちに、『女のからだ』『マンズ・ボディ』などに、テールに並ぶ。なんと楽しい学習だろう。

丙十舞雅里 バラード (9)

♥貧しい性の大人たちよ、と嘆いてもはじまらない。この楽しさを、この無邪気さを、大人が共有できればわかってくれるのではないか。だが、そのすべてを私は知らない。性をいやらしいもの恥すべきものにとらえている人々に、腰枕も性交も健康なコミュニケーションですよ、と言っても耳を貸さないだろう。

♥手さぐりで男子と女子が近づき合おうとしている。眉しかめる大人を反面教師として、内なる自然の感情を見つめつつ、やさしい男女のありようを模索している。息子に似たA君がいう「智子(娘)」と話していると年上の人と話している気持になる。オバサンが強姦みたいなセックスをしないためには何が必要かと言ったけど、僕は相手のB子に対してこの態度が欠けていた。男女が対等になるには男が男の傲慢さに気づくことが必要だろう。

♥カップルがあらうとなかろうと、休日は一入二人と朝からわが家に群れる。ある日、二階にこたつを出して男子三人を上げた娘。なにげなく入っていった私はギョッとした。四人がまるくなり腰枕で寝転んで音楽にうっとり。しかたがないので私も一緒に寝転んじやった。

♥娘がいう「サバサバしたグループよ、男女を意識しないの。でも最近、皆で騒ぎながらAと私の心が見つめ合っている。B子に悪いな。ママ、どうしよう」。どうとでもしてくれ。苦き食らって下痢をしても大きくならあな。
(門野晴子)



学習の 主人公たち

男の子に言いたい、女の子に言いたい

横浜市立公田小学校四年生の子どもたち

「男の子に言いたい」「女の子に言いたい」ということで四年生の子どもたちに書いてもらった文章の中に、相手に対する要求とともに、自分を見つめ直す視点を持ったものが、数少ないながらあったことに注目しました。

言っぱなし、書きっぱなしではなく、これをきっかけに、お互いを理解することにつながると思います。

(塚越敏雄)

男子

①男がちょっとした事でもすぐ先生にいいつけないでほしい(「ちょっとまちがったりすると、大きな事みたいになってすぐ先生にいいつける」)。

②自分勝手な事をしないでほしい(勝手な事をいわないでほしい)。

(班全員でやる事など女の子たちだけでやったりして男の子はぜんぜんやらないとか、「男の子ってすぐ人の物かってにつかうのね」とかといって自分が勝手に使ったりする)③ずうずうしいのをやめてほしい。

(たとえば何かをひろってくれたから「ありがとう」といおうとすると「ありがとは」とかいったり「ありがたく思いなさい」とかいってほくちがひろってあげたりすると何もいわなかったりする)

*全体的にはいやなところもあるけど良いところもあるとほくは思います。そこには悪い事ばかりかいたけど「いい例」というのもあるのでいいでしょう。それに男子が悪い事もあるんだからお相こです。しかし今かいた三

つは直してほしい。

女子

①女の子どうしがはなしあっているのを聞いて、いいふらさないでほしい

②すぐ、むかつく人が多いので、そういうことはやめてほしい

③女の子がしつばいしたことを、大わらいして、人いいふらすのはやめてほしい

④人の物にへんなことをするのはやめてほしい

⑤けしごむのカスや、紙をまるめた物を、男の子どうしで、なげあっていると、だいたい女の子にあたって、あまりあやまらないのでやめてほしい

⑥ものをかくしたり、とったりして他の人のせきにおいたりするのはやめてほしい

⑦ふけつなことをするのはやめてほしい(きかないものをなげてきたりする)

男子

「なんで、そんなに、仲間はずれが出てくるのかな」と思う。ひらだてさんも、中川さんも、もう二人目。みんなで遊べばいいんじゃないかと思う。男子も、ときどき、何こかの

グループに分かれるけれど、一人も、仲間は
ずれにはならない。女子をみていると、教室
のはじで、本を読む人、三人だけで、黒はん
の前で、ウロチョロしている人、いっぱい
いる。「遊びに、入れて」と、言っこないから
かもしれないけど、中川さんや、ひらだてさ
んのばあい、「いれて」といっても「もういっ
ぱい」だとか、いやなかおをするけど、係き
めで、先生がいるときだけ、やさしくても、
どうにもならない。中川さんや、ひらだてさ
んが、仲間はずれにされて、ふだん入れても
らえず、女子は、ほかの人が、中川さんのこ
とをうわさすると、すぐにとんでいって、そ
れをきこうとする。それが、きにいらな
いけど、仲間はずれにされた人も、ちよつと、自
分のことを、考えてみたらと思う。男子も、
それにのるけど、じょうだんで、いっている。
女子みたいに、へんなふうにはしない。仲間
はずれがでると、ぼくたちまで、じょうだん
が、本気にされて、先生におこられているの
をみたから、みんな、いっしょに遊んでほし
い。これだけ。

男女べつしない。

女子

グループかつどうをやり、みんな仲よくし
たい。

人のものをかってにつかわず、ことわって
からつかってほしい。

いやがらせをしないでほしい。

人のきもちにたいして、わるぐちをいって
ほしくない。

あやまるときは、ちゃんとあやまってほし
い。

きめたことはまもってほしい。

いばらないでほしい。

人のきになっていることやいやがらせをしつ
くくいわないこと。

男子

男によく「ばかみたい」とか「やあね」と
かいうのでやめてもらいたい。すぐ消しゴム

などをかりると「やあね」とかいうからも
うこっちはにくたしくなってしまう。あとこ

ろんだりするとよく女子が「ばかみたい」と
言う。これもやっぱりにくたしくなる。も

うぜったいそういうことは言わないでもら
いたい。

あと男子対女子のドッチボールをやってみ
たい。まだ一回もやっていないからおもしろ

そう。こんど先生も入れてやってそういう時
間や中休み昼休みにやりみんなでのしくや
ってみたい。

女子

わたしは、組がかわるたびに、ひどいあだ
なをつけられて家に帰ってそのあだなをお母
さんや、お父さんにはなしたら、ばかにされ
てないたことがあるので、ひどいあだなをつ
けないで、ほしい。

まえ、わたしがシールをもってきて、そ
ろえていたら、男のこがきて「くれ」といつた

から、「こんど」といつたら、その男のこが、
わざとなにげなくわたしのことをけつとばし

たり、ぶったり、足をふんずけたりするの
で、すぐにおこらないでほしい。

テストのときカンニングする男の子がいる
からカンニングしないでほしい。

じゅぎょう中うしろを、むいて話したす男

の子がいるのでやめてほしい。

男子

このごろ、女の子はぶちすぎだと思
う。たとえば、二人で男の子が、女の子の、うわさ

というか、ちょっと女の子に対して、ちかこ

る女の子は、いやだなと、いっただけで、すぐぶつ。そういうところがわるい、男も、わるいけど、すぐ、ぶつというのは、もっとわるいと思う。

でも女の子のいいところも、ある。それは、たとえば、男の子が男の子に、物を、借りようと、すると、すぐ、かすほうの、男の子が、だめと、いう。

また、女の子の、わるいところに、もどるが、ちかごろの、女の子は、男の、トイレに、入って、きたりする。

だけど、おとこの子も、わるいかも、しれない。それは、女の子を、からかったり、するから、女の子が、おこるのかも、しれない。だけど、男トイレに、入ってくるなんて、いいのだろうか。もし、中島先生やおく山せんせいが、トイレに、いたら、どうするのだろう。

女子

①男だからっていばらないでほしい。いつも男のじぶんかって

②わたしも男の子になればよかったなと思う。なぜかは、わからないがそう思う。

③男の子は、なにかをひろってあげて、あり

がとうはなにもいわないからいやだ。
④ないいきがえているときじろじろみる。
いやらしいと思う。

男子

①いつでもよこに女がいるせきはおとことおとこですわりたい。

きゅうしょくのときでもとなりはおんなで、まえもおんなではさまれているようです。

②せきがえのときすきなものどうしてすわって、べんきょうやきゅうしょくをたべたいです。

③ぼくはいつもおとこだけのクラスがほしい。ほしいとおもっています。でもそんなクラスはないからどうしようもないと思いました。
④おんなはいい学校がほしい。

女子

☆わる口をいわないでほしい!!

☆ぼう力をふるうな!!

☆気になっっていることをいわないでほしい!!

☆あんまりでしゃばるな!!

☆人をばかにしないでほしい!!

☆しゅうだんでいじめてほしくない!!

☆よわいものいじめをするな!!

☆男の子なのにどうどうといたりできない人がいる!!

☆こそそと人のことをいわないでほしい!!

☆人のきずつくことをいわないでほしい!!

☆100点とったら、すぐにいばるな!!

☆少しのことですぐおこるな!!

☆よわよわしくしないでほしい!!

☆女の子をいじめるな!!

以上

男子

ぼくはいままでにわる口などを女子にしていたのでわる口やいじわるをした人に十度あやまりたいと思う。それで女子にすぐぶたれるからやめてくださいといいたいです。

女子

①もうすこしやさしくしてほしい

②わるぐちをいわないでほしい

③あんまりいばらないでほしい

④やすみ時間のとき、あそんでいたら、おとこたちがじゃまするからやめてほしい

⑤ちょっとのことでおうげさにしすぎる

男子

ぼくは一かいてもチヨコレートをもらったことがありません。

どうにかしてチヨコレートもらいたいけどもてないからしょうがない。

そしたらとなりの○○さんが「もっと○○くんみたいにやさしくしたら」と言った。

だから○○くんはバレンタインデーにチヨコレートを10こ以上もらったときがありました。

ぜったいに来年のバレンタインデーにチヨコレートをもらいたいですよ（男の子より女の子へ）おねがい。

女子

。なめんなよじゃなくて、いばんなよ。

。悪口いうな!!

。しゅうだんでよわい女の子をいじめるな!!

。ちよっとのことですぐいばるな!!（たとえ

ばテストで百点とったからって）

。気のよい女の子をなかなすな!!

。こくばんに、女子のわるくちかくな!!

。けつして、バカにするな!!

。コソコソ悪口いうな!! おかまはやめてほしいノ（もっと気をつよく）

。人にきずつくことは、ぜったいいうな!!
。しつこくいわないでほしい。

以上

（とにかく私がいいことは、人がきずつくことをやめてほしいことです）

男子

一、二人の女の子と友だちになってほしい。そのわけは、ぼくは、一年二年三年四年生のうち、女の子と、ぜんぜんなかのいい友だちになれなかったから。

ぼくは、いっしょうけんめい友だちになってほしいとおもっていると、女の子が「ぼか」とか「うるさい」とかいます。ぼくは、まだだれにも、きらわれたことがないのに、そういわれるので、かなしいから、いやだと思いました。だから、一、二人の女の子と友だちになりたいです。

女子

そうじ中など、大事なときにふざけてからかってくるのはやめてほしい。A君はちょっとしたことですごいぼう力（けつたりする）をふるう。男子は（A君はとくに）だいたいけつたりするのをほん気するのがいやだ。

男子と男子どうしでよくけんかするのはB君で注意するとやつあたりする。

あと一番やな事はC君みたいな人で、「EはDがすぎなんだゾー」とかってにきめてしまったり、Mさんが、『そ』のつく人がすき」といったらC君はわざわざ外のクラスへききに行ったりして、とうとう「Wが好きなんだゾーMは」とみんなへいいふらしました（私はさんざん注意したけど）。これが私にとって一番いやな事です。私もきらいなのにC君が「おまえ、Oが好きなんだろう」といわれました。私がきらいなじゅんは ①好きだ・きらいだからかう ②すぐけんかをしてぼうりよくする ③大事なときにかからってふざける、です。

男子

。男のトイレに入らないでほしい

。女だからっていばらないでほしい

。すぐおいかけないでほしい

。すぐはつきょうしないでほしい

。ブリッコしないでほしい

この七、八年来、父と二人ぐらしをしている。母は私が高校三年のときに亡くなり、姉は結婚で家を離れてしまったからだ。それまでは姉が主婦がわりをしていたのだが、急に私にすべてが振りかかってきた。部活動を終えて、校門から駅までの20分間に夕飯の献立を考える。駅の近くのマーケットで買い物をするのだが、体はクタクタ、ついめんどろになり、駅の売店でシウマイを買って急行に飛び乗ることが度々だった。私が帰宅して30分後に父は帰ってくるので、その間に、台所に散らかった朝の茶碗やなべを洗い、あとはキャベツを切るだけ、もうそれで精いっぱいなのだ。そして片づけや翌朝の仕度やらを済ませると、10時過ぎとなる。父はというと、新聞・テレビを見て寛いでいる。そんな日々を過ごしているうち、同じように仕事を持っているのに、どうして私にだけ家事の負担がかかってくるのか不満になってきた。また、どうして四苦八苦している私を見て平然としていられるのかと思った。もう怒りだった。

父も家事を分担してほしいと訴えると、男はそんなことをするものではない、そんなことをしていると男に好かれないうと、取り合ってくれない。しょっちゅうケンカした。身のまわりの自立なくして、男は自立しているといえようか。もはや父と娘ではない、ひとりの男とひとりの女だ。どのよ

うに生きるべきか考えてほしいのだと叫んだ。私は中学の家庭教師だが、未熟なりにも、生徒に一生懸命に教えようとすればするほど、女生徒たちに女の道を、私が方向づけていやしないかと胸が重かった。どうして男女役割分業なのか。また、それを不思議と思わない男と女。私の生き方が問われているのだと思った。目の前にいる父が、世の中の男すべてに思え、必死で訴えた。台所に主はいらない。父も気軽に、ずっと台所に立てるようになってほしい。

まず、父の好物の刺身から始めることにした。父はよく刃物を研いでくれるので、刺身包丁を研いだあと、試し切りと称して刺身を切らせることに成功した。その後、しばしば夕食が刺身定食になったことはいうまでもない。幸い海に近い所なので生魚が安く手に入ることもあった。

父が家事に、それほど抵抗を示さなくなったのは、病気をしてからである。胃潰瘍で半年入院した。三回の手術に耐えて退院したとき、半分にやせ細ってしまっていた。胃が壊となり、病院で食事療法を指導され、食べ物について考えるようになった。また、もともと好奇心が強いので、作ることへの興味もわいたらしい。退院後、すぐに定年退職を迎え、暇ができたこともよかった。あるとき、このごろの梅干は輸入品が多いとラジオで聞いて憤慨しているので、それなら作ってみてはと、梅干の作り方の載っている雑誌を渡して出勤した。帰ると大きな青梅がザルにたくさん洗ってあった。おもし

母から息子へ

一年坊主の息子鉄太郎、まだまだ背中に天使の翼を付けているキミは、私たち夫婦の宝物です。いとおしく、おもしろく、そして私たちを育ててくれる存在です。「ボクは、ゼッタイ、科学者になるからね」と言い続けているキミ、翼を全部塗り取られて大人になった時、しっかりと地に足を付けて歩いていける人になってほしいと思います。解放され、自立した一人の男として。

母から息子へ

小野美智子

この間の夕食の時、キミは姉に向かって、「お姉ちゃん、もっとお母さんのお手伝いしてお料理覚えないと困るよ。ボクは男だからいいけど、…」と言い出して、私たちを啞然とさせました。私はあわてて、「そんなことないよ。男だって、料理ぐらいできないきゃ困るよ」「お父さんが料理好きなのに、オマエはまた随分保守的なこと言うね」と夫。「あんた、その顔でお嫁さん来ると思ってるの」と娘。まあ、顔はともかく、いいチャンスだから、私は、「あのね、

娘から父へ

ろがっているらしいので、今度は、らっきょうの漬け方のページを開けておくと、数日後、ガラスの広口びんにぎっしり漬けてあった。そのうちに、本屋さんで作り方を読んできたといっ、お赤飯をふかした。テレビの料理番組を見て、得意気に、ごちそうしてくれるようにもなっていた。今ではもう、何でも作れる。最近、本屋さんに立ち読みをしていたら、どこかの奥さんがコッスを教えてくれたといっ、糠漬を始めた。糠みそは生き物だといっ、私にさわらせない。母には申し訳ないが、今では我が家は、すっかりおやじの味に占領されてしまっている。

ある朝、今日のきゅうりの漬物はどうだと聞く。おいしいと答えたが、喜ばない。糠を足したら、まずくなったというのだ。化学調味料の味がする、やっぱり米屋で売っている自然の糠のほうがおいしいと呟いている。

今65歳の父は、私が出勤すると、そうじ・洗たく・炊事すべてやり、庭の隅でとれた青じその葉で作った父特製の青じそ酒を嗜み、仏教美術に興味を持ち、ときどき、インドや中国の旅を楽しんでいる。

最近、些細なことで父と大ゲンカした。いきなりぶたれた。ぶたれるなんて、中学生以来のことだったので、びっくりした。家を出ようかとまで思い、寢床でアパート探しを考えていた。翌朝、口なんてきくものかと思いいながら食卓につき、父と眼を合わせたたん、石のように堅かったわだかまりが、一瞬のうちに消えた。今までにないことだった。いつか、映画「黄昏」で見た性格の違う夫婦が、長い年月の間に深い愛情と信頼とで結ばれていくような、何かひとつ乗り越えた愛のようなものを、父と娘とはあるが感じたのである。

(藤沢市立御所見中学校)

うちは大人になったら、サッサと出ていってもらいますからね。その時に、お料理やお洗濯ができなかったら、あわてて、つまらないお嫁さん見つけちゃったりすることになるのよ。自分のことがちゃんとできれば、ゆっくりと素敵な人を見つけれれるでしょ」と、ちょっと真面目に言ったのに、夫が「そうだよ。お父さんみたいにサー」と茶化すものだから、キミたち二人がドテツとコケたところで、この話は終わってしまいました。

でも、頭の隅っこで覚えておいてください女の解放が叫ばれて久しいけれど、男だって解放されていけないのです。そして、そのことに、ほとんどの男が気付いていないのが、女以上に悲劇なのです。女の解放は男と敵対して勝ち取るものだという人がいるけれど、私はそうは思いません。男も女も、共に自分を築いていく上で解放されるのです。解放され、自立した男と女が会ってこそ、いい人間関係が生まれるのです。

私は自分の手でキミたちを育てたくて、仕事を辞めてしまったので、大分、原則が崩れてしまったけれど、キミも大きくなったし、玄米食のお陰で熱も出さなくなったし（こう

いうの、甘いつて怒られるのよネ）、この辺で少し建て直そうと思って、昔やっていた室内設計の仕事をもっと始めました。

私が図面を描いているのを見たキミは、「お母さん、なかなかうまいんじゃない」。ちょっといい気持の私は、「そうさあ、昔は先生だったんだから」「ヒエー、どうして辞めちゃったのノ」、ドキッ、キミたちを育てるためなんて、とても言えなかった。自分たちのせいで、私が好きな仕事を辞めたなんて言われたら、心優しいキミは、どんなにか傷ついたことでしょう。そうです。私がちょっと意気地がなかっただけです。小さいキミたちの相手に倦んで、「アー、女なんて損だわー」と、世の中や夫を恨んだこともありましたが、本当は私自身の問題だったんですよ。

久しぶりのギャラを手にした日に、おみやげに買って帰ったきれいなチョコレートと、姉とキミは、一日一粒ずつ、それは大切に食べていましたね。夫は、「オレのおみやげはあんなに感激してもらったことないなあ」とひがんでいました。母親が仕事を持つことの意味もまた、キミに教えられました。十年近いブランクはすごく大きくて、仕事だって、そう簡単には来ないけど、何とかやってみるわ。キミに「ぼくは男だから……」なんて言わせないためには、私が変わらなくちゃね。

ガールフレンド

加藤 正人

前略、小田さま。

いつも率直な言葉で男たちの固定観念に遠慮なく揺さぶり

をかけるあなたに対して、ぼくは恐怖と同時に小気味の良い爽快感を持ってしまふ。あなたの言葉は、ぼくの因習にのっとった「男」

としての部分にかなりの痛みを与える。いろいろな批判的言葉のあとに、面と向かって、「え、いったいどうなのよ」などと鋭い事を言われると、これはもう痛い腹を探られていくわけで、本当に痛いのである。しかしより楽しい男女のかわり合いを求めて行く上で、この痛みは有効である気がするのだ。身勝手な男としての部分は、放っておけば膨張こそすれ、消えてなくなる事はまずない。これに歯止めをかけるひとつの要素としてあなたの言葉があるのだ。

ぼくのまわり（特に職場など）を眺めると、あまりにも歪んだ価値観が多くて嫌気がさすことがしばしばある。

お茶をいれるのは女の仕事とばかりに、たまたま女性社員がいなかったりすると、「女ども、さぼりやがってまったく」などと呆けた事をいう男。

「女ってバカだからさあ……」などと皆の前でうすら笑いを浮かべながら大声で言っている馬鹿を絵に書いたような男。

コピートを頼もうとあたりを見まわして、女性がいらない事に気付くと、「なんで女性がいらないんだ」とぶつぶつ不満を言う男。

ぼくがコピールをとっていると、御苦勞な事にわざわざ近寄ってきて、「そんなことは君がやらないで女性に頼みなさい」と、なんともありがたい指示を与えてくれる上司。それはおかしいと言えば、「当然の事をおかしいと言う君の方がおかしい」と、これまた人の言った事に對して考えてみようとするらしい。

口を開けばクルマの話しかしない若い男たち。

エレベーターの乗り降りの時、必ず自分が一番最後である事を礼節とする女性。「女性として、男性が仕事をやり易いように気をつけています」と、微笑しながら言う女性。

「やっぱり女のシアワセって結婚でしょう、だからさあ……」などと甘い事を言っている女性。

こんな人に異論を唱えようものなら「クラいノ 若くないノ」とやられてしまう。こんな、「支配者のような男」「植民地人のような女」たちがうようよいるのだ。もちろん、自己の確立した素敵な人々もたくさんいる。しかし、実生活の上では「私つくる人、ぼく食べる人」的な営みがえんえんと続いていく。

このような現状に対して怒りを持つべく自身からして、毎朝飲むお茶は女性社員のいれてくれたものだし、電話の受話機を拭くのも、灰皿を洗うのもみな女性社員というありさまなのだ。これらの仕事は、あまりにも当然といった雰囲気のうちに行われてしまおうで、「おかしいのではないか」と、こだわりつつも、その習慣に流されてしまう。「男」を会社へ二十四時間拘束することの裏返しとして「女」を主要な仕事から締め出して雑用係りをやらせる社会がそこにある。

そんな歪んだ社会の中の「男」の部分に痛みをつきつけるのは、あなたたち女性こそふさわしく、かつ効果的ではないか。

植民地根性にはさっさと引導を渡しておさらばし、愛想よく振舞う前にたたくべき所は徹底してたたき、なおかつ自由で柔かな考えを持った女性がぼくは好きだ。また、そんな女性といつまでも楽しくかわり合っていける自分でありたいと思う。

（会社員）

ボーイフレンドへ

小田亜佐子

Mr・Kato どの。お手紙拝見しました。どうもありがとうございます。中学二年生で知り合ってから十一年、やっと初めてお手紙いただけましたね。今はたまたま感激にうちふるえているのでございますよ、筆不精くん。

毎日終電近くまで残業させられ、たまの休日にガールフレンドに会えば「男なんてセッタイ信用できないもんね」と毒舌を吐かれっぱなしでほんとにご苦労さん。でも職場の非人間性にもめげず、よく健闘していますよ。そのけなげさには拍手を送りたいですね。

中学生のころ「小田とは、女と話しているという構えがなく気楽に話せる」と言われた事を今でも憶えております。ほめてもらったんだと思って私はうれしかったですよ。今でもお互い親元から通勤可能にもかかわらず、ツッパッてそれぞれ高い家賃を払ってアパートを借りたりして、ますます似た者同士ですねえ。「男と女は本質的に違いがあつてわかり合えない存在」なんて通説は私は信じませんね。という事をこの一、二年のあなたとのおつき合いを通して、断言できますよ、ナンチャッテお互いほめ合ったりして、美しい友情だねえワッハッハ。

ただし無条件にそう言うわけにはいかないのね。前述の通

り、私は「男は信用ならん」と思っている事がいっぱいあるわけでした。かつて、私と話していると楽しい、フィリング的に好きだ、だから結婚してほしいなんて言われた事があるのね、驚いたことに。私が一生仕事を続けるつもりだということを知っていながら、じゃあ自分も家事をやる（手伝うじゃダメ）という覚悟なんか全然ないのよね。ここまで来ると単純素朴を通り越して、犯罪的ね。女が毎日窮々とさせられる「今日誰が茶わんを洗うか」という具体的生活レベルに全く思い至らない。子供は欲しいと言いながら、自分が子育てをする主体だとは夢にも思っていない。自分が結婚するということの意味について、あまりに無頓着というか無責任というか。図々しすぎる。

もう一つ、「男に見向きもされないブスは死んだ方がまし」とか、人間を見てくれだけで切り捨てるなんて、これほど差別的な話ってないでしょ。こういう圧力が女に可愛い子ぶりっこさせるわけだけど、その陰でどれだけ女は怖れを抱き、卑屈にさせられることか。その点男は無神経ね。十人中九人までは「やっぱり美人、かわいい人がいい」なんて、じつに無邪気に言っているのけますからねえ。

ちょっと話は違うけど、この間夜一人で歩いていると後ろから若い男がしつこく誘ってくるのね。無視してずんずん歩いていったんだけど、運悪く人通りが途切れてしまって、腕をつかまれて強引に引

っぱられた。マジに「あ、やばい」と思った。幸い人通りのある所まで来たので、男はあきらめていなくなったけど。駅前なんかで一人で立っていると、オジサンばい人に声をかけられる、と話したでしょ、そしたらあなたは「全くシカトされるよりましじゃない」なんて言ってたわよね。冗談でも言ってほしくないわけ、こういう事もあった私としては。

自らの侵略性に対決せよ！

福本美紀子

強姦はどこの高校にもある問題である。そうであるのに、どの学校でも解決すべき問題としてとりあげられたとは聞いたことがない。被害者の人権を護るという口実で、闇に葬られているだけである。学校というところは、それだけ処女性が尊重される世界なのだ。反侵略の視点を叫ぶ男子教職員も、性の侵略には口をつぐんでいる。

今年の九月、昨年に続いて、二度目の強姦事件が表面化した。昨年のは、加害者七人のうち三人が我が校の生徒であった。私たち女子教職員には、この三人を退学させればケリがつくとは思えなかった。何故彼らが強姦なんぞをしてしまったのか、何を理解すれば反省できるのかを学校中で考えたかった。鑑別所に面会に行き、「頑張れよ」と励ましてきたという男の担任も、私たちの「何を頑張れと言うのか」という問いかけに立ち上がり、担任まかせにするなど提起した。しかし提起はしたものの学校中で考えるには至らず、三

ゴメン、またつい言いたい放題やってしまいました。でもまたやるから覚悟してネ。はてな、私の方がおかしいのかな、と考えさせられる反響を期待していますよ。

末筆ながらワインご馳走さま。今度おいしいビーフシチューの作り方教えて下さい。

ではまた、good・bye！

(出版社勤務)

人は退学した。今回は、被害者の女生徒と加害者の友人で事件のことを知る数人が我が校の生徒である。学校をやめると言い出した女生徒をどうささえ、学校に来させるか。私たちは問題をそこにたてた。停留所で送ってやると声をかけられ、車である家につれて行かれ、逃げようとしたのを止められて輪姦された女生徒は、担任に自分の正当性を訴える勇氣をもっていた。何故、他人の善意を信じた彼女がふしだら女として後指をさされ負けねばならないのか。こんな女性差別を許してはならない！

しかし、部落解放・在日朝鮮人解放・障害者解放・女性解放と、その集約としての反戦を解放教育の柱とする我が校でも、女生徒をやめさせないとりくみは困難をきわめた。事件を知る男生徒への指導がはじまった。彼らは異口同音に言った。「女も悪いやないか！」「先生も男やろ！」「女の先生が女の味方をするのはわかるけど、男はみんな同じとちがうのか！」「教師意識にのったお説教は、正直者の侵略者生徒の心に入らなかった。男子教職員はたじろぎ、自らの

心の内をのぞいてみたようである。たとえばAさんは葛藤の末、胃が痛いと言いはじめた。彼は心の中の対決の末、「僕には人殺しはできんと思ってるが、それでも本当に腹が立つたら殺人はするかもしれん。それでも強姦は絶対せんぞ」相手が自分と同じ人間やと思ったら相手の意志を無視してできるんか。それができる奴は自分も人間やない」と叫んだ。この言葉の前に生徒の男意識はぐらつき始めた。「そう言われたらそんな気がしてきたわ先生」「女の子が学校へ来たら励ましたらないかなあ」という声が出はじめたのである。「女なんてイヤと言っても強引にせまればついてくるもの」

新米センセイ七ヵ月

「父兄」、あつ今のはいい言葉ではありませんね、父母が」と、職員会議で若い男性のHさんが言い替え。二、三人が私の方を見てニヤニヤ。思わず赤くなってしまった。「父兄」はいまわしい言葉、と気づいてくれた人たち。新卒七ヵ月。これっぽっちのことがうれしい。

婦人問題を卒論にした私がナント小学校音楽専科。その私が委員長となった二日間にわたる音楽会が五日後。選曲や、だれがどの楽器をやるかを決めるのに胃がキリキリした九月。子どもの希望で楽器を決めたら、大だいこ・シンバルは、どのクラスも男子。どんなにアジっても女の子はやらない。小だいこ専門。夫婦茶碗みたい。六年生の男子、決して

「女のイヤはイイヨと同じ」と教えられつつけた男の子は、女の子と意志を確かめあうという人間らしい関係の中で、性を考えることができない。女を対等な人間と認められないのである。男子教職員も彼らと大同小異である。しかしそこにとどまっては、性の侵略者になるのだと理解した時、彼らはその点で私たちの側に立った。侵略反対のかけ声が性侵略まで含みうるか、男子教職員はそれを問われている。処女は恥じるものではないが童貞は恥ずかしいという思想と対決してほしい。

家庭科必修をかちとって八年目。今回のとりくみはその思想を一步深めたと思っている。

(大阪 N高校)

仁ノ平尚子

アコーディオンをやらない。「アコやると女って言われる」。ああ、なんとへんな性別役割分担。音楽のわからない私も、これは音楽教育の大きな問題だと思ふぞよ。

こんなふうになってしまう大きな原因は、女子グループと男子グループをひじょうにはっきりと分けてしまう教育にあるのではないだろうか。女の子―赤いこいのぼり作り、男の子―黒いこいのぼり作り、大会の選手宣誓は必ず男の子、応援団長―男の子、チアガール―女の子、林間学校の食堂の席は男の子と女の子を全く隔離している―それは異様な世界だった。

ああ、それにしても音楽会、音楽会狂奏曲。子どもには、楽しくのびのびと笑顔で歌ってほしいのに。どうか、それをつぶさないで。

どうか、どなりつけないで。職員合唱、反戦歌(?)はいけないと陰湿なクレーム。「青い空は青いままで子どもらに伝えたい」と教師が歌ってどこが悪いのだ?!——結局高らかに歌えました。

「オンガクノセンセイ」。低学年の子にはそう呼ばれている。子どもと目があうと、自然に笑ってしまう。話しかけてしま

新井純子さんへ

寺島 絃子

「障害者の人権」の授業は、私自身の迷いと、ジレンマの中で全く手探りでした。それだけに、ご批判を待っておりました。

今、私は障害者の問題は家庭科でこそ取り上げる必要があると思う反面、ご指摘のように、障害者と全くかわっていない生徒が、教室の中だけで学ぶということに、どれ程意味があるのか、障害者とかかわりを持つことなしに学習は不可能なのか、ゆれています。私は、家庭科は、人間の誕生から死までの生活、一人の人間をとるべく様々な人間関係を学ばせる教科である、と考えています。＼とともに人間らしく生きる関係をどう創っていくのか、＼いい関係を作ることと社会構造がどうかかわっているのか、＼を学ばせたいのです。

「目的を持って。勝て。できないやつは、学校をヤメロ!」と競争と管理の中で生きることを強いられている生徒たち。＼過剰適応＼ともいえる強さ、これが転動直後、現任校の生徒から私が受けた強烈な印象でした。弱みや泣きを見せることは負けること。

それは、そのまま二十年前高校生だったころの私の姿でした。ま

う。手を振ってしまう。子どもの命はまぶしく、デリケートでかわいい。そんな子どもたちに囲まれていることをかみしめると、何か信じられないような気持ち、ああうれいなという気持ちになる。自分の考えをどう実践するかが力不足。Weの創刊とともにセンセイになった私、ズボンで走り回っています。「先生、走った、やり直し」と指さされながら。

(江戸川区立 東小松川小学校)

た私は、自分で選ぶことなく、選ばされて教育学部に入り、そこから押し出されるようにして教師になり、私が教育された尺度で生徒を見、教え、指導しようとしていました。そんな私を、生徒ははねとばしました。生徒とかみあわない日々を送っていたころ、障害者や、障害者にかかわっている人々に出会いました。その方々から学びました。自分のこと、教育のこと、人と人がつながること……。差別され、生きにくくされている側に立って、初めていろいろなことが見えてきました。

新井さんが登場されているスライドは、授業の導入部で見せました。そこで生徒からホンネがドツと出て来ました。イヤな自分、差別する自分の心に出会い、自分の世界が少しばかりグラついたのです。

一年生には課題学習に「障害者問題」や「福祉」を取り上げた生徒がかなりいます。彼らは、必ず施設に出むき当事者の方と出会います。じかに触れるところから始まる学習は確かに大きいです。

家庭科の授業内容は、市民とともに作り上げていくものです。今後とも多くの方々と意見を交換していきたいと思っています。



と力強いだろう！

私も家庭科教員として「男女共修」のためにとり組みをその実現を切望する者のひとりですが、校内のそして県の、国の状況は管理体制の一端をたどり自由に考えものが言えない雰囲気がつくられつつあるのです。ひいては人勧凍結にも唯々諸々と従い、自分の立場の目先の安全しか考えぬ教員集団と化しています。これは一年おいてその中に入った者の目にはよりはっきりと感じられるのです。

家庭科内(常勤五人、講師二人)もまたしかり。国が県が「男女共修」をタブーとしているのを察知し、自分らもこの路線に乗ってまさしく「カビのはえたような家事処理知識」の授業を黙々としていきます。さらにこれに「しつけ教育」

かりの分会員の方が賛成してく
ごろ石垣りんさんの詩集に私の心
をどめたものがありました。

会 議 石垣りん

新潟県燕は洋食器のまぢ
銀色に光るナイフやスプーンや
フォークをつくる。

なげ性差別を是正し、女の解放をし、自分たちが生きやすくするための「男女共修」を女自身が押しすすめていかないのか？

夏の炎天下

教養あるはずの女子教員がなぜこ
うも「実行」し「戦う」ことにこ
だわるのか。それでも女子高生を
教える教員たりうるのか？ と憤
りと情なさとの昨今でした。

屋根も人もちいさくせぐま
り真赤に燃える火を前にして
ステンレスをけずり、身を削って
つくる。

しかし、半田さんの「たったひとりの反戦」を読み新たな勇気の

美しい食器は海の向こうに渡る

わく思いです。そして分会の中
でも有力な協力者を得、やはり「男
女共修」の実現のために戦ってい
こうと思います。これからもよき
記事、よき情報を期待します。

燕の町の食卓には
昔から二本の箸が並んでいる。
日常の暮しに洋食器が音をたてて

さくさく思っています。朝の台所
で、ふっとそう思ったのです。近

その金で食べる日本人

処理知識」の授業を黙々としてい
きます。さらにこれに「しつけ教育」

並ぶほど

語や国語)に相談すると、共修に
は賛成してもその具体的な実行に

ゆたかなメニューはまだここには

は乗ってくれません。むしろ男は

ない。

は乗ってくれません。むしろ男は

ない。

◆長い、しかしあつという間だっ
た育児休業を終え、この九月から
復帰し同時に「We」八・九月、十
月号を手に入れました。育・休明け
の身には学校は新任校のごとき淋
しさです。それから早一ヵ月半、
自分の理想と現実の差の大きさに
落胆を深める今日のごころ、「We」
の内容は私を力づけます。

中でも八・九月号の「波」によ
せる半田さんの「私の反戦」たっ
たひとりの反戦」は胸にひびきま
す。「……生きている限り、自分
に忠実に他からの強制によってさ
せられる行動を排除する……たっ
たひとりでも戦う」のことばは何

燕の町の食卓には
昔から二本の箸が並んでいる。
日常の暮しに洋食器が音をたてて

◆Hello!!

(K・K)

働いて働いて

できたスプーンは何をすくい取つたらう

私たちの受け取る賃銀について磨き上げたナイフをあててみなければならぬ

暮しのいつまでも貧しいことについて

フォークを突きさしてみなければならぬ。

まちをつらぬく中の口川の水が流れれば空も流れる

夜も 昼も 流れてゆくのに

誰かとどまることができよう

この世の中の大きな矛盾の中に

さあ長く渡した橋の上に

白いテーブル掛けをかけるのだ

その上に造った食器を並べるのだ

むこう側とこちら側が

みんな集って語りあうのだ

皿の上に子牛の舌や鶏肉のない食

卓について

どうしたらそれが並ぶかについて

(一九五七・九)

何故またこの詩を思ったのか：

それは七月号「We」の巻頭言「出機に生きる女性たち」への私の感想に通ずるものがあるように思えるのです。

〈六月二十日の日記より〉

巻頭言「出機」に生きる女性たちへ「創るよろこび」は確かに得られよう。でも、そこには、多くの矛盾を含んでいる。彼女らに支払われる賃金の額と、作られた高級品は、彼女らの生活の中での色彩とはならないものであるということ。農家は農産物においても、出来のよいものは出荷し、金に換え、残りのものを自分たちが食べる。

フランス人は、自作の小麦で工夫と努力でフランスパンを生み出した。日本人の作るパンは、輸入した小麦であるため最高の小麦が選んで使える(と……パン教室の先生が言われていた。まあ輸入問題等ありますが……)。

生産者は選ぶことなく、そこでとれるものでまにあわすしかない。「創り出した喜び」をお金で換えようとする、なんだか割に合わないなあーと思うことが多い。それは、大量生産の生み出す商品価値感覚が人々の中にどっかり根づいていて、それらの商品価値を、そのまま「創る喜び」の品へと通用させようとするからだ。私も「創る」のは好き。その気持ち

が、洋裁学校へ三年も行った原動力。三年目にはブリーツ作品、スモッキングをはどこしたジャケット、小牛皮のコート、うさぎの毛皮のショートケープ……眠い目をこすりながらも、なんとか続けられた。でも、それらの作品にか

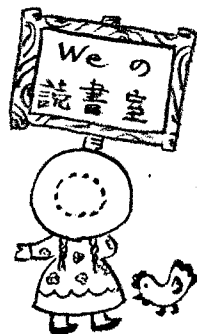
けた時間と作品をくらべ、これがいくらになるかなと考えてみる時割にあわないなあーと実感する。時には材料よりも安い完成品を見かけてしまう。

それで「創るよろこび」の品をお金に換えて考えるのが、つくづく嫌になった。「創る喜び」をお金にかえて、生活の手段にしてゆくのはできそうにもないやと、逃げ出すことにした。注文服のお店の針子になって、お金持ちの注文に応じているだけの「人形」になりきれそうにもないし……。

相手も自分も納得のゆく価格で「普通の人々」の間で服を創ってゆくことはとても無理……。

だから、この「出機に生きる女性たち」の創る喜びや、低賃金でも良い仕事と心がける心情は理解できても、その中にある矛盾を悲しく思うのです。そうして街の高級品のならぶウインドーの中に誇らしげにかざられた「きもの」の中から、手にあかぎれた彼女の姿が思い浮かび、そのきもの価格に納得はできても、彼女らに支払われた額はなんなんだろうと案ぜられるのです。

(落合伸江)



本誌でおなじみの丙十舞雅^{（セツ）}里氏、門野晴子さんが初めての本を出された。副題に「高三の息子と中三の娘と」とあるように、子どもたちの巣立ちを前に子育てのヤマ場をふり返り、まとめた本である。

いまの時代ほど、親である身が子育てに不安や迷いを抱き、試行錯誤をせざるをえないときはなかったのではないか。そうであるだけに門野さん母子の泣き笑い顛末記はいっそう新鮮で、胸にグサリと迫ってくるものがある。

門野さんは一九三七年、東京は浅草生まれの「花の中年」。高校を出、OL生活を経て結婚。続く出産・育児の「主婦」の生活。女たちの多くがたどる平凡な道を歩んでいき、子どもたちの巣立ちを前に本を書き、女性を対象とするカウンセリングをし、自己主張のトレーニングを主宰する。その活躍ぶりは、まぶしいほどだ。

けれど、門野さんがたどったのは平凡な道ではあったが、平坦な道ではなかった。

一人の男との出会いから結婚。結婚してみても初めてぶつかる男の「既得権」とその背後の因習。子どもが学校にあがってからのPTA体験——そのどれもに、彼女は素手で立ち向かい、体当たりでぶつかっていた。

た。

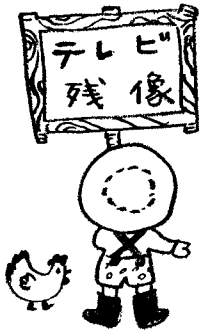
PTAに出るたび「おかしい、おかしい」を言い続けてきた門野さんは、ある日息子ともども学校での暴力事件にまきこまれる。日ごろのふれ合いと「僕はやっていないよ」の息子の声とから、徹底して息子の側につくモノ言う母親を、よってたかってつぶしにかかってくる教師と学校。さすがの門野さんも「死」を考えたというから、このやりとりのすさまじさ、おそろしさはいかばかりだったろう。どんなに、どんなにエネルギーを要したことだろう——。だが、この事件を契機にして、母子の間にはゆるぎない信頼の絆が生まれた。

親子の断絶が言われる思春期に、台所で共に料理をしながら痛快な会話を楽しむことのできる息子と娘、母親の姿（訳あって父親の姿が時たま、なのはチト寂しいが）はうらやましい。それに、こんな子育て記をまとめることができたのも——。

だが、私は、感心するばかりでなく、こんなにもびやかな母と子のかかわりを生み出した背景もきちんと見ておきたいと思う。それにはやはり、自分のからだで事実をたしかめ、モノを言う門野晴子さんの存在が大きい。そして、彼女を育て、支える夫・家族・友人・仕事の存在。自分が自分であることを求め、ある時は悔やしさに身をふるわせ、ある時は疑問と好奇心のかたまりとなり、ある時は孤立におびえつつ、自分を育ててきた女性。それらが縄をなって、今日のびやかな母子の姿に連なったのだろう。

辛らつ、かつユーモラスなこの子育て記が私には一人の女性の成長記とも読めた。

門野晴子著『わが家の思春記』現代書館、一、五〇〇円



リティと共同して、テーマを掘り下げていくこと、その際糸井が本音を引き出そうとしていること、第三は変化に富み遊び心のある画面構成。たとえば「ああ、制服花ざかり」の日——糸井重里は高い

教育テレビの「YOU」という番組で「面白い先生」を特集した。ケイハクな私は藤沢市立村岡小学校の名取弘文先生を推薦する葉書を出してしまった。高校生を中心にしたヤング向けの番組なので小学校の先生はボツにされたけれど、さっそくに番組司会者のカラー写真入りのルンルン気分の札状が来てすっかりロウバイさせられた。

「若い広場」の後を受けて今春四月から始まったこの番組、「若ものによる若ものための番組」とうたわれていて、私は後めたく秘やかに見ている。でも時々、司会的美幸チャンが「アレノ、この人四〇歳の主婦だって」とストンキョウな声で投書を読み上げたりしているところを見ると、物好きな人はいるのだ。

この番組の魅力の第一は、才気一杯な糸井重里と少々荒っぽくて明朗で臆したところのない青島美幸という二人のパーソナリティの組み合わせ、第二にスタジオの若ものたちが討論に参加し（その背後には毎週平均二〇〇通の投書がある）、同じ平場にいるパーソナ

カラーのガクランを窮屈そうに着、青島美幸は赤いネクタイのセーラー服を喜々と着ている。特徴のある制服がファッションショー形式で紹介され、その学校の紹介は、甲子園の高校野球の時のような音楽付き。中々のセンスだ。

ところで肝心の中身だが——。公正中立のNHKのこと、現在制服のある学校、自由服の学校、自由服から制服へ移行中の学校、各々の教師、生徒に制服の賛否を問うている。が、どういうわけかデザイナーは三人共制服礼賛者。「基本的な服装を経験した上ではじめて真のおしゃれが出来る」「黒いつめえりに白いカラーがのぞくのは最高の美」（そこには危険の毒があるのにねエ）、制服に異を唱える生徒も多くは制服そのものへの批判ではない。「ボックスひだはダサイ」「ダブルの打合せは太ってみえる」（で、制服の部分的改良をしたというタレントがエーユー的に出演したりする）。

だけどそんなことだけでいいのかなア。「制服を着ていると悪いことができない。どこの学校だかすぐわかる」と制服賛美者のPTA会長が言っていたが、つまり制服は人間管理の手段であり、思想表現の自由という基本的人権を奪うものではないのか。スタジオで一人の男の子が「制服は袋づめのピーマンのように個性をなくす」と述べたのだが、「服に氣を使う暇に単語を一つでも多く覚えるのが学生の本分」「皆と一緒にの方が氣が楽」との反論はすれ違う。

「あー今日も結論が出ない」と嘆く必要はない。しかしもはやパンツにしか自由が残されていないとさえいわれる学校の管理体制に迫らなかつた糸井の姿勢は不思議だ。彼のコピー「不思議、大好き」を合唱するわけにはいかない。フィーリングで流されちゃバイと思ふんだよネ 糸井サンノ

（毎土曜22・30—23・30放映中）

銀輪のうた

続 私のボランティア考

いつも私は、お彼岸の入りの日には必ずお墓まいりに行っていた。家から三十分ぐらいの所に、祖父と祖母が眠っているお寺があるのだ。友達やボランティアの人たちに頼んで車イスで連れていってもらうのだが、その時は入りの日が都合がつかず、二、三日たつてからやっと人を見つけていくことになった。

一緒に行ってくれるOさんは、大学二年生の男の子（私にはそう思われる）で、最近わりとひんぱんに介助を頼んでいる。Oさんの家は大学から二時間ぐらいかかる東京近郊の都市にある。その日も午前中は授業があるので、お昼ごろから一時間半ぐらいだったというので、十二時少し過ぎに来てもらう約束をしていた。ところが、三十分待っても一時間過ぎても、Oさんは現れない。昼食も彼と外で済まそうと思っていたので、中途半ばな状態でイライラしている所へ、他の友達が突然訪ねてきた。渡りに舟とばかりにその人に事情を話して、食事と買物に出かけること

栗原 実抄

にした。お墓まいりにはどうとう行けなかった。

Oさんから私の出かけたあとに、わびの電話がかかってきたそうだ。朝、駅で友達にバツタリ会って長話をしてしまい、電車に乗り遅れたのが原因なのだそうです。Oさんのすっぱかしは、その日に始まったことではない。前にも雨に降られてずぶぬれになったからといって来なかったことがあった。お彼岸のあとも一回、曜日をまちがえて来なかったことがある。もちろんOさんが悪気があつてこういうことを繰り返しているのではないということは、私にもよくわかってい

るのだ。しかし、ボランティアの二十四時間介護で生活しているひとり暮らしの障害者なら、こんな約束を破るようなことを何度もされたら、生死にかかわる場合もあるかもしれない。

Oさんは私に、「僕は良いボランティアにはなれない。またなるうとも思わない」というようなことを、いつも話していた。「良いボランティア」とは、一体どういう人のことを言うのか、私にはわからない。ただ、何でも障害者の言いなりに動くような人ではない

だろう。だが、ボランティアが障害者の手足にならなければいけない時もある。それはどうしても納得してもらわねばならないことだ。それに約束を破るということでは、障害者に対しても健康者に対しても、人間関係の基本として許されないことではないだろうか。

ボランティアが、大事な仕事や勉強の時間をさいて介助をしてくれるのは、障害者が日常のささいな用事をするのが、どんなに大変であるかわかってくれる部分があるからではないのか？ 私がお墓まいりに行くことは、主婦代わりをつとめている身には、どうしても欠かせないことなのだ。Oさんにそのことがわかってもらえなかったのは、私と彼のコミュニケーションが不足していたからだとも言える。それはこれから私が徐々に話していけば良いのだが、彼も無理な約束は絶対にしてほしいと思うのだ。責任を果たせる範囲で介助してもらいたいし、何か不満や希望があったら、どんどん言っていける関係を作っていきたい。



K子さんちのね子たち

トラとおばあちゃん

さとう けいこ

トラは子どものころ、おばあちゃんに飼わ

れていたように思う。隣家のおばあちゃんに
トラは格別親密なそぶりを見せるのだった。

おばあちゃんは実に苦勞に耐えた人で、植
木職のおじいさんは夫ではなく弟だった。飲
んだくれの弟が、幼児二人を残して妻に去ら
れたのを見かねて、二人の幼なごを

育て、父母を見送り、家を切り盛り
した。飲み始めれば斗酒なお辞さぬ
おじいさんだったから、家計の苦し
い時には製函会社の女工をして二人
の子を高校に通わせた。

私が越して一年あまりでそのおじ
いさんがガンで亡くなった。苦勞を
かけ通しの弟であつたらうに、先立
たれると、淋しい淋しいと繰り返
し嘆いた。そのころから、トラはおば
あちゃんの家の納屋に居すわるよう
になった。

しかし、トラはオス猫で、五キロ

泄したらしい。

おばあちゃんは、動物の世話が、食べ物に
限らないことを知って、大あわてし、トラを
納屋から追放してしまった。

それからのトラは、根氣よく毎日納屋の前
の植木棚の下にうずくまり、納屋の戸があく
のを今か今かと待ちわびている風だった。

そんなことが一月あまりも続いた後、私は
トラを抱いて、トラちゃんのおうちへこっち
でしよ、と何度もなだめるように連れ帰っ
た。そんなことがあつてしばらくしたある
日、私とおばあちゃんは秋の陽ざしの中で立
ち話をしていた。トラは、いつものガールフ
レンドのところへ出かけるべく私たちの前を
通りかかった。

おばあちゃんも、何気なく、「トラさん、
どこへ行くの？」と声をかけた。その時なの
だ。何と、トラは、振り向きもせず私た
ち、とくにおばあちゃんを黙殺して、通り過
ぎていったのである。その時、今さらなが

ら、トラの悔やしさが、私には理解できた。

それから間もなく、おばあちゃんは脳出血
で倒れ、入院した。出血の場所が深いので、
手を下すことは出来なかったが、おばあちゃ

んはよく病氣にも耐えた。一度は、かなり快
方に向かい、付添婦さんに、息子や嫁が、本
人の枕もとで、医者も駄目だと言っている、
と話したのが悲しい、とこぼすまでになった。

しかし、長い間の苦勞が堰を切ったよう
に、脳内出血は何度も繰り返して起り、半年
の闘病の末おばあちゃんは昇天した。苦勞や
善行をもつてしても、人は死に方を選ぶこと
が出来ない、としみじみ感じさせられた。

おばあちゃんの亡くなる三月ほど前、突然
春浅い日にトラは出奔した。トラはどこへど
のように旅立って行ったのかわからないが、
私はなぜかトラがおばあちゃんの道づれとな
ったのではないかと思えてならなかった。
なぜなら、勞多いおばあちゃんの生涯を終
えるのに、トラはどふさわしい道づれはない
と私には思えたのだった。

なお、前号の「ニセ父ちゃんトラ」は「偽」
ではなく「似せ」父ちゃんだと、私は思っ
ています。



男と女の新しいかわり



半田 たつ子

私の書く文章には夫の影が薄いと言われた。私もそれは自覚している。自分を晒してものを書く私は、子どもをひきずり込んで迷惑をかけてきた。でも、子どもとは日々成長する存在だから、今日の姿を活字にとどめても、明日はそれを打ち砕くであろうことを祈っていた。しかし、子どものようには変わり得ないおとな、特に夫を語るのにはばかりがあった。のろけの醜さに陥らず、自他共に傷を負わずに書く自信がなかったから。でも、今月のテーマでははおかぶりを許されまい。年齢も、学歴も、育った環境も全く異なる両親を見て育った私は、「友達のような夫婦がいいなあ」と小さいころから夢見ていた。それは、今日的に言えば、対等・平等な、男と女の新しいかわりを望んでいたということだろう。その願いのままに、私たちは対等・平等なカップルとして結婚し、三十年その関係を貫いてきた。

三十年間をちょうど半分に分かつて、前半は北陸の農村で夫の家族と、後半は東京で核家族の生活である。東京で生まれ育った私が、結婚によって飛び込んだ世界——カルチュア・ショックを受けながら何とかやってこれたのは、夫の心づかいのお蔭であった。

夫は、伝統的なムラ社会の中に、敢然とニューファミリーの旗幟を掲げた。まず、家庭科教師のすまいだからと、台所を建て直した。二人とも教師なので、前後して帰宅すると、「さあ、何をするかナ」と腕まくりをし、泥つきの里芋を洗って皮をむいたりした。お風呂ときは彼の仕事で、おきと熱い灰で上手にこたつを作った。赤ん坊が生まれてからは、おむつをまめにきちんと取り換え、入浴させ、ピンクのはおにシッカロールをうっすらとおしろいのようにはたいたりもした。

どこにでも赤ん坊を連れて行ったから、クルマを買うのが長い間の夢だった。夢がかなうと、私の日直や出張には、子守をかねて車で送迎してくれた。三人おそろいのチェックのシャツをあつらえて、スキー場でお正月を過ごしたりもした。下の娘が生まれてからは、上の娘のピアノのレッスンに四人がかりで出かけ、レッスンがすむまで、近くの川の土手で赤ん坊を遊ばせて待っていてくれた。

夫のホームグラウンドの中に、たった一人乗り込んだ私には、さまざまな思いが渦を巻いていたが、夫は私の苦悩を、そんな形で共にになってくれたのだらう。私には、「父母とは全然異なる夫婦関係を築きつつある」と自負できる生活だった。

東京に移り住んだ時、下の娘は三歳。核家族で働き続けるからには、ベビーシッターに悩みぬいた。一方、上の娘の進学は、中学・高校・大学と志望通りに運んで私たちを喜ばせた。

共に憂え、共に悩み、共に喜ぶタネが跡を絶たなかった。音楽会、ピクニック、旅行、常に家族ぐるみだった。年齢の離れた小さい娘が一家のマスコットとして笑いの中心にあった。

上の娘が大学を出、建築設計事務所に就職。仕事から帰宅は毎日

深夜となった。恒例の夏の家族旅行から「イチ抜け」で、一人で外国を旅するようになり、遂に渡米してしまった。下の娘ももう「かわいいいット」ではなくなつた。夫婦は別々の仕事に就き疾走したから、軌道はどんどん離れた。夫はモータリッ社員。私もWeを始めてからは一層、体力の限界に挑む働きを自らに課すことになった。

ふと気づくと、冷え冷えとした風が夫婦の間を吹き抜けている。

福岡・女性と職業研究会の『家事・育児を分担する男たち』（現代書館刊）によれば、家族ぐるみで家事を分担している家庭は、何かわからないが、「感じの良い」家庭であり、夫たちが、どこか「すてき」だとのこと。仕事に情熱を持ちながら、決して今日の競争社会に組み込まれず、いわゆる「出世」を志向していない。人間的やさしさをもち、いきいきと自立し、とらわれないマイペースの生き方をしている、という。こういう評価が生まれたのは大変うれしい。

結婚生活の前半で、わが夫はまさにそれだった。「夫婦でスキに行くなんで」と生徒たちに羨ましがられた。周囲にそういう例がほとんどなかったせいもある。あのころ、どなたか調査に見えたら「感じの良い」「どこかすてきな」家庭だと思われたかもしれない。

育児との縁はもう切れたが、幾つか料理のレパートリーを持ち、休日には家中の洗たくをする夫は、大正の末生まれの男たちの中では珍しい存在だと思う。でも、それで瞑すべきだというなら、このすき間風は何なのだろう？

夫の家事・育児が瞠目されるような日本だから、家事をする夫が輝くだけでも、本来はあたり前のことだ。夫の家事・育児は、妻のそれと同じく、手段であって目的ではない。なのに、夫に家事・育児をさせることを目的に掲げて、あちこちを必死で説得して回ら

ねばならぬ妻たち。欲する時のみ共に過ごす男女関係が「新しい」なら、そのカップルにはこんな苦労は生じないだろう。

私の結婚の前半の夫との幸せな関係は、多分、それ以外の面でのわずらわしい、めんどろくさい諸問題を、力を合わせて乗り越える中で生まれたものなのだ。それが、細かい配慮もいらず、ツ・カーとわかり合う気安い核家族になり、子育て期を終え、別の仕事に打ち込むうち、気がつくと共にたたかうべき対象を失っていた。さらにいま、私は、すべてをウイ書房の基礎固めに捧げ、娘は大学受験に心が奪われている。たった三人の家族が共に楽しむ時も、私たちには乏しくなった。

このことに気づいたのは、木村栄さんの『父親の自立と子育て』（汐文社刊）を読んだからである。一年前に出された『母性はひらく』の続編で、共にすぐれた労作だが、私の心にぐさっと刺さったのは、母親はめんどろくさい子どもとのつき合いを毎日くり返して親になる。男であれ女であれ、このめんどろくさをくぐり抜けなければ親になったとはいえないのではないか、という箇所だった。

恋愛期の目くるめく感情は、生活を共にする中でいつか色あせる。きらいⅡ愛情を失ったⅡ離婚Ⅱが、すすんだ関係だろうかと思え続けてきて、ああ、夫婦もまためんどろくさをくぐり抜けなければ、と気づいたのだ。奥田暁子さんの十月号の文章で言えは私たちは「はたらく・くらす」を共にしてきたが、今「たのしむ・たかう」を薄れさせたのだ。

——これは昔の人の言う「苦楽を共にする」ではないか。こんな平凡なことだったのか——。新しいとは、古くならないことだともいう。三十年の歴史を踏みしめて、私たちはまた新しく出発する。



〈We 埼玉の会より〉

十月三日に続き、二回目の読者会が十一月六日、所沢の中嶋里美さん宅で開かれました。前回同様、個人のお宅でというくつろいだ雰囲気も手伝って、活発に意見が交換されました。

まず高校の家庭科、中学校の技術・家庭科の先生からそれぞれの実践状況や問題点を話してもらい、埼玉での家庭科共修をめざした活動の現状を知る足がかりとなりました。その中で、県内の一部「有名校」になお残る公立の女子高・男子高の問題も見逃せない点であることを話及びました。

学校での細かい服装検査の実態、先割れスプーンに象徴される「センター方式」給食の押しつけなど、次々と話題が広がりましたが、そうした「……らしさ」の強制はまさしく家庭科女子のみ必修と根を同じくするものであると改めて痛感させられました。自己表

現・自己主張のできる「自分らしい」人間を育てること——それが今、教員が迫られている大きな課題ではなからうかと意見が展開しました。

この視点を単なる不平不満や愚痴のレベルにとどめず、それぞれの場で少しずつでも成果を上げていこうと話し合っただけでなく、この会が有意義かつ楽しい情報交換の場になりそうだと、参加者それぞれに心強くなった三時間でした。

十二月は二十四日午後、同じく中嶋さん宅で忘年会をかねて開きます。初めての方も歓迎します。どうぞご参加を。（長谷川美子）

〈We の発送、手伝いましょうよ〉

こんにちは。十一月号から読者になり、同時に、毎月十五日の発送作業を手伝うようになりました。

We との出会いには、八月の合宿に参加してから。本も読んでいないのに中一の娘を連れ、図々しく出かけていきました。そこで We の発送は、読者によって支えられているのを知りました。

創刊の頃は、二十数名が作業を手伝ったと

か。読者は四千名に増えたけれど、発送作業を手伝う人は減ったのかしら。まだ二回しか参加していないのでわかりませんが、創刊以来無欠席の人も二、三名いて、編集者を除いて、毎回六、七名が手伝っています。

発送作業そのものは至って簡単で、We を封筒に入れ、糊づけをし、地区ごとに紐でしばるだけなのですが、手だけでなく、口も忙しく動かして、テレビの批評あり、子育ての悩みあり、読書会の活動の様子なども聞けて、We のミニ交流会といったところ。

女性が圧倒的に多くて、私の参加中、男性は増野さん唯一人、男性ももっと来てよ。

半田さんは、皆さんの御好意に甘えてばかりもいられない、とおっしゃるけれど、私は発送を手伝うことで、We がとても身近に感じられるし（単純かな）、人々との出会いはとても楽しい。

仕事を始めても（現在、失業中なもので）この日は息抜きに行こうなんて思えるほど、リラックスした雰囲気です。

あなたも参加してみませんか。場所は京王線つつじヶ丘駅近くの調布市婦人会館分館です。手伝って下さる方、ウイ書房にお尋ね下さい。

Tel 03-336-1380（高江恒子）

・あ・ん・て・な・

★婦人白書★

10月20日、労働省婦人少年局による'82年版婦人労働白書が発表された。今回は'60年を起点に、約20年間の女性雇用労働者の就業パターンの変化や、労働条件の動きを中心に分析しているのが特徴。

平均年齢、平均勤続年数の推移をみると'60年＝平均年齢 26.3歳、平均勤続年数 4年、'70年＝29.8歳、4.5年、'81年＝34.8歳、6.4年。並行して既婚女性が増加。'70年に非農林業女子雇用者の48.3%が未婚者だったが'81年は32.1%。既婚者は11年間で67.9%を占め、若年未婚型から中高年既婚型へ移行。

女子労働力人口は前年('80年)に比べ1.1%増え2209万人になったが、労働力人口全体に占める割合は38.7%で横バイ状況。

賃金面では、1人平均月額現金給与総額は17万4895円で前年に比べ5.1%増。しかし、男性労働者の月額現金給与総額を100とした場合、女性は53.3%で、前年より0.5%下がり、男女格差は3年続いて拡大。白書は「女性雇用者に占めるパートの割合(約20%)が高いため、平均賃金を下げている」としている。(毎日、10・21付)

★道路行政見直しへ、女だけの諮問機関★

女性の立場から道路のあり方を見直しして注文をつける「暮らしと道を語り合う会」が11月17日発足。建設省道路局長の私的諮問機関で、女性ばかりの諮問機関は同省ではじめて。「安心して歩ける道路」「うるおいの空間としての道路」などについて来春までに話し合い、第9次道路整備5ヵ年計画('83～'87年度)の閣議決定前に第1回提言をまとめる。発起人は生内 玲子氏(交通評論家)と五代利矢子氏(評論家)でメンバーは計17人。(毎日、11・16付)

★教科書検定審、正式答申★

中国、韓国などからの抗議に応えるため歴史教科書の検定のあり方を検討していた教科書図書検定調査審議会(文相の諮問機関、会長、名取礼二・東京慈恵医科大学長)は11月16日の第二部会(社会科部会、部会長、大石泰彦・東大教授、19人)で記述は

正の具体的措置を最終決定、総括部会で了承した後、小川文相に答申した。

答申の骨子は①近隣のアジア諸国との間の近現代史の歴史的事象の扱いには国際理解と国際協調の見地から必要な配慮をする旨の1項目を現行の検定基準に加える②新基準は今年度検定から適用する③高校歴史教科書の次期改訂検定を1年繰り上げ'83年度に行う—というもの。

これまでの検定は是非などの議論はタナ上げ。具体的記述の取り扱いについて大石部会長は答申後「今後『侵略』の表記については原則として検定意見を付さないことになると思う」との談話を発表。

調査官が「侵略」に検定意見をいい渡す時、「近現代は歴史の評価が定まっていないので、進出などの客観的表現を用いよ」という理由をあげたが、新しい検定基準の追加で、「『侵略』—「客観的でない用語」」がなぜ消えてしまうのか。文部省のご都合主義がまかり通った感じ。

(朝日、毎日、11・17付)

★「食品成分表」19年ぶり全面改訂★

学校給食や一般家庭の献立などで栄養価の計算の基礎データとなる「日本食品標準成分表」の最新版(四訂)が10月26日の科学技術庁資源調査会でまとまった。'63年の三訂版から19年ぶりの全面改訂で、食生活の多様化に対応し食品数はインスタントラーメン、スナック菓子、ハンバーグ、シチューなど調理済み加工食品なども加えられ二倍近く増えた。また、「生」だけでなく「ゆで」「焼き」など、調理方法による成分の違いを分析したことなどが特徴。

三訂版はエネルギー計算の際、国連食糧農業機関が1947年に外国人を被験者として行った消化吸収試験に基づく数値を使っていたが、今回主な食品については、121人の日本人を被験者として得られた数値を採用。その結果、国民1人当たりのエネルギー摂取量は、従来の計算より約2%高いことがわかった。(朝日、毎日、10・27付)

★家庭科の男女共修をすすめる会、公開授業のお知らせ！'83年1月18日(火)

昭島市瑞雲中学校で全面共学している武市成子さんの3年保育の公開授業。
場所・青梅線昭島駅下車徒歩10分、参加費300円。お問い合わせはウイ書房へ。

十字路

北海道・住民虐殺防いだアイヌ兵士

日米軍の死闘、日本兵による住民虐殺など終戦直前の沖縄をテーマに、沖縄国際大の安仁屋政昭助教授がいま道内で講演の旅を続けている。

昭和二十年六月、糸満市真栄平地区で洞穴に避難していた住民を日本兵が虐殺しようとしていた。たまたま将校の軍服を着ていたアイヌ兵士（一等兵）がこれを防いだ。これは弟子屈在住の弟子豊治さん。戦後も交流は続き、南北之塔が建立された。講演の反響は大きい。（朝日、9・27）

・児童の相談相手はやはり母親

札幌市立美園小と同校PTAが、父母の教育観、子どもの生活実態を調べるためアンケートを実施した。「どの程度の教育を受けさせたいか」男子の場合「大学・大学院」がトップで40%、女子は「本人の意志」がトップで「大学・大学院」は10%に満たない。子どもに対して「困った時だれに相談するか」母親55%、友達22%、兄弟10%、父親9%、先生はたったの1%だった。（朝日、9・27）

・中学生戦間服姿でパレード

二日、石狩支庁広島町の広葉中学校祭で、二年五組の男女三人ずつの生徒が自衛隊の戦間服で校内外をパレードした。同クラスは半村良原作「戦国自衛隊」を演じ、服は担任が個人的に借りたもの。父母から批判の声があり道教会も「もっと配慮すべきだった」といっている。一方、陸上自衛隊北部方面総監部では「部隊の装備品を外に出すなどのもてのほか」と話している。朝日、10・22、山口（里子）岩手・「みちのくあかね会」 日報文化賞

社会部門で受賞した同会は、女性による、女性のための会社を設立し、就労の場の拡大と女性の地位向上に貢献したことが認められたもの。服地、シヨール、マフラーなどの作品は柔らかな色調で技術も高まった。社長の矢崎須磨さんは「社員を大切に、社員の家庭を大切に無理をしなかったことが良かった」と語った。利潤追求の企業経営とは異質で、苦勞が大きそうだが、こうした女性に声援を送りたい。（岩手日報、11・4、押切郁）

新潟・増える中学妊娠・ヤングテレホン

五十年にスタートしたヤングテレホン。ニイサンヨクナレ23・4970の番号の覚えやすさもあって相談数は一八月で昨年同期より91件（一〇・八%）増。年齢別では14歳・

15歳・17歳・18歳の順で高校生に代わり中学生がトップになった。「校内・家庭内暴力」「異性問題」が増え、妊娠に関しては昨年一年で31件が、今年は八月までに40件と激増。（新潟日報、10・5、山口久子）

神奈川・かながわ婦人元年のシンボル

六日、藤沢市江の島に県立婦人総合センターがオープンした。女性の自立と社会参加を促すこの種の施設は全国初。長洲知事は「センターをつくり上げたのはかながわの女性たちです。かながわ女性プラン、女性会議、センターという」かながわ婦人元年の三本柱が出そろった。十年後を期待したい」とあいさつ。二十一日まで多彩な開館記念行事が繰り広げられる。（神奈川、11・7、皆川鎮校）

愛知・校内暴力・非行恐れ誓約書

「学校の規則に違反したときは、学校の指示に従います」こんな誓約書をとる中学校が県内で増えている。さきがけは名古屋市立千鳥丘中学校。学校側は誓約書で生徒を締めつける考えはないと弁解。教育関係者は「安易な方法で好ましくない。力や法律万能主義で押し通す管理教育の典型例」と批判。その存在を知らなかった県教委は急ぎ実態調査に乗り

出す。(朝日、10・16、山田和枝)

京都・「婦人センター建設」を市行動計画

女性の個性と能力を発揮できる社会環境を作り、男女の平等実現をめざす「京都市行動計画」がまとまった。「平等・発展・平和」を基本とし、具体的には、市政への女性参加を高め、女性の就業率を高め、婦人自身の平等意識への努力を支えるため「センター建設」を特に強調している。(朝日、10・21)

・聞見、小学生用紙芝居寄贈

関西電力が社会科の副教材用にと京都市内の小学校、養護学校計百九十七校に「私たちのくらしと電気」という題の紙芝居を寄贈した。反原発京都連絡会は、水力、火力発電の難しさを述べ、原子力発電推進になっている点や、放射能もれの事実、廃棄物の捨て場をめぐる国際問題を無視している点で市教委に回収を申し入れた。学校指導課長は「わかりやすく、楽しい企画」と寄贈を受けることになった。(朝日、10・27、塚崎美和子)

徳島・牟岐の主婦ら児童文学の会

いつまでも子供の心を忘れないようにと海部郡牟岐町の主婦らが「牟岐子どもの本を読む会」を作って半年。会員二十二。毎月一回例会を開き、会報を出している。二十一日

は作家・松下竜一さんを招き講演会。世話人の小柴さんは「将来は子供たちに読み聞かせた。り、ストーリーテリングをやりたい」という

(徳島新聞、11・11、坂井延代)

兵庫・日本初の「平和教育」講義 神戸大

「日本で初めて」という「平和教育」の講義が二十二日、神戸大学教育学部で開講した。「平和教育の理論」「平和教育の実践」の二つの柱のもとに「平和教育の歴史」「戦争体験から何を学ぶか」「平和の思想」「教科教育における平和教育」など十三回。一回目は杉山明男教授が「川とノリオ」を題材に「平和教育とは何か」の講義をした。学生の関心高く、百八十人定員の教室は満員。

(赤旗、10・23、由良サダコ)

広島・軍縮教育シンポ

二十六日から四日間広島で軍縮教育国際シンポジウムに参加する海外代表、三十四カ国六十二人が原爆資料館を見学し、被爆者との対話集会や原爆記録映画の鑑賞などヒロシマ学習を精力的にこなした。キリン会長(カナダ)は「被爆地広島でのシンポを通じて、軍縮と平和の大切さを各国に知らせていきたい」と語った。千葉の修学旅行生は飛び入りで海外代表にインタビュー。ナガサキの傷跡

を描いた映画「せんせい」も初公開。閉会式には広島女学院の生徒が平和を願うヒロシマの心を訴えた。(中国、10・30、国重美恵子)

熊本・研修権闘争が、本番、

「ごくご・算数教室」(県教組主催)の処分問題に始まった研修権闘争は、高教組の教育研究集会も「年休」での出席をという県教委の通達が出されて本番に入った。自民党は六月「教育の正常化について」として、勤務時間内の組合活動や主任手当抛出闘争の中止を求めている。県教委の動きもこれを受けているとみられる。県教組は処分の後、法廷で決着させたい構え。(熊日、9・29、中山そみ)

沖縄・教員採用に男女比配慮を

県小、中学校長会代表は、教育行財政、給与、人事移動に対する意見書を県教育庁に提出した。その中で、現在小学校では八対二と女性教師が圧倒的に多く、学校運営に支障をきたしているため、教員採用については長期的展望にたって、成績順ではなく男性何%女性何%と別途に考慮することが望ましい、としている。これに対し県教育庁は「学校運営上問題はあと思うが、男女平等の中で検討する」と難色を示している。

(琉球新報、9・15、吉浜ヒロ子)

▼We 11月号、私の文を載せていた。

ていただき本当にありがとうございました。早速父の仏前に供えました。その時母と「おじいちゃん私は私が家庭科を専攻した時に、秩父に勤めていた時の家庭科の先生の話をよくしておられたけど、その先生のお考えは三十年も前なのに非常に進んだ考えをもっておられたよね」などと話をいたしました。三十余年前の秩父農林高校に勤めておりました時に御一緒だった家庭科の先生のお考えは、父を通してまだ小学校にも入学していない私に大きく影響を与えてくださったわけですね。私はその先生のお名前も知らず、ただえらい方がいらしたのだなと思いた御誌に深く感謝申し上げます。

(埼玉 脇美智子)

ところがそんな話をした後、We 手にとって目次を見ていた母がびっくりしたように「大森さんが、大森和子さんが出ているじゃないの。この方よ、秩父の家庭科の先生は」と叫びました。びっくりいたしました。母は父から聞いてお名前を覚えていくくれたので、まずまちがいはないことと思えます。偶然同じ号に大森先生の文が載っていたということは、何かの糸のようなものが感じられます。私の文がなければ母もWe にとることもなかったと思いますし、私はいつまでも間接的に教えをいただいた先生のお名前も知らずじまいだったと思います。現在は家政大学にお勤めとか、ぜひ一度お手紙をさしあげたいと思います。こんな偶然を運んでくださす。御誌に深く感謝申し上げます。

でそんなつまらぬものだったのかと、かえって見直したい気持ちになって来たのは不思議でした。世の中の労働を考えてみましてもお金が入るといふメリットを除けば、決して楽しくも何ともない労働の方が多くくらいで、余程個性のない仕事でない限り楽しくて仕方ない労働なんてそうざらにあるとは思えません。それらに比べて家事ほど面白く、楽しい労働もありないのではないかと思います。そして、初めて子育てという一つの家事にとりつかれていく姿にも見られるように、こんな創造的な楽しい仕事はないのにお金が入らないというだけで(女の経済的自立につながるという)軽んじるのは何とも惜しいと思えてしまいます。

人間がゼロから育て、一歩一歩成長していくことの神秘に魅せられて、毎日毎日を味わいながら育てた六十冊の記録、子供と遊ぶために新しく考察した一〇〇種類を越すオリジナルゲームの数々、(これは二冊の本にして出版し、カードの出版もしたので)など、経済的な意味では微々たる価値しかないのですが、私にとっては何にも替えがたい宝であり、生きたあかしになっています。その気になってやれば家事ほど女の思い通りになる(手抜きも含めて)労働もないと思えて来た私にとっては、全面的には賛成しかねる御意見が多かったように思いました。

▼11月号の半田さんの貴重な文章の中で介護の問題が書かれてありましたが、病む私は三十八年間母の介護のうで生きて来られたようなもので、その母の生活、人生を考える時ただただ頭が下がり人間として尊敬するのみです。我が母をこのように書く事はとてもおかしいと思われるかもしれませ

んが。今その介護を他人の
家庭の中で受けている私
は、その中で人間が行う尊
い行為を感じながら凡人の
悲しさ生きていることは一
何であらうかと考える毎日
です。そして介護に対して
社会の中で大きな波を起こ
してほしいとも思います。

(熊本 森章二)

▼当方、学生時代より「家
庭科」について、なぜ我々
男が参加させてもらえぬの
か、これは男性差別であ
る。いや、人間差別である
と考えていました。幸いな
ことに小学校時代の家庭科
での自信が学校外でのそれ
にまつわる作業を苦にさせ
ずにいましたので、今連れ
合いと家事や生活をうまい
ぐあいに助け合っています
が、もしそうでなかった
ら、きつと性差別に首をか
しげることもなく「主人」

▼「家事労働を問う」という号を
手にし、まず思ったのは表紙のヒ
トのように自由にのびやかに、お
だやかな顔をして、りきまずさら
りと家事労働が出来ればなあとい
うことでした。号を重ねる毎に、
馬場さんの表紙が好きになってい
きます。創刊号のどちらかという
と暗い硬い表情はウソのよう。き
つと号を重ねる毎に、馬場さん
のびやかに大きく成長されたので
しょう。

そう思いつつ表紙を拝見してい
ます。私もそうですが、多くの主婦
にとって家事労働は、とても大切
なこととわかっていても時にはた
まらなくイヤになります。半田さ
んが波でふれていらっしゃるよう
に、女性蔑視、家事蔑視の社会風
潮と、まだまだ女性の肩にのみず
っしりと重くかぶさってくる家事
労働の大変さを思うだけで疲労困
憊して、前途多難だなあとため息
すら出てくるのですが、でもだか
らこそ表紙のようにさわやかにさ
らりと、ヒトとして当然のことと
して男も女も家事労働に手を出せ
るような旋風をまき起したいです
ね。Weがその中心的な役割を果た
せればいいなあと期待しています。
先日藤沢で「声なき叫び」を見
てきました。私一人ではなく、是
れら夫婦とも見たいと子供づれで
出かけてきたのですが、レイプは
女の人間性・尊厳そのものを傷つ
けるということに男はもちろん女
である私もつきつめて考えてこな
ばかりです。(沖繩 小嶺代志子)

▼Weの創刊を待ち遠しく思ってい
たものの一人です。これまで「家
庭科教育」を長年愛読しておりま
したが、編集者が変わった後は、
私たちが求める家庭科について触
れられておらず、早速書店へ中止
の連絡をしました。家庭科教師十
名で組織する小さな研究会ですが
Weの内容はこれからの研究の方向
を示唆してくれるすばらしいもの
です。(神奈川 山崎京子)



◆医学、薬学の分野でいま最も注目を集めているのはプロスタグランディン（P G）だという。さまざまな病気に関係があり、血管、子宮の収縮、弛緩にも関与している。最近、日本の薬品メーカーがこれを加工して人工中絶薬を開発した。座薬として腔に入れるだけで驚くほど有効という。厚生省では認可を審議中。

◆優性保護法改正が渦巻いているさ中、生命を考えてみたい。人間に生殺与奪の権があると私は考えない。肉食動物だって食以外の殺しはしないという。人間においても自分をぎりぎり守る場合のみ許されるのではないだろうか。この枠を外すことを自分に、人間界に許してしまったが最後、人は心をなくし、社会は荒廃すると思う。（中野）

◆16ミリの記録映画「新せきけん物語」（青林舎）を見た。琵琶湖の赤潮発生に対し合成洗剤追放。粉石けんを自分たちで作る、売る、使うという運動の中で「つまり、洗たくというのは、水が主だということに気がしました」別の地域では、男性も職場が終わると交代で石けん作りに加わるようになっていた。「今まで、運動していると、反対っていつていただけだったけど、創るって何かおもしろいから加わっているんだ」チョットわりきりすぎる部分もあるけど、ホントのところをいっている。

◆Weにもそんな気持で参加して下さったら楽しいな。二年目もよろしくお願います。（馬場）

◆Weの初めての新年号。今まで掲げてきたテーマは大きく、重要なポイントが残されています。二年目は、それらをきめ細かく取り上げていきたいと思います。

◆一年目のWe、申込み一号は樋口恵子さん。二年目は増野潔さん。皆さんの継続申込みをお待ちしています。

◆オープンした神奈川県人総合センター、すばらしいです。開館記念事業の一つとして、公開討論会「男の本音」が11・20に開かれWeの読者の方も多数参加されました。力仕事をしていた男性にお茶をいれてあげ「女らしさ」を美德とする意見に、塚越さんがそれは男女を問わぬ「人間らしさ」と発言。男性からのこの声をうれしく思いました。

◆次号は「くらしをいとおしむ」です。（半田）

告知板

▼目標をクリアーしたとはいえ、契約更新期を迎えて不安と期待でいっぱいです。継続購読を心から願います。水色のチラシを、あなたのお友達にあげて下さい。お一人が新しい読者を一人ふやして下さいませ。チラシはこの他にピンクのものでできています。お仲間にすすめて下さい。数を知らせて下さればすぐお送りします。多くの方が、無名の方の文にキラリと光るものがある

と言われます。Weに最高の讃辞です。

▼10月号「報告」で紹介した拘禁二法阻止のためのパンフ「私たちは告発する」が発刊。大多数の人が知らない事実—留置場、拘置所で、とらわれた人がどう扱われているか、なぜ法を阻止しなければならないか—が大変よくわかります。ぜひ一読を。問い合わせ先、東京弁護士会拘禁二法対策本部

TEL 03-581-2201 (代)

新しい家庭科—

Vol.1 No.9 1982年12月20日発行
¥500 (年間購読料 ¥5,000)
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎03(326)1380 振替 東京6—59867
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい
Weの仲間をふやして下さい

“4000人の固定読者の方に核になっていた
だこう” We出発に際しての悲願は、9月に
達成できました。編集室の戸棚には皆さんの
振替のファイルが2段に並んでいます。
そこに置かれたるまに、両目が入りまし
た。どうもありがとうございます。

Weはいま、2年目に向けての準備を進
めています。定価はこのままで増頁し、より
フレッシュで、あなたの心に深く食い込む
雑誌を志しています。どうぞ、引き続きWe
の仲間であって下さいますように。最後の
頁に振替用紙を綴じ込みました。ご利用下
さい。また、あなたのお友達にも、ぜひお
すすめ下さいますように。あなたのお力添
えを、心からお願いいたします。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

〈書店各位へ—地方・小出版流通センターに窓口を開いておりますので、ご注文の時はご利用下さい。〉

——Weの取り扱い店一覧—— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい

(11月20日現在)

旭 川 富貴堂
盛 岡 東山堂
仙 台 こどもの本のみせ・プーの家
ハ重洲書房
ポラン
萩書房
高島書店
泉 ホビット館
秋 田 加賀屋書店
福 島 岩瀬書店
西沢書店
群 山 十字屋書店 大月店
藤 岡 川島朝日堂
結 城 太陽堂
水 戸 ツルヤブックセンター
浦 和 須原屋
岩瀬書店
船 橋 前原かっぱ
東 松 山 比企文化社
浦 安 原勝書店
東 京 藤書店
〈千代田〉 ビッピ
日成堂
書肆アクセス
三省堂本店
〈文 京〉 鈴木書店
〈新 宿〉 模索舎
ブックスミヤ
三省堂新宿西口店
〈杉 並〉 柏木書店
木風舎
信愛書店
プラサード書店

〈萬 飾〉 宏精堂
〈世田谷〉 やまべ書店
〈三 鷹〉 第九書房
〈小金井〉 渡辺書店
〈府 中〉 国府書店
〈國 立〉 東海書店
〈小 平〉 和中書店
〈八王子〉 くまざわ南口
〈清 瀬〉 マルオカ書店
〈高 尾〉 啓文堂高尾駅前店
川 崎 北野書店
横 浜 有文堂
有隣堂
相 模 原 ブックス上溝
鎌 倉 たらば書店
相模大野 相模書店
藤 沢 豊元書店
静 岡 百町森書店
浜 松 中田島書店
一 宮 文正堂書店
名 古 屋 ウニタ書店
江 南 青雲堂
新 潟 栗山書店
白石書店
小 千 谷 島谷書店
金 沢 白山書店
うつのみや
セールスセンター
富 山 清明堂書店
岡 谷 笠原書店
福 井 ひまわり書店
じっぶじっぶ
吉川陵文堂
山本書店

福 井 春江書店
品川書店
岐 阜 宝島
奈 良 海老山書店
大 阪 旭屋書店本店
ユーゴー書店
増田書店
西坂書店
京 都 松香堂書店
宇 治 大久保京都書院
長 岡 京 恵文社神足店
神 戸 幾久書店
尼 崎 宣文堂書房
米 子 今井MC本店
広 島 やまびこ書店
いづみ書店
山 口 白藤書店
松 山 去来社
徳 島 雄徳堂徳野書店
北 九 州 北九州書店
熊 本 高校生協
三章文庫
大 分 開書堂
紀伊國屋書店 札幌、新潟、新宿、
渋谷、玉川、住友、吉祥寺、川
越、船橋、梅田、岡山、広島、
松山、福岡、熊本
大学生協
畜産大学、福島大学、新潟大学、
群馬大学、宇都宮大学、日本女子
大学、東京大学、東京家政大学、
愛知教育大学、金沢大学、立命
館大学、宮崎大学、高知大学